
透明駒
入門
Paradise Books 16

目次

まえがき　若島　正　……2
透明駒ルール　會場健大　……4

解説篇
透明駒Ⅰ（詰将棋篇）　會場健大　……14
練習問題　……20
透明駒Ⅱ（協力詰篇）　馬屋原剛　……22
練習問題　……33
透明駒Ⅲ（フェアリー篇）　高坂　研　……35
練習問題　……57
透明駒Ⅳ（レトロ篇）　高坂　研　……60
練習問題　……65

解答篇
透明駒Ⅰ　練習問題　會場健大　……68
透明駒Ⅱ　練習問題　馬屋原剛　……74
透明駒Ⅲ　練習問題　上谷直希　……80
透明駒Ⅳ　練習問題　高坂　研　……98

フェアリールールの定義　高坂　研　……107
作者名索引　……120

透明駒入門

高坂　研　責任編集

まえがき

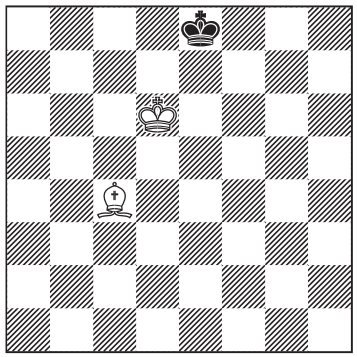
若島　正

「詰将棋のアイデアはどうやって思いつくんですか？」というのは、人からいちばんよく訊ねられる質問である。アイデアはどこからでもやってくるし、盤や駒が目の前になくても、言葉だけのアイデアもある。そしてときには、小説を読んでいてアイデアを思いつくこともある。

英国の現代作家クリストファー・プリーストの *The Glamour* (1984)（邦訳『魔法』ハヤカワ文庫 FT）という小説を読んでいたときのことである。ネタバレになるので気が引けるがお許しいただくと、この小説世界ではいわゆる「透明人間」たちが少数存在する。この透明人間たちはお互いの存在を知っているが、普通の人間からは見えない。そういうわけで、普通の人間である語り手にとって、透明人間たちのふるまいは怪奇現象としか思えない。この傑作を読んですっかり感心すると同時に、わたしの頭には、これをチェス盤の上で考えるとどうなるだろうというアイデアがひらめいた。ある盤面配置で、その配置されている駒のうち、いわば「透明駒」が何枚かあるとどんなことが起こるか。透明駒が単に動いたとき、盤上に何も変化は起こらない。透明駒が普通の（つまり、見えている）駒を取ったときには、その駒がふいっと消える……。

透明駒 (Invisible) はそのときにできた。定義を確定するのは、覆面駒 (Variable) というフェアリー駒を以前に作っていたので、それを自然に拡張させるだけでよかった。問題は、こうやって作った新しいフェアリー駒が、はたしておもしろい結果を生み出せるかどうかだ。そこで最初に作ったのが、次の例題である。協力の１手詰（黒白と指して、黒のキングをチェックメイトにする）、透明駒は白と黒に１枚ずつ。

1　　Tadashi Wakashima
2009



H#1　　(2+1)
Invisible 1+1

1.Kc8!［これは実際には 1.0-0-0 つまりキャスリングをしていて、Rd8 と、黒のルークが d8 に姿を現す。］
1..Ba6!#［1..Ba6 と指せたということは、白のキングにチェックがかかっていなかったことになる。つまり d7 に何か白の駒があったわけで、それはナイトである。なぜなら、他の駒では黒が初手にキャスリングすることができないからだ。こうして白の Sd7 が出現するので、1..Ba6 はチェックメイト！］

こんな簡単な例でも、充分におもしろいという実感を得た。これはものになる。そうして、2009 年にブラジルのリオデジャネイロで開催されたチェス・プ

ロブレムの世界大会で、毎年日本参加者として提供している創作コンテストJapanese Sake Tourney（賞品は日本酒）にこの透明駒を課題として出してみたところ、大好評で集まった作品もレベルが高く、透明駒はフェアリーの世界に居場所を確保したのだった。

その後で、それを詰将棋に移植したものをTwitterで発表したところ、新しいもの好きのフェアリー愛好者たちから歓迎され、短期間のうちに詰パラで作品展が開かれるまでに発展した。もうそれから10年以上が経過したことになるが、このたび『透明駒入門』という一冊の本にまとまることになり、提唱者としては嬉しいかぎりだ。

これからも、見えない世界がさらに探索されることを祈って、乾杯！

透明駒ルール

會場健大

透明駒は非常に直感的なアイディアに基づいて創案され、かつその直感を矛盾なくパズルの世界に落とし込むために極めて理屈っぽいルールが制定されている。

したがって、ルールの導入に際しては、素朴な理解とうるさい規則、そして個別の事例と一般論との間を何度も往復せざるを得ず、そこが初心者にとっての敷居の高さを生み出しているポイントであるように思われる。

本稿も多分にそうした記述の例に漏れないが、まずは初めて透明駒に触れる読者を想定して、透明駒のコア概念についての感覚的な説明から筆を起こしたいと思う。したがって、冒頭の数ページを読んだだけでは体系的なルールが見えてこないであろうことを先にお断りしておく。明文としてのルール全体は、ある程度このコア概念になじんでからでないと理解が難しいからである。

透明駒のコア概念

見えない駒が存在したとしても、論理的な推論によって、詰みなどさまざまなことが証明できる状況がある、ということ

まず、見えない駒がある、という状況では何が起こるだろうか。そのとき、その駒がどんな種類の駒であるか、そしてどこに配置されているか、客観的な情報は何もないことになる。

見えない駒が１枚だけのときには、残りの駒からの引き算でその駒種はわかるのではないか、と思われるかもしれないが、詰将棋においては、玉方の持駒が「残り駒全部」と表示されることに注意しよう。この残り駒は、今存在している見えない駒をさらに除いた上での残り駒である、と考えることにすれば、現時点ではブラックボックスであるということになる。したがって見えない駒の種類を特定するために玉方の駒台や駒箱を確かめることはできない、と取り決める。腑に落ちないかもしれないが、これはパズルを興ざめなものにしないための約束ごとである（もっとも、もし仮に引き算である１枚の駒が見えなくなっていることが判明したとしても、そのことで駒種が特定できたと考えるべきではない。その駒は成駒になっているかもしれない）。

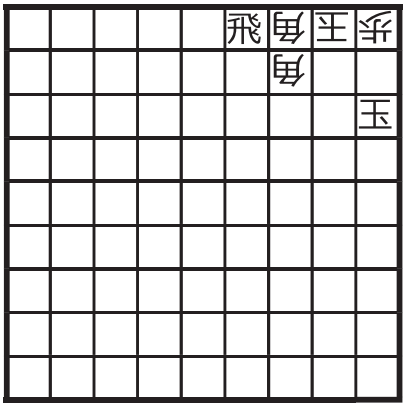
そのように客観的な情報がない状態においては、双方とも駒の種類や位置について何も知らない、と決める。つまり、透明駒がどこの何であるか後手は知らないが先手は知っている、というような状況はないとする。互いにもっている情報は同等であり、その情報とは盤上で起きたことから客観的に導かれる情報のみである。

したがって、先手の駒のなかに透明駒が１枚ある、という状況においても、先手は自分の透明駒がどんな駒でどこにいるかわかっていないことになるので、それをつまみ上げたり、ましてひっくり返したりなどということはできない。そこ

で、約束ごととして、透明駒を動かしたい場合には「透明駒を動かした」ということを宣言する、ということにする。つまり、どこの駒をどこに動かしたか、ということは指した本人にもわからないし、成ったり、また逆に不成だったと主張することもできない。この宣言をしたことを、棋譜では「X」と表記することにする。これはつまり、位置も種類も不明な駒で一手消費したということのみを示すものである。

これはかなり不自由な制約なので、この駒を使って何か意味のあることをするのは困難だと思われるかもしれない。そこで、いくつかの穏当な仮定をおくことで、推論の手掛かりを増やそうというのが以下のお話。

たとえば図の局面で、先手が透明駒を１枚もっており、ここで透明駒着手を行ったとしよう。



持駒　なし

X

見えない駒を見えないままに着手したので、当然盤上に見える変化はない。しかし、少し考えてみると、もしその着手が 22 の地点以外にされたものだとしたら、先手は王手放置の反則を犯したことになる。透明な駒がある世界で、もしかすると知らないうちに反則を犯しているかもしれない、と考えるとさすがにきりがない。そこで、透明駒の着手の可能性の中から、反則はあらかじめ排除されているものと考えることにしよう。すると、22 の地点に着手されたものであることはまず確定したうえで、さらに 22 に桂を打つ手、22 桂不成とする手は行き所のない駒の禁により除外され、22 に歩を打つ手も打ち歩詰のため除外されることになる。すると、残された着手の可能性は

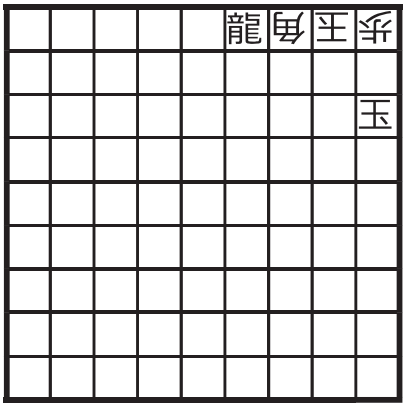
22 歩不成
22 歩成（または 22 と）
22 香
22 成香
22 桂成（または 22 成桂）
22 銀不成
22 銀成（または 22 成銀）
22 銀
22 金（駒打ち または 移動）
22 飛不成
22 飛成（または 22 龍）
22 飛

ですべてであることになり、そのいずれでも後手玉は詰んでいる。

このように、何が指されたかわからない場合でも、その手が反則ではない、という控えめな仮定をおくことで、状況に

よってはこのように「少なくとも詰んではいる」ということは証明できる場合がある。これが透明駒の基本アイディアである。

もう少し取り組みやすいパズルにするために、詰将棋においてはもうひとつ仮定を付け加えることにしよう。チェスプロブレムならともかく、詰将棋では攻方に王手の義務がある。したがって、攻方の手に限っては、この王手義務も満たしているものと考えることにすると、われわれのなじみ深い詰将棋の世界とスムーズに接続できる。この仮定をおくと、上図は１枚整理できる。

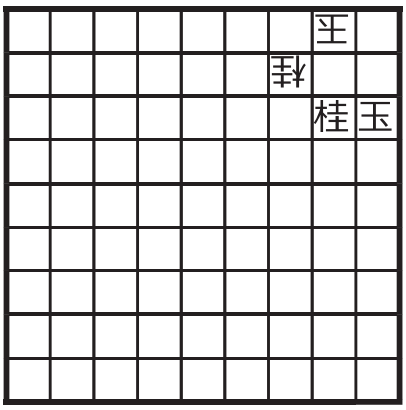


持駒　なし

X まで１手。

この X には、上図の可能性に加えて、22 角成の可能性も考えられる。しかし、攻方の手は原則として反則でない王手である、との仮定から、22 角不成や 22 角の可能性は排除されているので、これで詰みとなる。

この仮定をおくと、さらに次の図も１手詰として成立する。



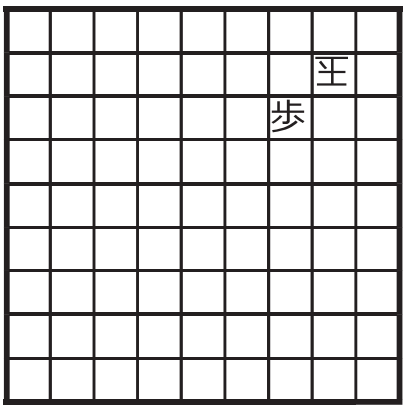
持駒　なし

X まで１手。

これまでに示した図は「31 角の利きを止める手でなければ合法にならない」ということを利用していたが、先手の手は合法な王手の集合の中から選ばれるとすれば、着手は 22 の地点でなくてもよいことになる。本図の場合、X の可能性の中にはたとえば 12 角や 33 桂、91 飛のような手も含まれることになり、そのいずれでも１手詰となる。

お分かりのように、先手の合法な手がすべて王手に限られるという状況は極めて限られているので、このように王手であることを仮定してしまうことで、詰将棋としての作図はより容易になり、むしろより多くのことを表現できるようになる。

透明駒がある状況下では、普通駒の着手も同様に上記の仮定の影響を受けることに注意が必要である。たとえば次図のような状況を考える。



持駒　なし

（攻方に透明駒１枚）

　このとき、32 歩成が王手になるのは明らかである。しかし、攻方の透明駒が１枚あるとすれば、32 歩不成も可能になる。33 歩の陰である 44 ～ 99 に透明な角（馬）がいる可能性があるため、32 歩不成が王手である可能性は排除されていない。透明駒の世界では、ある手が合法（かつ、先手なら王手）であるという仮定を満たしている可能性がある手は指せる。のみならず、ここが一番重要な点なのであるが、32 歩不成という手が指せた以上は、実際に 44 ～ 99 の角（馬）で王手したのだろう、ということが情報として獲得される。

　つまり、透明駒というパズルは駒の着手が先にあるパズルである。実際に何か指してみて、それが実際に合法であったり、合法の王手であったりするならば、その透明駒についての可能性がどんどんと限定されていく。

　このように、指せたのだから合法だ、と決めて、この手が指せたからにはこうであるに違いない、としていく思考法はふつうの将棋のそれとはまったく異なっている。ここが透明駒のルールを理解するうえで最初の関門かもしれない。

　ここまでで一度透明駒のコアとなる考え方を整理しておく。

> 透明駒は見えない駒である。
> その着手は、互いにどの駒をどのように着手したか（自分でも）わからないこととする。
> ただし、それが反則手ではない可能性が存在する限り反則手ではなく、またそれが攻方の手であれば、王手である可能性が存在する限り王手である。
> その仮定と、盤上の目に見える情報を併せて考えると、透明駒とその着手が含まれていても、詰将棋が成立する場合がある。

駒取りについて

　さて、透明駒をどのように着手するかについては決まったが、駒には着手される以外に相手に取られるという機能もある。これについても解釈を整理しておかなければならない。

　透明駒を含む世界において、駒取りは次の４通りが考えられる。

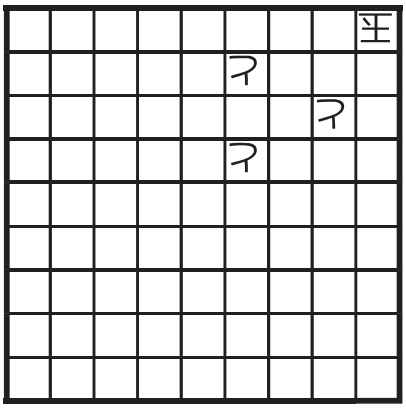
１）普通駒が普通駒を取る
２）透明駒が普通駒を取る
３）普通駒が透明駒を取る
４）透明駒が透明駒を取る

　このうち、１）についてはあまり考える必要はないだろう。問題は２）３）４）のケースである。まずは、分かりやすい２）について考えよう。透明駒が普通駒を取るケースでは、その普通駒が取った

側の駒台に移動する、という現象は視覚的に認識できるはずである。つまりこのときのみ、瞬間的に透明駒が存在している地点についての情報を得ることができるだろう。

ということで、透明駒が普通駒を取った場合にのみ、X の前に地点をつけて表記してもよいこととする。たとえば 22 の駒が取られたのであれば、22X のように記述する。位置は書けても、種類はわからないため X と表記するのはこれまで通りである。

取った場合、というけれども、取ってよい場合、取ってはダメな場合、というのがあるのではないか、と思うかもしれない。これは、「駒を取る着手が不可能でない限り取ってよい」ということに決めておくのが一番自然である。例を挙げる。



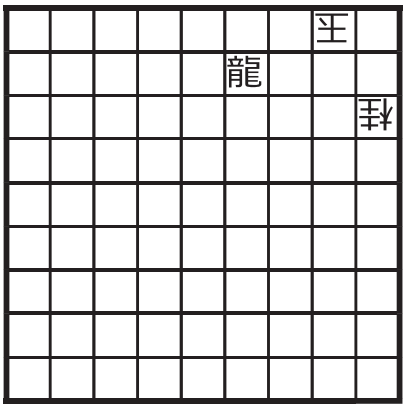
持駒　なし

攻方に 1 枚透明駒があるとする。先述の通り、攻方の着手は王手義務を伴う（今後、断りがない場合これを基本とする）。このとき、23X、44X は可能である。この駒取りを行いながら、同時に王手をかける手が存在するからである。しかし、42X は不可能である。42 の地点から 11 玉に王手をかける駒は存在しない。ただし、攻め方に透明駒が 2 枚ある、と仮定すると 42X も可能な着手となる。たとえば 33 角、22 飛のバッテリーが存在して、開き王手で 42 のと金を取ったのかもしれない。

玉方は王手義務がないため、玉方の透明駒で普通駒を取ることは（王手解除の手でありさえすれば）もっと自由にできる。

たとえばこの駒取りの理屈を使うと、次のような図ができる。

若島　正



持駒　なし

（攻方に透明駒 1 枚）

13X、11 玉、23 桂まで 3 手。

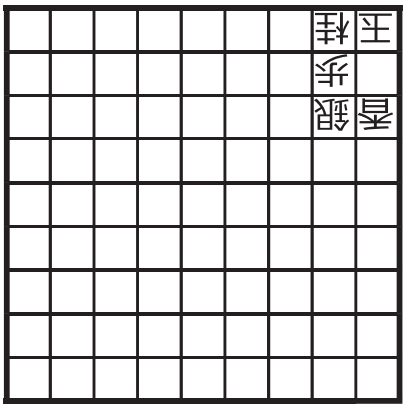
攻方に 1 枚しかない透明駒で X と王手してみても、たとえば 12 玉と逃げられてしまう手がある。つまり、攻方の手が合法な王手であることしかわかっていないからには、それはたとえば 22 歩のような手である可能性があり、その可能性がある限り 12 玉は反則にならない。

そこで、13X と桂を取る手が好手に

なる。13 の駒を取りつつ王手がかけられるのは桂しかないから、このとき 42 龍の利きは通ったままである。11 玉の一手にいま取った桂を打てば詰みとなる。

3）の普通駒で透明駒を取る、というケースについて考えよう。

透明駒の手順を進めていく中で、相手の透明駒がそこにいないという可能性はない、というマスがあり得る。ここに普通駒が動くときには、必ずその透明駒を取っているだろう。たとえば次図の局面。



持駒　なし

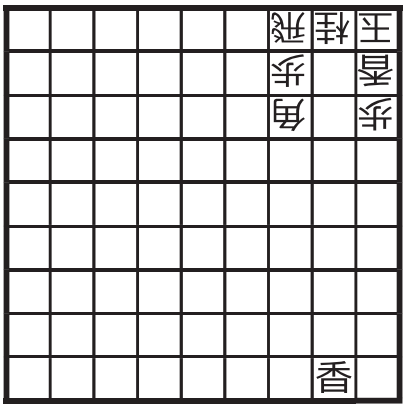
（攻方に透明駒 1 枚）

X、12 銀

まず、初手の X は合法な王手の中のどれかであるが、13、21、22、23 の駒が取られずに残っている以上、これは 12 から何らかの駒で王手している可能性しかありえない。したがって、次の 12 銀はこの駒を取っている手でしかありえないことになる。このような場合、透明駒が後手の駒台に乗っているということが確実な情報として得られる。

次に、もっと一般的な場合について考えよう。ある駒が相手駒のいるマスに進む手は反則ではないから、普通駒が相手の透明駒のあるマスに動くという手は合法な手の集合の中に入っている。ということは、逆に言えば、位置が判明していない相手の透明駒がある場合には、普通駒が盤上で動く手は意図するかせざるかに関わらず、つねにこれを取っている可能性がある。

問題は取っていることを（あるいは取っていないことを）何らかの形で主張できるか、ということである。まず、透明駒は指すときにもそれをどこで拾い上げているのかわからないのであるから、取るときにもその感触はないと考えるのが自然である。すると、意図せず透明駒を取っているかどうかは取った側にもわからない、というべきであろう。ただし、透明駒の「指した以上指せる」の原則を用いて証明する手段はある。盤上を移動する着手のあとに、透明駒を取ったのでなければ不可能な手を指すのである。たとえば次図。



持駒　なし

（玉方に透明駒 1 枚）

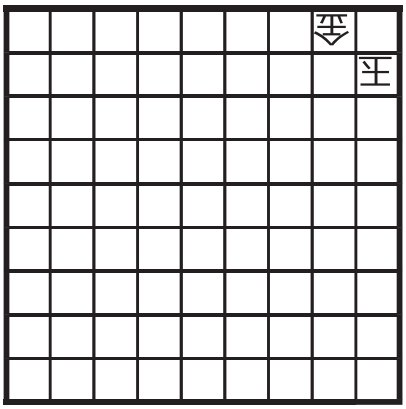
22 香成、同角、X まで 3 手。

上図では、玉方にのみ透明駒があるのであった。しかし、3 手目に攻め方は X と透明駒の手を指している。乱暴なようだが、3 手目に X という着手をできるためには、初手で玉方の透明駒を取ったのでなければならない。そこで、初手の駒取りが証明される。そしてまた、この X は 23 桂でしかないので、詰みであることが証明される。

この点も初心者にとって理解が難しいポイントの一つである。直観的には、駒取りが行われたことの証明をまず試みて、証明された場合のみ打てる、とするほうが自然に見えるからだ。しかし、これは次のように考えてほしい。透明駒は、それが配置されている可能性が排除されていない地点にはすべて存在しうる。そして、駒台、という場所は透明駒が存在しうる地点のひとつである。そう考えると、攻方の駒台への移動も、盤上で X と動かしたときに位置が変わっているのと同様に地点の移動に過ぎないのであって、その駒をコントロールするプレイヤーが変わるというのは副次的な効果であり、証明を要するほど重大な事態ではない。

左図でも、先手が盤上の移動の手を指した時点で、透明駒が存在しうる可能性のひとつに攻方駒台が加わることは否定できない。攻方はその後自分の手番が回ってきたときに、透明駒についての可能性の中からひとつを選択したに過ぎない。実際、玉方は 2 手目に 22 X として透明駒が攻方に渡った可能性を消しておくことができればよかった。ただし、本図の配置では不可能である。

最後に 4）について考える。透明駒が透明駒を取っているケースは、おおむね 3）のケースと同様に考えてよい。つまり、透明駒を取っているのだとしなければ不可能な着手がなされたとき、透明駒が取られたことは証明される。違いは、その取りを行った駒も透明なので、少し推論のややこしさが増す程度である。
たとえば次図。



持駒　なし

（攻方に透明駒 1 枚、玉方に透明駒 1 枚）

この図で X、11 金、X と進んだとすればどうだろうか。2 手目に 11 金として王手を解除できるということは、初手の X は 11 への着手でしかありえない。したがって攻方の透明駒は 2 手目に金で取られている。それでも 3 手目に X と指せるということは、初手は 11 への着手であるだけでなく、そのとき 11 にいた玉方の駒を取っているということになる。さらに、したがってその手は盤上の移動であった（11 への駒打ちではなかった）ということがわかる。

これが例えば以下のような手順だと事

情が変わる。

Ｘ、22 金、Ｘ

　このときは、初手のＸがたとえば 32 竜のような手である可能性がある。すると 3 手目のＸはこの竜を滑り込ませる 21 竜や 23 竜の可能性も排除できない。したがって透明駒を取ったことは証明できない。

　以上で駒取りに関するルールを整理することができた。これらは基本的には透明駒のコア概念から導かれる帰結なのであるが、こうして確認しておかなければおよそ自明とは言いかねるものだと考えられるので、長々と誌面をとって記述させていただいた。

透明駒の一貫性について

　透明駒はあくまで普通の駒がたまたま不可視になってしまった状態なので、決してオールマイティな駒ではない。つまり、１手目のＸでは角でしかできない王手をしていたのに、３手目のＸでは飛車として王手をしている、ということはできない。直前に判明した性質は一貫して引き継がれる。ただし、実際に現れた手順の中で一貫していればよいので、１手目では何の駒かわからず、２手目に応じて変化Ａでは角であり、変化Ｂでは飛車である、ということはあり得る。

透明駒の目的

　透明駒は基本的に詰将棋である以上、詰みを目的としたものが多いが、中には自玉を詰ませることや、ステイルメイトにすることなどを目的としているものもある。これらを一般に達成条件と呼ぶことにすると、透明駒の目的は、ある手順を示して、その手順が成立しうる透明駒の可能性のいずれからも、その達成条件の成立が演繹されること、ということになる。ある手が合法であること、攻方の手が王手であることは仮定として用いてよかったが、最終的に詰んでいるかどうか、ということは証明しなければならないのである。

透明駒の可視化

　最後に、透明駒のルールとしてはオプションであるものの、デファクトスタンダードともなっているルールについて述べる。これまでに説明してきた事例の中で、透明駒の位置も種類も確定してしまうケースがいくつかあったことにお気づきだろうか。そのような場合に、透明駒がその後も透明であり続けるとみなしておく理由はない。そこで、位置と種類が一意に定まった透明駒はその時点で透明性を失う、とするのが一般的なルールである。

　ただし、種類というときには成駒とそうでない駒を区別する。角か馬かわからない、というような時にはそれがどちらかに確定するまで透明なままである。

　若島作では､初手に 13 Ｘと指すのだったが、このとき王手をかけられる駒種は桂だけだった。そして位置は普通駒が取られた地点である 13 で決まっているから、この着手が完了した時点で 13 に攻方の桂が見える。以下は双方どちらにも透明駒のない普通詰将棋となる。

駒が可視化するタイミングは、駒種と位置を証明する材料がそろった瞬間である。どうせ 13 X として王手になる駒は桂しかないのだから、最初から 13 桂と表記してもよいのではないか、という意見があるかもしれないが、これはいけない。着手があって、その後その着手が意味することについて分析するのが透明駒の鉄則である。この駒が桂しかありえないのではないか、という推論はあくまで後手の駒が 13 で消えたことを見た後に導かれたものなのであるから、その着手が完了するまでは何の材料もない、とするべきなのである。細かいようだが、この原則をないがしろにすると不都合が生じることがあるので注意されたい。

ということで、この桂が可視化するタイミングは 1 手目が完了した瞬間となり、後手が 2 手目を考えるときにはもう見えている。

オプションだ、と書いたのは、ある時点で駒種と位置が分かったからと言って透明性を失うとは限らないという解釈も可能だからで、このように透明駒は何があっても透明のままであるとするルール解釈は TypeB と呼ばれて区別されている。

以上で、透明駒のルールはおおむね説明できたことと思う。ここでは、ルールを誤解なく伝えることに重きを置いたので、それがなぜおもしろいのかについてはあまり書くことができなかった。この一見理屈っぽいルールからどれだけエキサイティングな作品が生み出されるかについては、以降の作品解説をお読みいただきたい。

最後にルールの一覧をまとめる。

透明駒規則

①【透明駒の定義】
透明駒は位置、種類が不明の駒。40 枚のうちのいずれかであることと、先後それぞれが出題図の局面において所持する枚数のみ既知。
（位置の定義）
「位置」とは、盤上の 81 マスと双方の駒台 2 ヶ所の計 83 箇所である。
（種類の定義）
「種類」とは、成生を区別した計 14 種とする。
②【透明駒の表記法】
透明駒の棋譜表記は「X」とのみ表記するものとし、位置や成生右左などの併記は一切不可とする。ただし、普通駒が透明駒によって取られた場合に限り、その位置を表記できる。
③【着手の原則】
それが不可能であると証明されない限り、双方の手はすべて合法手であり、先手の手はすべて王手であるとみなさねばならない。
④【透明駒の可視化】
ある透明駒の位置、種類がともに一意に定まったならば、その時点でその透明駒は普通駒となり、以後透明駒の表記法による制約を受けない。
⑤【詰みの定義】
詰み、その他各種の達成条件は証明されねばならない。
⑥【付則】
詰上がりで持駒の透明駒が余っても不問とする。

解説篇

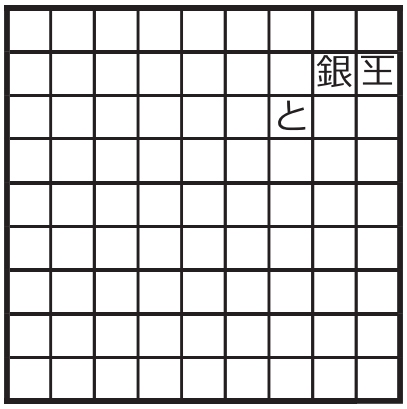
透明駒Ⅰ
（詰将棋篇）

會場健大

以下本書では、透明駒が先手にm枚、後手にｎ枚あるとき、（透明駒ｍ＋ｎ）と表記するものとします。

透明駒による王手

(1) 會場健大
（詰パラ　2013/11）



持駒　なし

詰将棋　１手（透明駒 1+0）

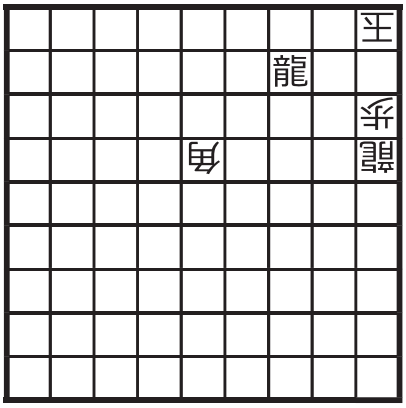
X 迄１手。

がんじがらめで動けない玉。そこで X と透明駒着手をすれば、それがなんであるかはまったくわからないが、なんであっても詰んでいる、という例題。透明駒の詳細を判明させるのが目的ではなく、詰んでいることが証明可能な局面を作るのが目的なので、これでいいのである（なお、このセクションでは透明駒を使った普通詰将棋を扱うため、無駄合は禁止にしているが、協力詰等ほかのセクションでは無駄合という概念はないので注意していただきたい）。

ただし、紛れを読んでみると、透明駒を使った普通詰将棋におけるいささか厄介な点に気づくだろう。たとえば 11 銀不成として、透明駒の飛（龍）を用いた空き王手を主張すると、玉方は 13 玉と逃げるしかない（二段目に飛（龍）の利きが残っているので、同玉あるいは 21 玉は 22 とまで詰み）。これに対して、X、24 玉、X、25 玉、X… という要領で、攻め方は延々と X を続けて、透明駒で追いまわしているという主張をすることができる。これは容易に詰み形にはならないが、もし無限に続けられるとすると問題がある。その場合、将棋盤上における飛車（龍）と玉の位置の組み合わせは有限なので、いずれはある局面が２度現れることになり、また３度現れることになる。するといつか必ず連続王手の千日手の局面を迎えることになるが、その局面がどのような局面か、千日手にならずに最長何手 X を続けることができるのか、というのは高度に数学的な問題になってしまう。透明駒の普通詰将棋を作る際には、こうした厄介な問題を処理する必要が生じることも頭の片隅に入れておいていただきたい。

本図の場合、11 銀不成、13 玉、X、12 玉と戻っておくのがよい。２手目の局面で二段目には飛車の利きがあったはずで、それなのに４手目に二段目に戻れるということは、３手目の X は 12（龍、飛成、飛不成）だった可能性しかないので、これで透明駒を取り切って逃れである。

(2) 若島　正
（Twitter 2013）



持駒　桂

詰将棋　5手（透明駒 1+0）

23 桂、12 玉、11 桂成、同玉、
X 迄 5 手。

こちらは透明駒の位置を確定させるケース。23 桂に同龍は同 X で詰み。先に X では 23 龍で詰まない。透明駒の可能性を留保しておくのが大事だ。

すると 23 桂には 12 玉という手しか残されていないことになるが、これで透明駒が 22 にいることが確定する。

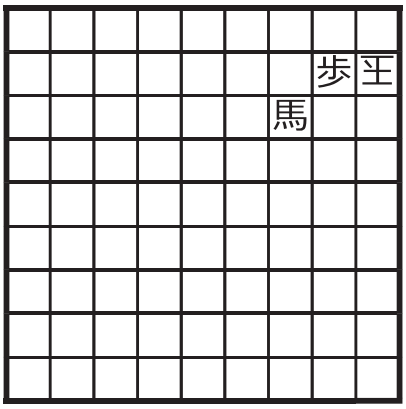
上記の変化で 23 桂に同龍のときは同 X としたので、そのとき透明駒は 15 か 35 の桂だったのだが、作意手順では透明駒は 22 にあることになっている。このことに混乱される方もいらっしゃるかもしれないが、透明駒は可能性が定まっていないときはどのようにも解釈されうるので、作意と変化とでは別々の駒、位置になり得ることを改めて確認しておきたい。

さて、12 玉を受けてすぐに 11 桂成と捨てるのが本作のおもしろいところ。ほしかったのは透明駒の位置情報だけだったのである。それが桂 1 枚の出費と見合うというわけ。22 にいることができて 11 玉や 12 玉に王手をかけていない駒は歩か香しかない。これらの駒の動き先は 21 しかなく、またそこで必ず成ることになる。

したがって、最終手 X とすれば、と金か成香が 21 にできることになり、そのどちらでも詰み。このように、盤上に変化をもたらすためではなく、情報を手に入れるための捨て駒があり得るというのは透明駒のおもしろさである。

なお、最終手 X は絶対に 21 に成る手だからといって、21X 成などと表記してはダメ。あくまで X という表記に、手順から論理的に詰みに必要な情報が含まれている点がおもしろいのである。

例題



持駒　なし

詰将棋　5手（透明駒 1+0）

21 歩成、13 玉、X、14 玉、
24 龍迄 5 手。

先ほどの図の応用。初手に X とすると、今度はたとえば 18 歩合などとする手がある。18X の一手に 13 歩合くらいで逃

れ。

この紛れからは、透明駒で X と王手する、というのは実は普通詰将棋においては怖い手だ、ということをご理解いただきたい。特に初手から X とした場合、論理的に可能な王手の種類は非常に多く、玉方にとってその中で一番有利な解釈を選ばせる余地を与えているからである。遠くのほうに合駒をしておくのは玉方にとって有効な対処のひとつだ。

なお、先の紛れで一度 18 歩合を挟むのは、X に直ちに 13 歩合とすると、続けて X の追撃があるからである。１枚の駒で、飛び道具として合駒を打たせつつ、直後にその合駒を回避して王手をかけられる駒は龍しかないので、23 に強力な龍が見えて以下詰んでしまう。透明駒が 1 枚の状況で X、合、X で龍の存在を主張するのは有力な手筋なので覚えておいていただきたい。

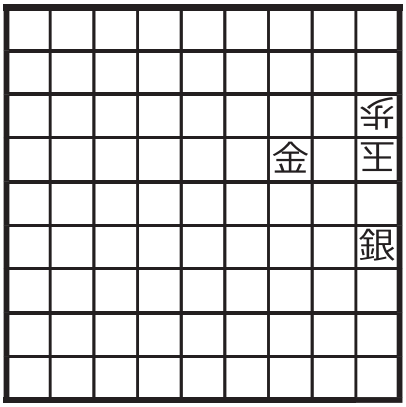
さて、21 歩成として二段目に飛車（龍）があることを主張する。この利きがあるので、21 玉には 22 馬まで早い。13 玉に X と続けておくと、先ほどは 12 玉で攻めが切れたが、今回は 33 の駒が馬になっているので 22 馬で詰んでしまう。ということで 14 玉の一手になるが、ここで攻め方の透明駒が見えることに気づかれたかどうか。二段目の 32 以遠に飛車（龍）があり、その駒で 13 玉に王手をする位置で、かつ対処として 14 玉が可能な手は 22 龍（飛成）しかないのである。

初手から X では玉方に渡される解釈の余地が非常に大きくなるが、このようにうまくひとつの透明駒で 2 回王手をかけることができると、その手順がもつ情報量が大きくなり、その分透明駒の可能性が狭まる、ということがこの例題のポイントである。

最終手は 23 龍、24 馬等もあるが、普通詰将棋なので最終手余詰は不問ということでご容赦いただきたい。

透明守備駒をあしらう

(3) 須藤大輔
（Problem Paradise 64, 2013）



持駒　金銀

詰将棋　３手（透明駒 0+1）

15 金、同 X、23 銀迄３手。

玉方に透明駒がいる場合、初手からかけられるたいていの王手は同 X と取られる可能性がある。対処として、とにかく透明守備駒の位置だけ決めてしまって、その位置から最終手の駒を取れる駒は存在しない、という手順を組み立てるのはひとつの方法だ。

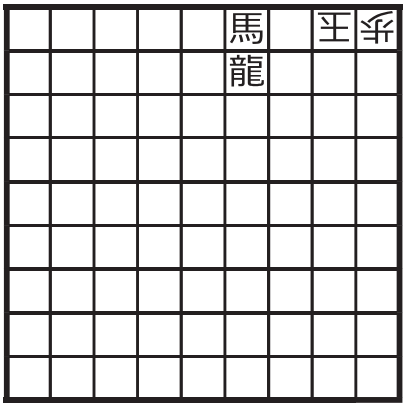
本図、まず 15 金、同 X で透明駒の位置が 15 に定まる。15 に置かれた駒で、23 に行くことができる駒種は存在しないので、実際にこの透明駒がなんであるにせよ、最終手 23 銀で詰んでいること

になる。

これをたとえば 25 金、同 X、23 銀だと、玉方透明駒が飛車（龍）だったとき 23 銀は取られる可能性があり、まだ詰んでいない。

また手順前後して 23 銀、同 X、15 金は玉方透明駒が桂だったとき取れる可能性があるので詰んでいない。わかりやすさからこの須藤作を先に並べたが、同種の構想の１号局は次の若島作。

(4) 若島　正
（詰パラ　2013/11）



持駒　桂桂

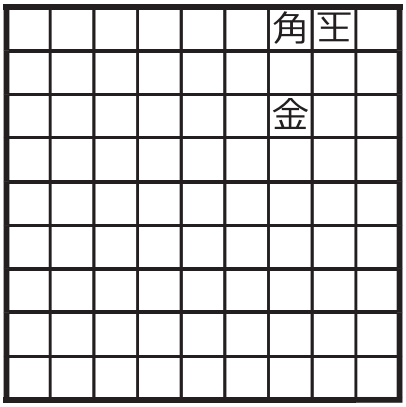
詰将棋　５手（透明駒 0+1）

31 馬、同 X、13 桂、同 X、
33 桂迄５手。

初手 33 桂は 12 玉とされる。これは 22 か 32 に玉方透明駒がいるという主張になっている。このように大駒の利きをあえて玉で通過することで透明駒の存在を示すのはひとつの手筋。そこでまずは 31 馬とするのがミソ。これなら 12 玉には 32 龍までだ。

玉方はやむを得ず同 X と応じるが、ここで桂の捨て順を考えることになる。33 桂、同 X、13 桂だと X が飛車のとき詰んでいないとわかれば、作意にたどり着ける。31 から 13 にいけたということは、透明駒は角（馬）だったわけだが､角も馬も13から33へ行けないので、これで詰み。須藤作が透明駒の種類がなんであるか無情報だったのに対して（厳密には、歩、香ということはあり得ないが)、こちらは角系統の駒だということまではわかるし、飛車との対比が狙いの作り方になっているが、最終手が取れない位置に固定するということでは共通している。

(5) 會場健大
（未発表）



持駒　銀

詰将棋　７手（透明駒 0+1）

22 銀、12 玉、11 銀成、同玉、
X、21 玉、22 角成迄７手。

本作は玉方透明駒を取ってしまうことで無力化する手筋。普通詰将棋で透明駒を取るためには、相手に透明駒着手の余地を残さないのが肝になる。「X」という手を指されてしまえば、それが不可能でない限り、そちら側の透明駒は生きて

いるという証明になるからだ。

そこで本作は盤の隅という特殊な位置を用いる。初手に22角成では同Xがあって詰まない。まず22銀と重ね打ちしておくと、同Xには22角成があって詰むので、玉は12に逃げ出すしかない。そのときに11銀成とすり込むのが眼目の一手。このとき、これを透明駒で取り返せないのが重要だ。取り返せない、というのは単純に盤面に任意の玉方駒を置いてこの11成銀を取れるか考えてみるとよい。遠くから飛車角を引いて取る可能性は、12玉、31角、33金でブロックされているからありえないし、21は先ほどまで玉がいたため駒がいることはない。22も同様だ。したがって、後手はこれを同玉と取り返す以外に選択肢がない。

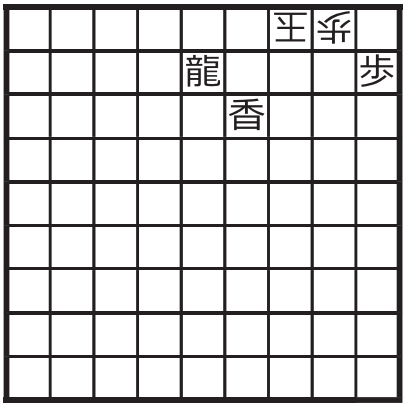
そして、攻め方から見てこの11銀成は「駒がいなかった保証のないマスへの移動」になっていることがポイント。そのような移動は、つねに透明駒を取っている可能性がある。したがって、次にXと先手は着手してしまい、玉方の虎の子であった1枚の透明駒はもはや先手の手に落ちていることを主張することができる。この王手は何かわからないが、玉方がどのように応手しても22角成としてしまえば詰み。

このように、玉方に透明駒の応手を許さないような盤上の移動を行えば、攻め方は玉方の透明駒を取ることができる。逆にそれを恐れれば、玉方は「X」という手の余地が残るような局面に誘導する必要がある。

透明駒を可視化させる

可視化は先に(2)でも出てしまったが、動いていない駒でも周囲の状況から可視化できる状況がある。

(6) 若島　正
（詰パラ　2013/11）



持駒　なし

詰将棋　3手（透明駒1+0）

42龍、22玉、14角成迄3手。

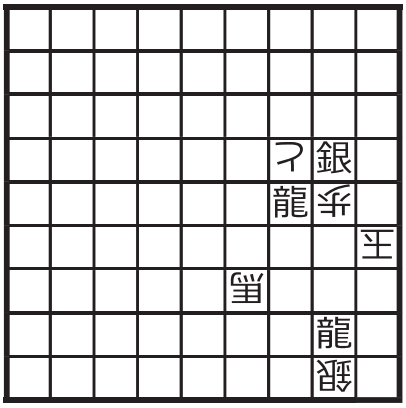
42龍の王手には22玉と逃げる一手で、これは(4)で扱った手筋でもある。32に透明駒がいて龍の横利きは遮られている、という主張なわけだが、本図の場合32の駒は攻方駒である。攻方の駒で、31玉と相対していても反則にならない駒というのは何だろうか。前に利く駒だったとすれば、初形から合法でない配置になっていたことになる。また、桂だとすれば、攻方は行き所のない駒の禁を犯していることになる。

以上の理由で、32の駒は角しかありえない。2手目22玉が指された時点で32に角が可視化するので、3手目は14角成と場所や成生を明示した着手をする

ことができ、これで詰みとなる。

　可視化のタイミングを強調したのは大事なところで、先手が着手を選ぼうとしている時点ですでに見えているということがこの場合決定的に重要である。

(7) 若島　正
（Twitter 2013、修正図）



持駒　歩

詰将棋　5手（透明駒 1+0）

36 龍、同馬、17 歩、26 玉、
15 銀迄 5 手。

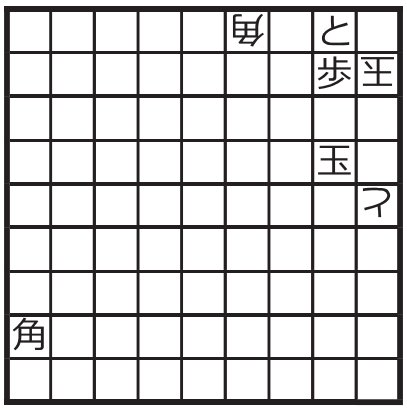
　本作では、打歩詰禁止のルールを利用して透明駒を可視化させている。龍を捨てた 3 手目の局面で、依然として 28 龍の力が強く 17 歩は打てないように見える。しかしあっさり打ってしまうのがおもしろい一手。これが打てたということは、この局面は詰んでいないのである。それはつまり、攻方透明駒が 27 にいるという主張になっている。初手の龍捨てを入れるのは、そうしなければ 17 歩を打歩詰にしないような透明駒の配置というのは存在しないからで、守備駒をずらすというような狙いではない、透明駒特有の高度な意味づけになっている。

　さて、27 に攻方透明駒がいることがわかり、17 歩が打歩詰にならないことから、その駒は前に利かない駒であることもわかる。また、少し考えるとこの駒は初形からずっと 16 玉と斜めに向かい合った状態にあったわけだから、斜め前にも利きを持たない。そういう駒は桂しかない。つまり 3 手目が指された時点で、27 に桂が見え、したがって最終手 15 銀で詰んでいる。

　もっとも、本作においてはこの桂を動かすわけではないので、可視化すること自体は本質的ではないが、ひとつの事例としてご紹介した。

練習問題

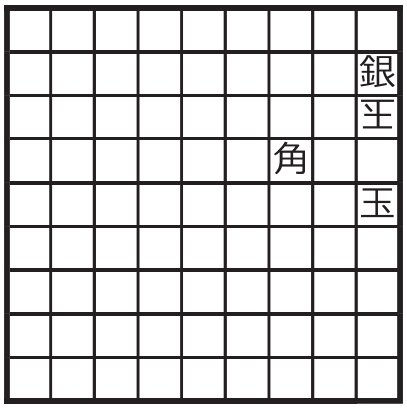
(1) 相馬慎一、久保紀貴



持駒　銀

詰将棋　5手（透明駒 0+1）

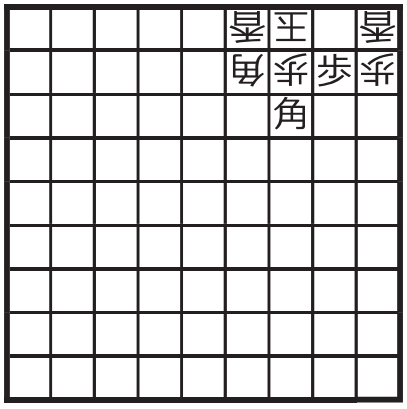
(2) 久保紀貴



持駒　なし

詰将棋　5手（透明駒 1+1）

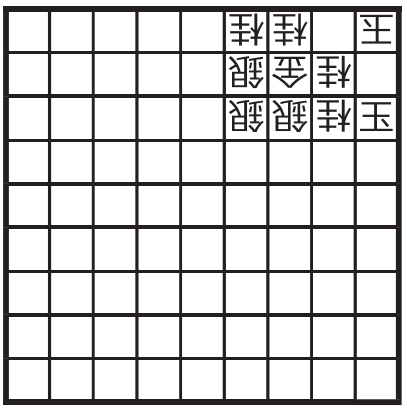
(3) 時風瑞季



持駒　なし

詰将棋　9手（透明駒 3+4）

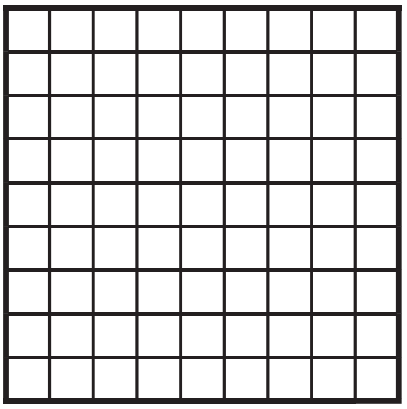
(4) 高砂　裕　after 岡谷阿矢子



持駒　なし

詰将棋　111手（透明駒 30+0）

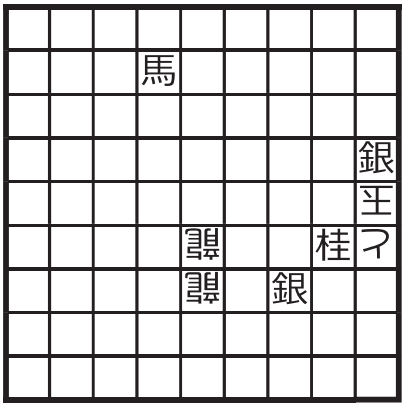
(5) 岡谷阿矢子



持駒　金銀銀桂

詰将棋　7手（透明駒 0+1）

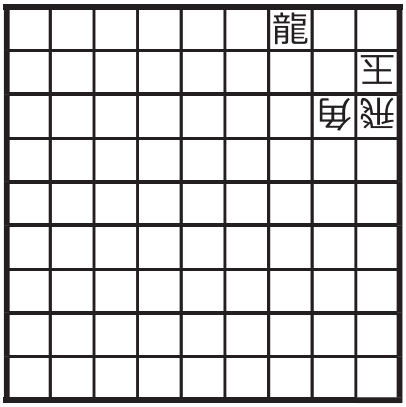
(6) 幻想咲花



持駒　なし

詰将棋　11手（透明駒 1+0）

(7) 會場健大



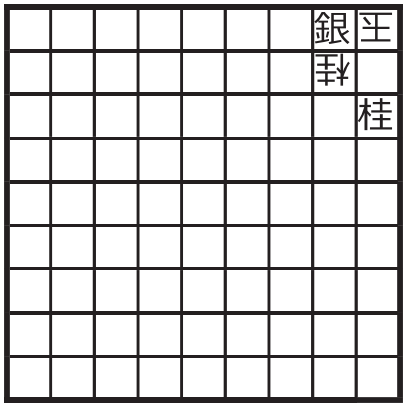
持駒　なし

詰将棋　13 手（透明駒 1+0）

透明駒 II
（協力詰篇）

馬屋原剛

（1）上谷直希
（フェアリー時々詰将棋 2019/8）



持駒　なし

協力詰　1 手（透明駒 1+0）

X 迄 1 手。

最初の問題です。1 手指せば詰みとなります。いきなり答えに行く前に練習がてら全ての王手を試してみましょう。

まず目につくのは 12 銀成 (生) でしょうか。これには同玉で詰みません。「透明駒は実は 24 桂で、同桂成と取れるんだ」というような主張はできないのであしからず。むしろ、12 玉と指せたことが、24 桂がいないことの証明になっています。

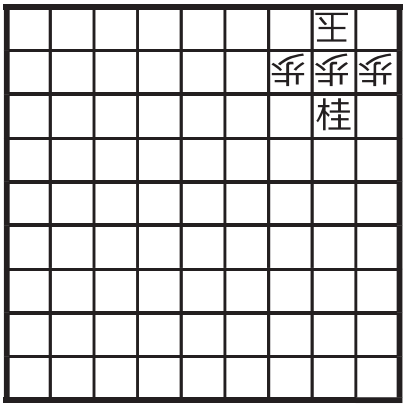
桂は動かせないので普通駒での王手はこれだけでしょうか。いいえ、32 銀成（生）という手があります。31 から 91 のどこかに飛（龍）が居て開王手したと主張したわけですね。残念ながら 12 玉で詰まないのですが、開王手で透明駒の存在を主張する手筋は頻出ですので覚えておきましょう。

さて、次は透明駒で王手してみましょう。単に「X」とする手と「22X」として桂を取る手があります。後者は 22 同玉で詰まないので前者が正解となります。

では「X」でなぜ正解なのか詳しく調べていきましょう。まず、「先手の透明駒の着手は必ず王手である」という前提があります。従って 23 金とか、12 角とか王手でない着手は考えなくてよいのです。王手をしている透明駒の場所は 23 と 12 が考えられます。23 の場合王手であるのは透明駒が桂の時だけですね。玉は逃げ場所もないので詰んでいます。12 の場合は香や金や成桂等々色々な可能性がありますがいずれにしろ詰んでいますね。ちょっと気になるのは歩のパターンです。打歩詰の反則だと思われるかもしれません。しかし、透明駒のルールを思い出してください。「双方の着手はすべて合法である」という決まりがありましたね。従って、「X と指せた以上、この手は反則でない、つまり X は 12 歩打でない」となります。ちょっと難しいですよね。最初のうちは感覚的に抵抗があるかもしれませんが、段々と慣れてくると思います。

（2）上谷直希

（フェアリー時々詰将棋 2019/11）



持駒　金

協力詰　1 手（透明駒 0+1）

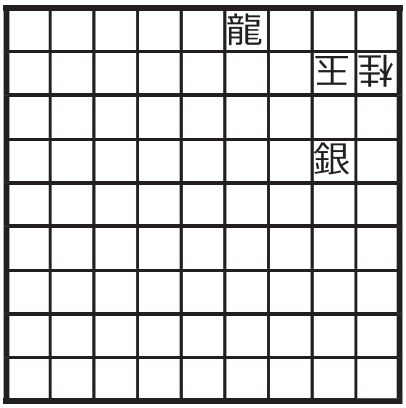
11 金迄 1 手。

1 問目は攻方に透明駒がありましたが、今度は受方に透明駒があります。受方の透明駒は強力で、油断すると王手した駒を取られてしまいます。例えば 31 金とすると 31X とされ、透明駒の種類はわかりませんがとにかく金を取られてしまい失敗です。

正解は 11 金です。この手に対しても 11X として取られてしまわないでしょうか。ここで 11X とした透明駒はどこからやってきたか考えてみましょう。盤をよく見ればわかると思いますが、12、21、22 が全て埋まっているため、どこからも 11 に行くことができません。不思議な性質を持つ透明駒とは言え、正体は 40 枚の駒の内のどれかでありワープすることはできません。従って、11X とは指せず、11 金迄で詰みとなります。強力な透明駒の守備をかいくぐる方法はいくつかありますが、本作のように透明駒が絶対に行けない位置に着手するのは一つの手筋です。

（3）久保紀貴

(未発表)



持駒　角

協力詰　1 手　（透明駒 1+0）

33 角迄 1 手。

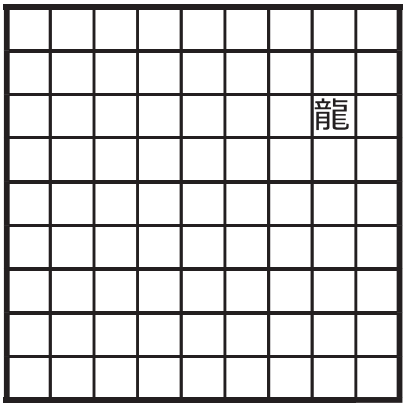
今度は攻方のみに透明駒があります。強力な受方の透明駒がないので角をどこに打っても詰みそうに見えます。例えば、13 角と打てば詰みでしょうか。残念ながら答えは No で、平然と 11 玉とされてしまいます。龍で取れるから非合法手だと思われるかもしれません。しかし、龍と玉の間に透明駒が挟まっていたらどうでしょうか。例えば、21 銀や 31 金がいれば 11 玉は合法手となりますよね。皮肉にも攻方の透明駒が居るせいで 13 角は失敗なのです。

さて、11 玉と逃げられると失敗なので正解は 33 角です。これで詰みなのですが、21 玉とは逃げられないことを確認しましょう。仮に透明駒が 31 銀であれば、21 に逃げ込めるように思えます。しかし、31 銀が居ると元から王手がかかってしまっていることになるので、透

明駒が31銀である可能性はありません。

最後に他の手で詰まないことを確認しておきましょう。まず44角は、33合で逃れです。通常の協力詰と同様無駄合という概念はありません。また、Xとするのはどうでしょうか。これには色々な逃れ方があります。例えば、42飛と王手されたと想定して32歩合があります。他の逃れ方も余裕がある方は考えてみてください。

（4）太刀岡甫
(未発表)



持駒　桂

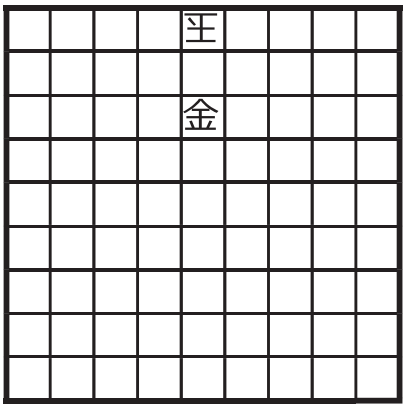
協力詰　1手（透明駒 1+1）

13桂迄1手。

なんと盤面に玉がありません。面食らったかもしれませんが、これは玉が透明駒になっているのです。玉が見えないのでは捕まえようがないではと思うかもしれませんが、安心してください。これも1手で詰みます。1手詰で持駒があるので初手は持駒を打つしかありません。いったい桂をどこへ打てばいいでしょうか。例えば、55桂と打てば玉は43か63かのいずれかにいることになります。しかしこれでは全く詰んでいません。34桂と打てば、玉は42にいることが確定します（22に玉が居ると始めから龍で王手がかかっていて非合法になりますね）。しかしやはり詰んではいません。正解は13桂です。これで21に玉がいることが確定します。しかし、21に玉がいると初形で龍によって王手がかかっていることにならないでしょうか。ここで前問 (3) を思い出してください。攻方の透明駒で龍の利きが塞がれている場合は王手ではありませんね。では22にいる駒はなんでしょうか。前に利く駒は結局王手がかかってしまいます。桂は2段目には行けません。とすると残るは角しかありません。角が11と31を押さえているのでこれで詰みとなります。

なお、初手33桂は玉が41にいる可能性があるためXと指されて逃れです。透明玉を詰ますときは、あえて利きを減らすように王手をして、玉を可視化するとうまくいくことが多いです。

（5）上谷直希
（Web Fairy Paradise 91, 2016）



持駒　金銀

協力詰　3手（透明駒 0+1）

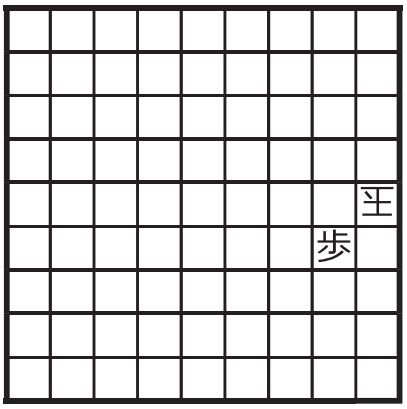
61 金、同 X、42 銀迄 3 手。
（左右対称なので 41 金、同 X、62 銀も正解）

ここからは 3 手詰になります。でも、できるだけ簡単なものを選んで解説するので心配しないでください。

さて、頭金一発で詰ましたいところですが、ここでも受方の透明駒が邪魔してきます。本問では透明駒の位置を確定させることで守りをかいくぐります。

正解は 61 金です。これを同 X と透明駒に取らせます。こうしてから 42 銀とすれば詰んでいます。チェスのナイトでもない限り、61 から 42 には行けませんね。

(6) 上谷直希
(Web Fairy Paradise 91, 2016)



持駒　金香

協力詰　3 手（透明駒 0+1）

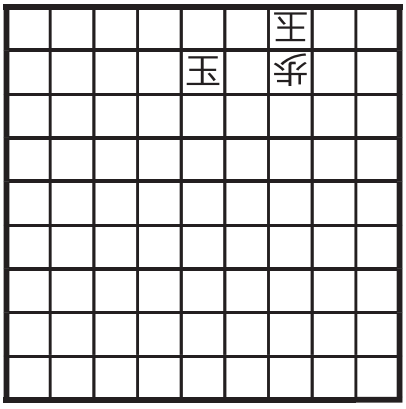
17 香、X、25 金迄 3 手。

普通の協力詰でしたら、19 香、16 歩合、25 金迄で簡単ですね。本作も基本的な攻め筋は同じです。ただし。前述の手順ですと 25X と金を取られてしまうので工夫が必要です。どうやって受方の透明駒を無力化すればいいのでしょうか。ずばり、2 手目に合駒させてしまえばいいのです。

では、正解は 19 香、X、25 金迄でしょうか。残念ながらこれは 16 玉と逃げられてしまいます。そう、17 や 18 に合駒した可能性が残っているのです。かといって、16X と合駒の位置を指定することはできません。位置を指定できるのは駒を取った時だけです。

正解は初手 17 香です。こうすれば 2 手目の合駒は 16 しかありえず、25 金迄詰みとなります。なお、2 手目 X で香を取られた心配はありません。可視駒を取るときは 17X のように明示的に位置を指定する必要があるので、単に X とした場合は駒を取っていないことになります。

（7）上谷直希
(フェアリー時々詰将棋 2019/11）



持駒　飛角

協力詰　3 手（透明駒 0+2）

13 角、22 飛合、41 飛迄 3 手。

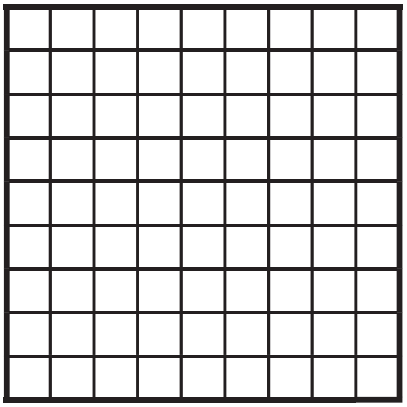
13 角～ 41 飛がまずは見えるところ

です。例によって、どうやって 41 飛が取られるのを防ぐのかが問題です。前問 (6) で覚えた通り 2 手目透明駒で合駒する手が考えられます。しかし、本問では透明駒が 2 枚あるので、もう一枚の透明駒で 41 飛が取られてしまい失敗です。

ところで、41 飛を取った透明駒の種類は何でしょうか。例えば金だとどうでしょうか。41 に移動するには直前に 42 か 51 に居たことになります。しかし、それでは攻方玉に王手がかかってしまっていておかしいですね。他の成駒や馬も同様になります。そうすると実は 41 飛を取れるのは飛（龍）しかありません。

ということで正解は 13 角、22 飛合、41 飛となります。飛を枯らしてしまえば透明駒が何枚あろうと 41 飛を取り返せないという仕組みでした。

（8）會場健大
(詰パラ　2013/11)



持駒　金銀

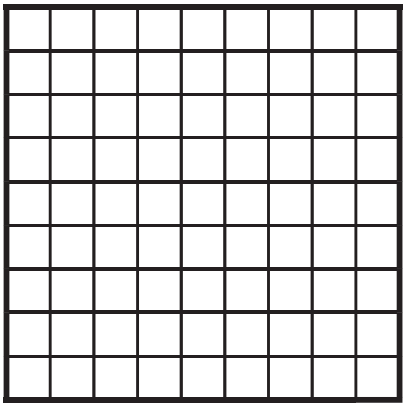
協力詰　3 手（透明駒 0+1）

11 銀、21 玉、22 金迄 3 手。
（左右対称なので 91 銀、81 玉、82 金も正解）

さて、透明玉です。あてずっぽうに攻めても失敗します。例えば、21 銀、X、12 金は、2 手目に 11 玉としたなら詰みですが、22 や 13 に動いた可能性があるので逃げられます。

ここで (4) を解いたときのことを思い出してください。透明玉は可視化させると詰ましやすいのでした。可視化させるためにはあえて利きが少なくなるように王手をします。具体的には 11 銀です。この 1 手で玉が 22 にいることはわかりました。あとは普通の協力詰と同じで、21 玉、22 金迄です。

（9）馬屋原剛
(Twitter 2019)



持駒　金金

協力詰　3 手（透明駒 0+1）

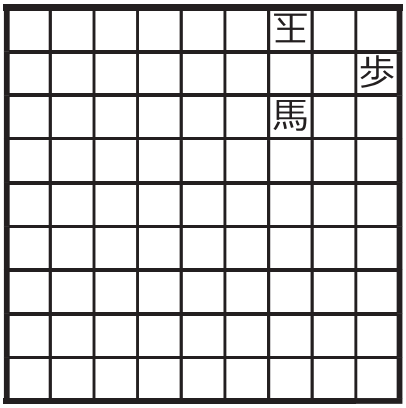
28 金、X、18 金打迄 3 手。
（左右対称なので 88 金、X、98 金打も正解）

前問と同じく透明玉で盤面配置は無しです。透明玉は可視化するのがセオリーですが、あいにく持駒が金しかないのですぐには可視化できません。例えば、適当に 23 金、X、22 金打とすると玉が

31 にいる可能性があり逃れです。

正解は 28 金です。X と逃げる手に対しては 18 金打で詰んでいます。初手の 28 金をかわして、かつ 18 金打ちが王手になる玉位置は 19 しかないのです。なお、同じようでも 3 手目 29 金打ちは、玉が 39 に居る可能性があるので逃れです。盤面配置無しの作品は珍しいので、入門用として気に入っている作品です。

（10）高坂　研
（第 1 回透明駒解答選手権 2020/2）



持駒　なし

協力詰　3 手　（透明駒 1+2）

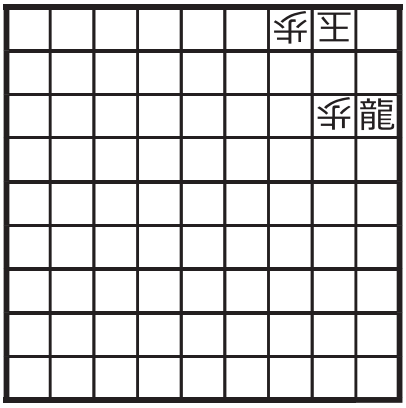
99 馬、21 玉、11 馬迄 3 手。

玉方透明駒が 2 枚と守備が強いので、守備を相手にしない詰上がりが求められます。

初手 X としても得られる情報が少ないので、開王手するのが好手です。ためしに、44 馬、21 玉としてみましょう。3 筋には香 or 飛（龍）がいるので逃げられません。ここで、11 馬とすると詰みでしょうか。馬が 22 を跨いで 11 に来たので当然 22 に守備駒はいません。一見詰みのようですが、同 X という受けが成立します。そう、55 ～ 99 の対角線上のどこかに角（馬）が居れば取り返されてしまうのです。

失敗しましたが、角（馬）にさえ取り返されなければ詰むことがわかりました。そうすると、初手の好手が見えてくるのではないでしょうか。そう、99 馬と最遠移動するのが正解です。21 玉には、11 馬と隅から隅への大移動で詰み上がります。

（11）高坂　研
(Web Fairy Paradise 105, 2017)



持駒　なし

協力詰　3 手　（透明駒 1+1）

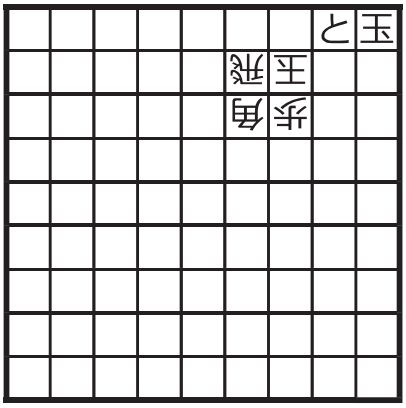
X、32 角合、X 迄 3 手。

早速正解手順がなぜ成立しているのか考えていきましょう。初手だけでは何もわかりませんが、2 手目の角合で、43 ～ 98 のラインに角（馬）がいることがわかります。そして、3 手目の X、これがすんなり理解できるでしょうか。32 の角は取られていないので、初手で王手した透明駒が 3 手目も王手したわけではありません。すると 2 枚目の透明駒はどこからでてきたのでしょうか。もし

かすると、(2+0) の間違いだったのでしょうか。いいえ、そんなことはありません。そうすると考えられる可能性はただ一つ、初手で相手の透明駒を取って、3 手目にその透明駒を打ったのです。透明駒を取ったことなんて証明してないのに透明駒を打ってよいのでしょうか。問題ありません。透明駒は指せた手は全て合法手なのです。「証明しないと指せない」とはならず、「3 手目に透明駒の着手をしたことで、初手が透明駒を取ったことが証明される」のです。最初は違和感を覚えるかもしれませんが、徐々に慣れていってください。

さて、3 手目 X の着手が可能なことの説明を長々としましたが、これで詰みだということもしっかりと確認しなければなりません。3 手目の透明駒は種類も位置もわかりません。しかし王手をかけていることだけは保証されますので計 9 通りの可能性があります。全て詰んでいることを各自ご確認いただければと思います。なお、仮に透明駒が角だと、12 角と王手をしても詰みません。これが 2 手目角合をして角を品切れにした理由です。

(12) 高坂　研
(Problem Paradise 90, 2020)



持駒　角

協力詰　3 手 (透明駒 1+0)

41 角、同飛、22 と迄 3 手。

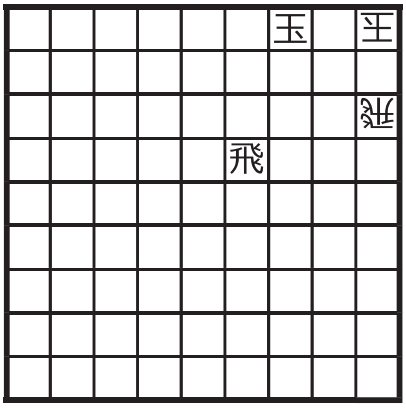
やや高度ですが、絶対に覚えておいて欲しい手筋を扱います。筆者は初めて本問を見たとき何時間も苦しめられました。いきなり答えを見てしまいましょう。

正解は 41 角、同飛、22 とです。11 玉が取られそうだし、42 にも逃げられそうだし一体全体どうなっているのでしょうか。

落ち着いて考えると、22 とと指せたということは、31 に攻方の駒が居ることになります。駒種は何でしょうか。後ろに利く駒は初形で王手がかかっていることになるので除外されます。歩、香、桂は 1 段目にはいません。角は品切れなので残ったのは銀になります。銀が 42 に利いているためこれで詰みなのでした。

このように双玉の問題は自玉に (疑似) 王手をかけてみると透明駒の情報が解明されることがあるので積極的に試してみてください。

（13）藤原勝博
(詰パラ　2019/12)



持駒　銀

協力詰　3 手　（透明駒 1+2）

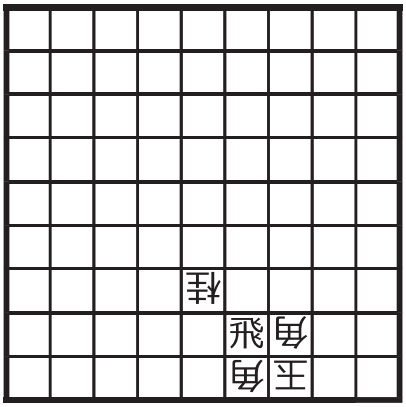
14 飛、33 飛、22 銀迄 3 手。

3 手詰なのに受方の透明駒が 2 枚もいてやっかいそうです。こういうときは双玉であることに目をつけて（疑似）逆王手を狙うとうまくいく場合があります。初手は 14 飛。55 ～ 99 の斜線のどこかに角 or 馬がいることを主張しているわけです。対して 33 飛！が一石二鳥の受け。これで 12 に玉方の透明駒がいることが判明します。31 玉に王手がかかっているようですが、素知らぬ顔で 22 銀とすることで 32 にも玉方の透明駒がいることがわかります。

さてこれで詰んでいることを確認しましょう。まず、12 の透明駒は 14 飛でピンされているので駒種がなんであれ 22 銀を取れません。また、32 の駒はどうでしょうか。仮に 32 金であれば 22 銀を取れるのですが、32 金では 31 玉に王手をかけているので 3 手目が王手放置となりおかしいです。32 馬も同じ理屈でダメです。実は将棋の駒は後ろに利く駒は必ず横にも利くのです。かつ、横に利く駒は必ず後ろにも利くのです。この事実を利用すれば、32 の駒が 31 玉に王手をかけていなければ、その駒は 22 の銀を取ることができないことがわかります。

アクロバティックかつ緻密な論理思考を要求される作品でした。

（14）前担当 †
(Problem Paradise 73, 2016)



持駒　なし

協力詰　3 手（透明駒 1+0）
b)　（透明駒 2+0)

a) X、29 角生、X 迄 3 手。
b) 38X、28 玉、37 角迄 3 手。

守備駒が多く、肝心の飛車もすぐに取られそうであまり詰みそうにないですが、とりあえず初手は X としてみます。対しては 29 角生が好手。さらに X とするとなんと詰んでいます。詰上がりが想像できるでしょうか。3 手目に X とできるということは、2 手目に透明駒は取られていないということなので、初手は 19 飛 or 龍となります。さらに 3 手目の具体的な着手は 28 龍しか考えられず

これで詰んでいます。X、合駒、X として龍を可視化させる手筋は時たま出てくるので覚えておいて損はないでしょう。

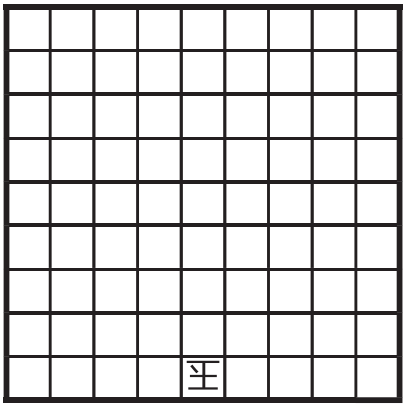
さて本作はツインで、b) の条件は (透明駒 2+0) となります。攻駒が増えて有利なようですが、不確定要素が増えたとも考えられます。実際、透明駒が 1 枚だったときと同じ手順で詰まそうとしても、例えば、29 金、同角生、38 金等の手順が考えられ全然詰みません。

正解は 38X と角を取る手です。対して 28 玉とかわすのが気づきにくい好手です。というのも 38 の駒を取ってその駒が王手した（例えば 38 金）のであれば玉は 28 には行けません。実は 38 の駒は直接王手したわけではなく開王手で開いた駒だったのです。そうすると、29 銀、19 飛の形から 38 銀とした可能性しかなく透明駒 2 枚が一気に可視化します。最後は 37 角と打てばピッタリ詰みです。

なお、57 桂は X、29 角、49X の余詰を防いだ配置です。

透明駒の枚数でツインを実現した面白い作品でした。

（15）高砂　裕
(Problem Paradise 64, 2013)



持駒　なし

協力詰　5 手（透明駒 1+0）

X、58 飛合、同 X、49 玉 (69 玉)、59 飛打迄 5 手。

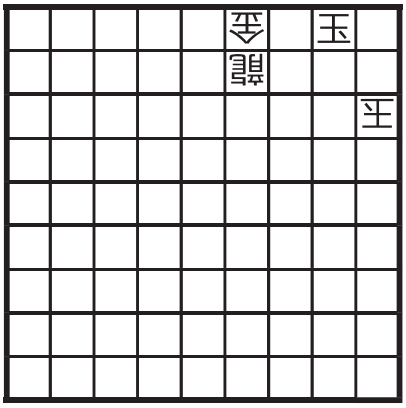
5 手詰を 1 題だけ選んでみました。通常、透明駒で 3 手詰と 5 手詰は難易度が桁違いなのですが、本問は易しいので安心ください。

裸玉で先手の戦力は透明駒 1 枚だけです。こういう場合は合駒を稼ぐのがセオリーです。初手は X しかありません。2 手目の合駒が肝ですが、素直に一番強い飛車が正解です。また、58 に合駒したことにより、先手の透明駒は 5 筋にいる飛 or 龍であることがわかります。単純に合駒を取って 59 に打てばこれで詰んでいます。4 手目の時点で透明駒は飛であることが判明します。

非常に素直な問題でした。合駒を稼いで詰む筋は作意よりも余詰筋に現れやすいので創作時は注意してください。

なお、似た作品を関勝寿氏が 2013 年 8 月に Twitter で発表しています。『協力詰 5 手 (1+0)。盤面 23 玉のみ。』

（16）茶園伸吾
(未発表)



持駒　なし

協力自玉詰　２手（透明駒 1+0)

X、31 龍迄 2 手。

ここからは自玉詰を扱います。受方玉に王手をかけながら、最後は攻方玉を詰ますという変わったルールです。

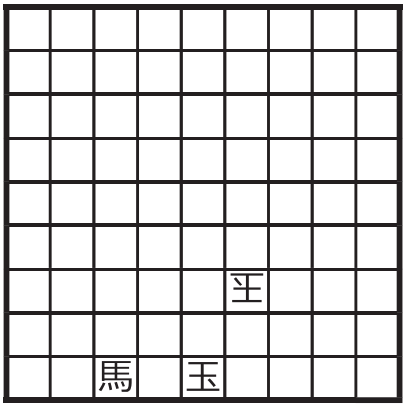
作意は X、31 同龍迄で先手玉は確かに詰んでいますね。初手は 31 角（馬）だったわけです。

では紛れを見てみましょう。X、22 龍でこれは詰みでしょうか。例えば、初手が 22 銀であれば詰んでいます。しかし、初手が 31 角だった可能性があります。この場合、22 龍には同角と取れるのでこれでは失敗です。

もう一つ、X、12 龍はどうでしょうか。これも一見詰んでいるように見えますが、初手が 11 飛の可能性があります。この場合、12 龍には同飛と取れるのでやはり失敗です。

紛れの逃れる理屈が参考になる例題に最適な作品でした。

（17）馬屋原剛
(Web Fairy Paradise143, 2020)



持駒　角

協力自玉詰　４手（透明駒 0+1）　２解

① 46 馬、同 X、58 角、同 X 迄 4 手。
② 69 馬、同 X、58 角、同銀成迄 4 手。

58 角、同 X とする手が見えますが、例えば X が歩の場合詰んでおらず失敗です。どうやら準備工作が必要なようです。

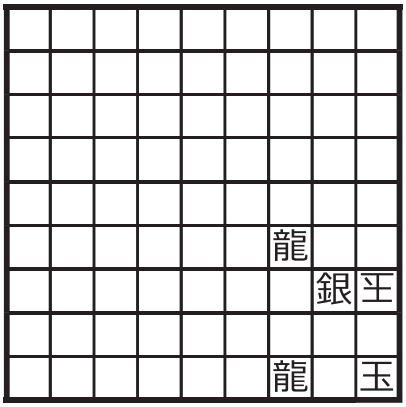
まずは 46 馬、同 X としてみましょう。まだ透明駒の駒種はわからないですが位置は 46 に確定します。ここで 58 角、同 X とすれば、46 から 58 に跳べるのは桂しかなく、8 段目なので成らざるを得ないので透明駒が成桂に確定して自玉は詰みとなるのです。

もうひとつの手段は 69 馬、同 X とする手です。やはり駒種はわからないですが位置は特定できました。そしてやはり 58 角とします。同銀成とすれば自玉は詰みです。ここでなぜ同 X ではなく同銀成とできるかが重要なポイントなのです。2 手目の時点では確かに透明駒の種類は確定していませんでした。しかし、3 手目を指した瞬間に種類が確定するの

です。9 段目にいるから、駒種は飛角金銀と成駒に限られます。また、58 角と指せることから自玉に王手はかかっていないので、横に利く駒の可能性は排除されます。また角は品切れです。結果、銀しか可能性が残っていないのです。よって、3 手目を指した瞬間に 69 銀が可視化されるので 4 手目は 58 銀成とできるのです。

透明駒がいつ可視化されるかは重要なので意識されるとよいでしょう。

（18）馬屋原剛
(第 2 回透明駒解答選手権 2020/4)



持駒　なし

協力自玉詰　４手（透明駒 0+2）

16 龍、同 X、28 龍、同 X 迄 4 手。

初手 18 銀、同 X は、透明駒が角の可能性があります。さらに 28 龍、同 X としても X が香の可能性があり逃れです。

また初手 28 龍、同 X は、これも透明駒が角の可能性があります。ここで、事前工作することにより角の可能性を消せれば詰みに至ることに気づけるかがポイントです。

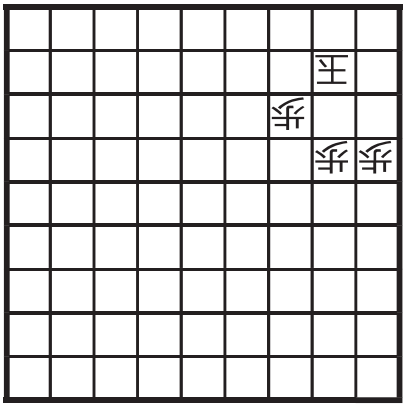
まず 16 龍、同 X とします。それから 28 龍、同 X とするとどうでしょうか。もし 28 龍を取ったのが角であれば 91 から 37 への対角線上に居たことになります。しかし、それだと王手になり 16 龍と指せたことに矛盾します。よって角の可能性はなくなり詰みとなります。

なお、26 龍、同 X、28 龍、同 X とするのはどうでしょうか。同じように見えますが、例えば 46 に角、37 に銀がいた場合、26 龍を取った瞬間に開王手になった可能性があり、28 龍を取った駒が角でも矛盾しなくなるのです。

余談ですが、本作は一手パスの手を指すことで、直前に王手がかかっていないことを証明するのが狙いでした。しかし、解説を書いていて気付いたのですが、パスができるとして、お互いにパスしてから 28 龍としても、例えば受方 37 角、28 歩の配置であれば、28 角生で応じられると先手玉が詰みません。つまり、初手は透明駒の 1 枚が 16 に居ることを証明する手になっており、意味付が重複してしまいました。少ない駒数で実現できたと思ったのに残念です。

練習問題

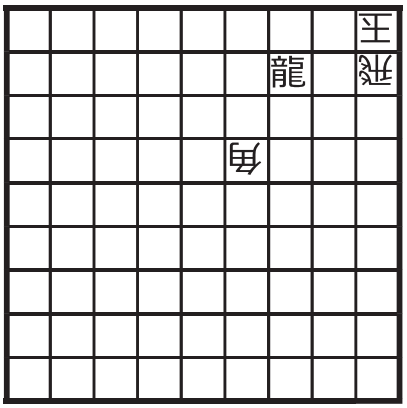
（1）須藤大輔



持駒　金銀

協力詰　５手（透明駒 0+1）

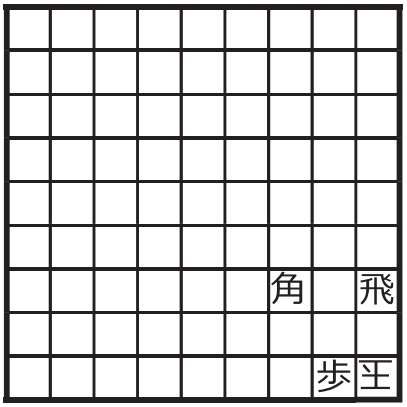
（2）須藤大輔



持駒　なし

協力詰　５手（透明駒 0+2）

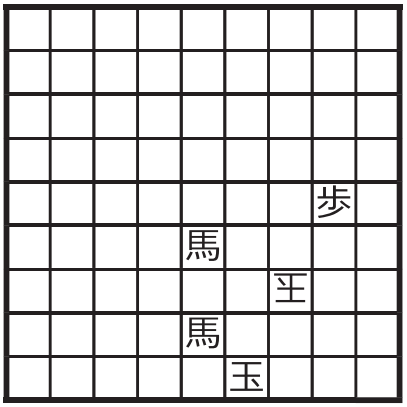
（3）高坂　研



持駒　なし

協力詰　３手　（透明駒 1+2）

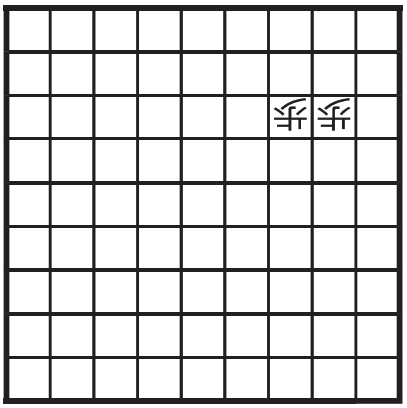
（4）高坂　研



持駒　なし

協力詰　５手（透明駒 2+1）

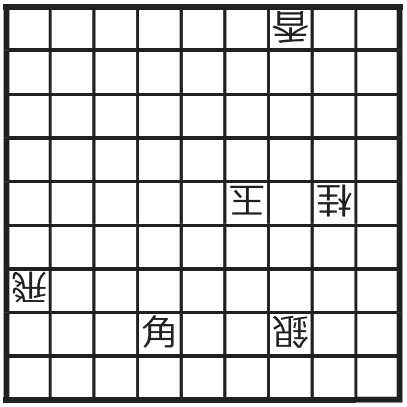
（5）太刀岡甫



持駒　金金

協力詰　５手（透明駒 1+3）
b) 33 歩→ 43 歩

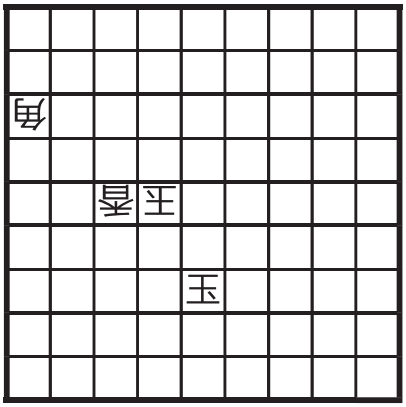
(6) 前担当 †



持駒　香

協力詰　７手（透明駒 1+2）

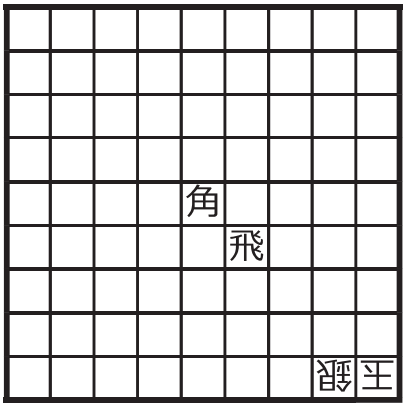
(7) 高坂　研



持駒　角桂

協力自玉詰　４手（透明駒 0+1）

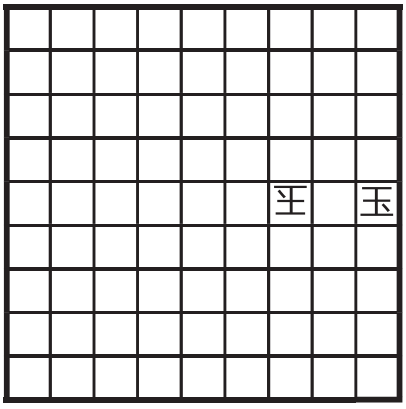
(8) 高坂　研



持駒　金

協力自玉詰　４手（透明駒 1+0）

(9) 上谷直希



持駒　なし

協力自玉詰　４手（透明駒 3+0）

透明駒 III
（フェアリー篇）

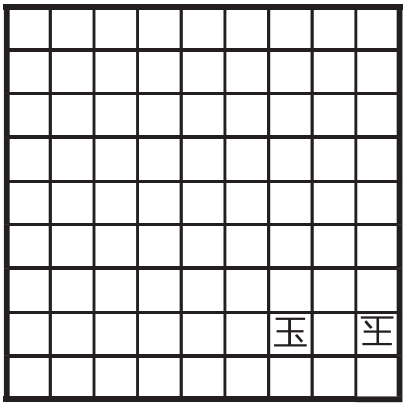
高坂　研

　このセクションでは、「透明駒＋フェアリールール」というタイプの作品を扱います。「透明駒だけでも大変なのに、更に難しくなりそう」と尻込みされる方もいらっしゃるかもしれませんが、ご心配なく。例題は 1 手詰からご用意し、配置も極力シンプルで、狙いが明快なものを選びました。

　とは言っても、慣れないルールでは詰んでいるかどうかの確認も大変でしょう。そこで以下では、透明駒が判明した枡はグレーにし、また性能が変化した駒については変化後の利きをゴシックで表すことにします。尚、各ルールの定義は 107-119 ページにありますので、馴染みのないルールについては、そちらでまずご確認下さい。

1 安南

(1) 上谷直希



持駒　なし

安南協力詰　1 手（透明駒 0+1）

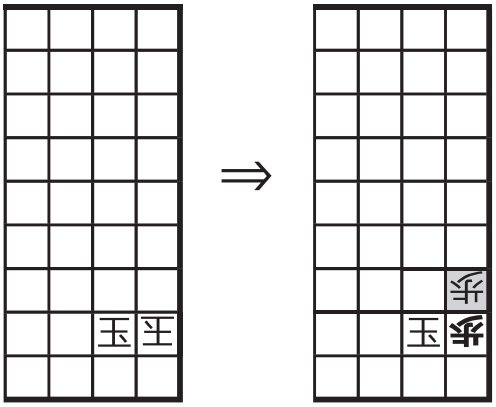
　普通の詰将棋だと絶対に詰む筈のない局面。しかし、これが安南だとたった 1 手で詰むのです。作者の意図が分かりますか？

　作意は

28 玉！迄 1 手

です。これが合法であることから、17 には玉方の透明歩（又は香、桂）がいることになり、いずれの場合も先手玉からかけられた王手を解除する手段はありません。よって、確かにこれで詰んでいます。

（詰め上がり図）

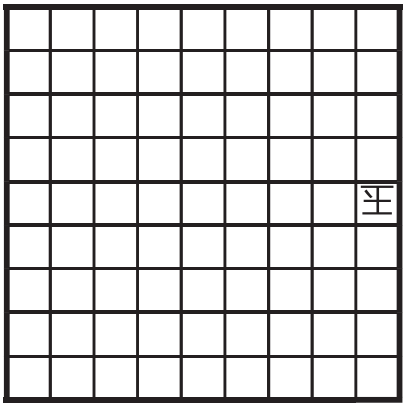


＊透明駒が歩の場合、玉は歩の利きになっている

　玉で玉を詰めるという、いかにもフェアリーらしい作品でしたね。ちなみに、同じようでも初手 29 玉？は 48 玉！とされて詰みません。この逃れ順は、「17 の透明駒は飛だった」と主張している訳です。

(2) 高坂　研

(Web Fairy Paradise 146, 2020)



持駒　なし

安南協力詰　3 手（透明駒 1+0）

　何の手掛かりもない初形。持駒もありませんから、初手 X とする他ありませんね。これに対して 14 桂と合駒してもらうことで、初手は 11 ～ 13 からの透明飛（又は龍）による王手だったことになります。

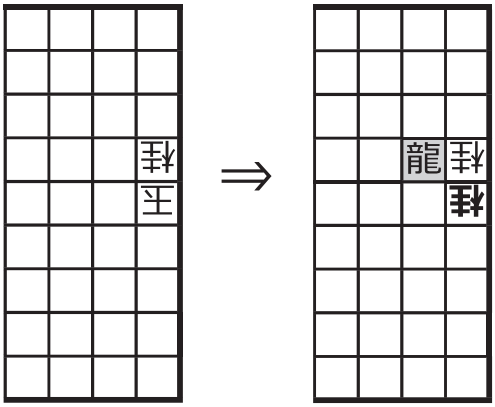
　続いて 3 手目も X としますが、同じ透明駒で連続して王手をかけられるのは、13 龍を 24 に動かす以外ありませんね。従って、3 手目を指し終えた後透明駒は可視化し、このとき玉は桂の動きになっていますから、確かにこれで詰んでいます。

　以上より、作意手順は

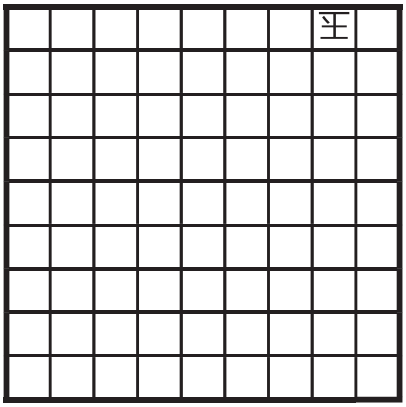
X、14 桂、X（= 24 龍）迄 3 手

ということになります。

（詰め上がり図）



(3) 馬屋原剛



持駒　飛

安南協力詰　3 手（透明駒 1+1）

b) 持駒　飛→角

　まず a) の初手は 12 飛！とします。これが王手になるということは、13 には斜め前への利きを持つ先手の透明駒があることになりますね。続いて 2 手目に 11 玉とすれば、その透明駒は角であると判明しますから、3 手目は駒種を明示して 22 角成とすることができます。尚、詰め上がりにおいて後手には 1 枚透明駒がありますが、それでもこの両王手を防ぐことは出来ないことをご確認下さい。

　では b) はどうでしょうか。a) と対になる手順を想像すると、初手 31 角！を思いつくのは容易でしょう。これで 32

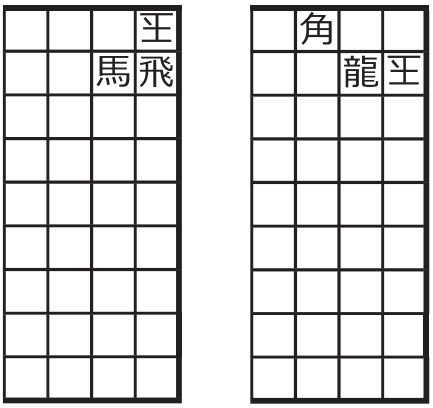
に先手の透明飛がいることを証明できますね。そして 2 手目 12 玉とできることから、22 には何か後手の透明駒がいることになり、これを可視化した飛で取れば詰。以上より、作意順を纏めると

a) 12 飛、11 玉（X=13 角）、22 角成迄 3 手
b) 31 角、12 玉（X=32 飛）、22 飛成迄 3 手

となります。a)b) どちらの解も、3 手目は可視化した透明駒が成ることで詰めていますね。

ちなみに、透明駒は駒台にあっても見えないので、最終手で透明駒を取って詰め上げても、これを「手余り」とは看做さないことになっています。

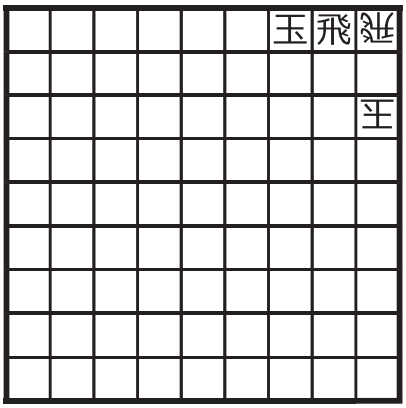
(a)/b) の詰め上がり図）



本作、a) では飛を角の利きに、そして b) では角を飛の利きに変化させて使っていますね。このように、2 解に縦（横）と斜めの対照性を持たせた構成を、チェスプロブレムの用語で ODT (Orthogonal-Diagonal Transformation) と呼びます。

2　キルケ

(4) 高坂　研



持駒　なし

キルケ協力詰　1 手（透明駒 0+1）

一見、11 飛成以外に王手をかける手がないように思えます。しかしそれだと、透明駒で取られても、あるいは合駒をされても、どちらにしても 1 手では詰みません。さて、どうしたらよいのでしょう？

正解は、

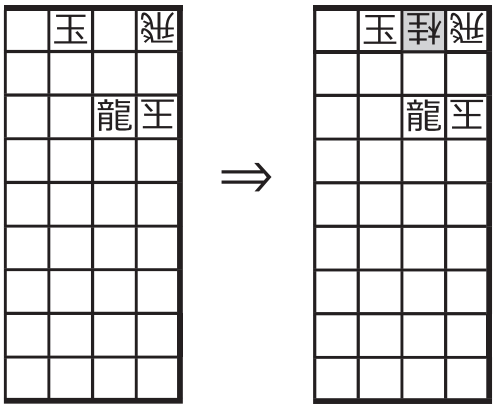
23 飛成！迄 1 手

です。「31 玉が取られちゃうよ」と思ったかもしれませんが、ご安心下さい。これが合法な手であることから、先手は「23 にあった後手の透明桂を取った」と主張できるのです！取られた桂はルールにより 21 に再生しますから、自玉への王手はちゃんと防げていて、なおかつ後手玉はこの龍を取り返すことができませんから（取ると、飛が 28 に再生するので）、確かにこれで詰んでいます。

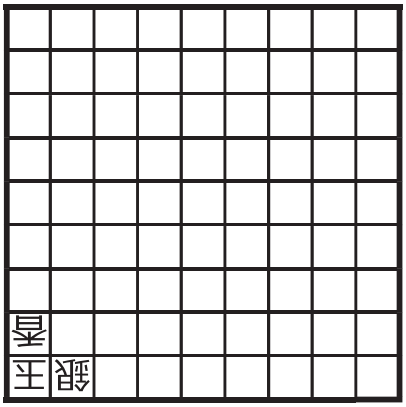
まるで自分で自分にヒモをつけているような詰め上がりはキルケ独特のものなので、是非ご記憶下さい。ちなみに、こ

のようなフェアリールールを利用した詰め上がりのことをフェアリーメイトと呼びます。

（詰め上がり図）



(5) 高坂　研
(Web Fairy Paradise 142, 2020)



持駒　なし

キルケ協力詰　3 手（透明駒 1+0）

まずは、98X と透明駒で香を取ってみましょう（この時点では、透明駒の種類はまだ不明です）。するとこの香は 91 に再生するので、98 香生と透明駒を取り返すことができます。出題図と全く同じ局面に戻ってしまいましたが、ここで 3 手目 X として「2 手目に取られ、自陣に再生した透明駒で王手をかけた」と主張すると、何とこれで詰が証明できます。

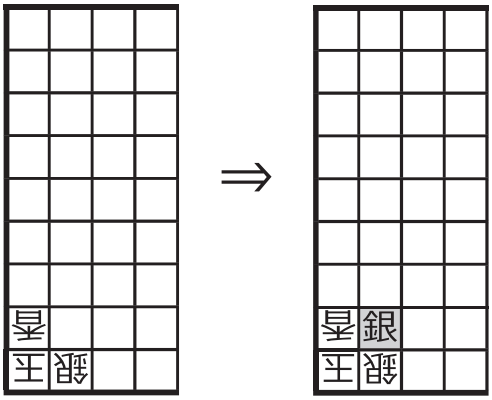
というのは、復活した可能性のある駒のうち、そこから 1 手で 99 玉に王手をかけることのできる駒は 79 銀しかないからです（つまり、初手は透明成銀で 98 香を取る手だったのです）。88 銀は玉に取られても又 79 に復活しますから、玉でこれを取ることはできません。従って、確かにこれで詰んでいることが示されました。纏めると、作意順は

98X/91 香、98 香生、X(=88 銀) 迄
3 手

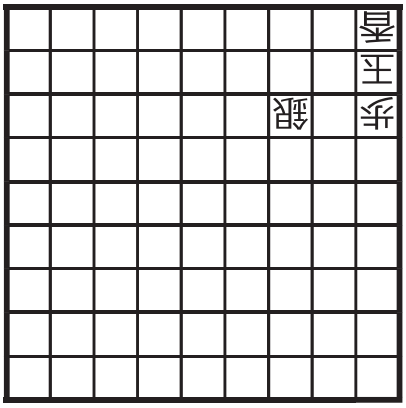
となります。

局面だけ見ると何も変わっていないのに、香が 91 と 98 を往復すると透明駒の正体が判明するのが面白いと思いませんか？

（詰め上がり図）



(6) 高坂　研
(Web Fairy Paradise 145, 2020)



持駒　なし

キルケ協力詰　3 手（透明駒 1+0）
２解

先手は透明駒で歩や香を取ることもできますが、それでは詰みそうにないですね。まずは X として、これがどんな王手なのかを玉方に決めてもらいましょう。

2 手目 42 銀とすることで、初手が透明飛（又は龍）による王手だったことになります。そして 3 手目も X とすると、52 以遠の飛（龍）では銀取り以外に王手をかけられませんから、2 手目は透明飛（龍）を取る手だったことになります。つまり、3 手目は 28 に復活した飛が王手をかけていたのです！この飛による王手は 4 通り考えられますが、いずれにしても玉で取り返すことはできませんから、これで詰んでいます。

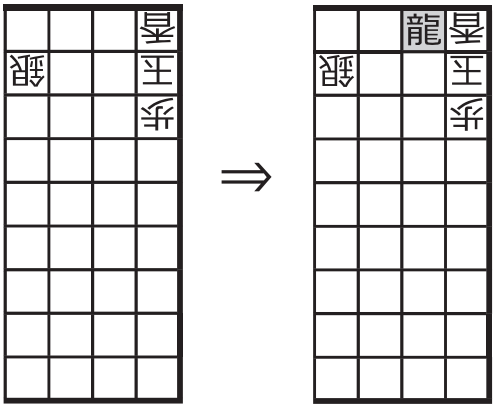
2 解目は初手 X に対して 34 銀とする筋で、この場合は透明角（馬）による王手だということになります。そして、3 手目 X とすれば、1 解目と同様の理由で「34 で取られた角（馬）が 88 に復活し、それが 22 に成った」ということが証明されます。以上より、作意は

① X、42 銀、X 迄 3 手
② X、34 銀、X(=22 角成) 迄 3 手

となります。これも (3) と同じ ODT ですね。

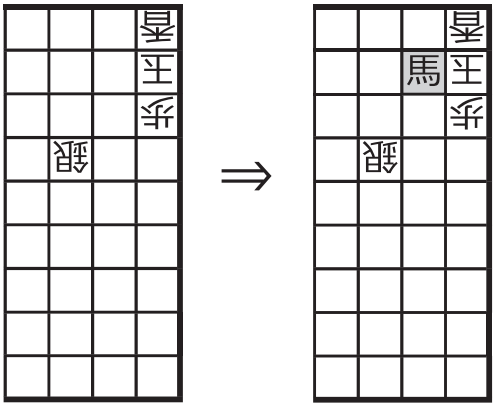
尚、初手から X、22 銀、22X? だと、最後に取られた銀が 31 に再生するので、22 銀と透明龍を取り返されて逃れます。

（①の詰め上がり図）



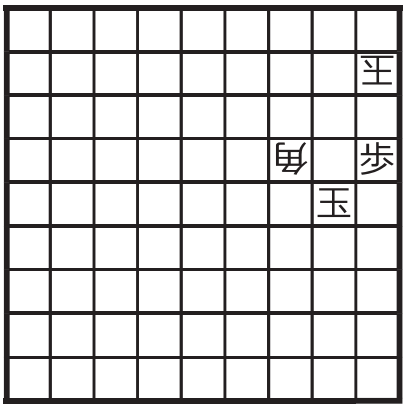
＊ 22 飛（龍）、23 龍の可能性もある

（②の詰め上がり図）



3　対面

(7) 高坂　研



持駒　なし

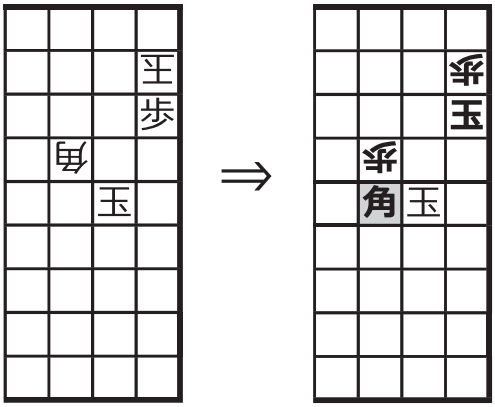
対面協力詰　1 手（透明駒 1+0）

　作意は

13 歩生！迄 1 手

です。「あれ、34 角で先手玉に王手がかかっているんじゃないの？」という声が聞こえてきそうですが、ご心配なく。これが合法な着手である（すなわち、王手放置ではない）ということから 34 角は性能変化していることになり、角の性能に変化した先手の透明駒が 35 にいることが証明されます。ちなみに、うっかり 13 歩成とすると 11 玉と躱されてしまいますのでご用心下さい。

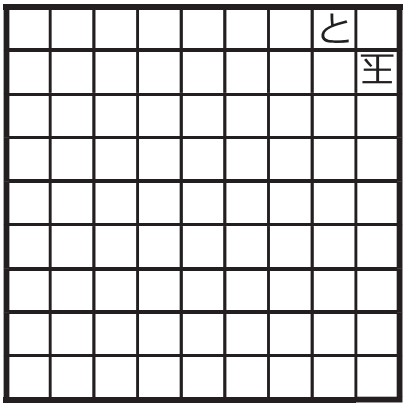
（詰め上がり図）



＊透明駒が歩の場合

(8) 高坂　研

(第 3 回透明駒解答選手権　2020/8)



持駒　なし

対面協力詰　3 手（透明駒 1+0）

２解

　これもまずは X として、玉方の出方を尋ねてみましょう。2 手目に 13 桂と合駒された場合は、1 筋に先手の透明飛（龍・香）がいることになりますね。続いて 3 手目も X とすれば、これは 14 にいた透明駒が桂の性能になって跳んだことを意味しますから、22 には透明飛（龍、成香）がいることになり、確かに詰んでいますね。尚、3 手目 X ではなく 22 と？としても一見詰んでいるように見えますが、

これは 21 歩などで逃れます。

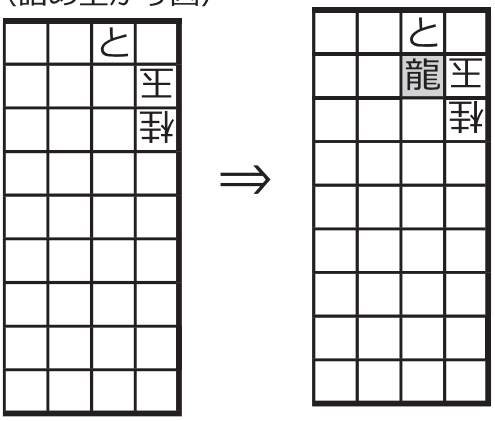
　これと対になる手順を探して頂ければ､2 つ目の順に思い至るのは容易でしょう。もう一つの解は、初手 X に対して 33 桂とする筋です（ちなみに、この 33 桂のような対面特有の合駒のことを「対駒」と呼んだりもします)。こちらは初手が 34 角（馬）だったことになり、3 手目はその透明駒がやはり 22 に跳び込む手だったことになります。纏めると、作意は

① X、13 桂、X 迄 3 手
② X、33 桂、X 迄 3 手

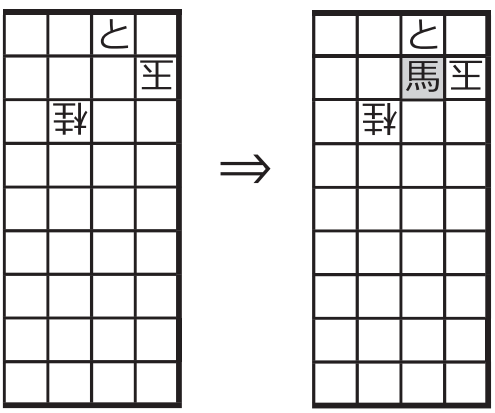
となります。

　これも又、飛（香）と角の対比を表現した ODT になっていますね。

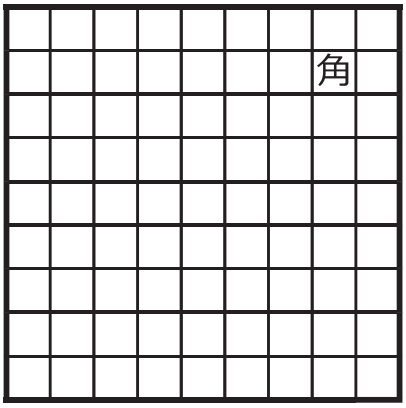
（詰め上がり図）



＊透明駒が飛だった場合



(9) 上谷直希
(第 3 回透明駒解答選手権　2020/8)



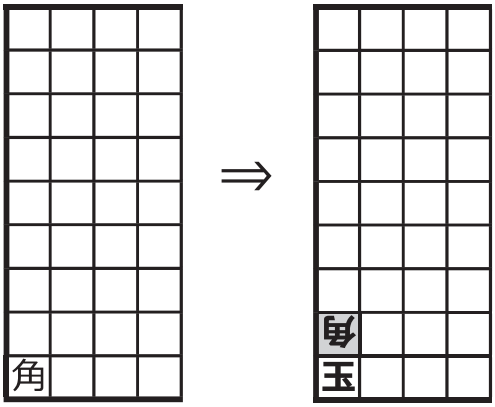
持駒　金

対面協力詰　3 手（透明駒 1+1）

　これは玉が透明駒になっている例です。どうしたら、玉位置を確定することができるでしょうか？

　正解は、初手 99 角生！です。これが王手になるためには、98 に玉がいなくてはなりませんね。従って、攻方が初手を指した後、居場所を見破られた玉が 98 に姿を現すことになる訳です（これがもし 99 角成？だと、89 玉の可能性もあるので、玉は透明なままになってしまいます)。

（初手 99 角生とした局面）



可視化された玉は角の性能になっている

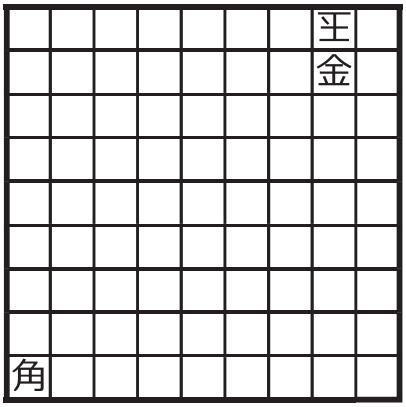
ので、2 手目は 21 玉！最後は 22 金と、頭金迄の詰となります。つまり、作意は

99 角生（X = 98 玉）、21 玉、22 金迄 3 手

ですね。

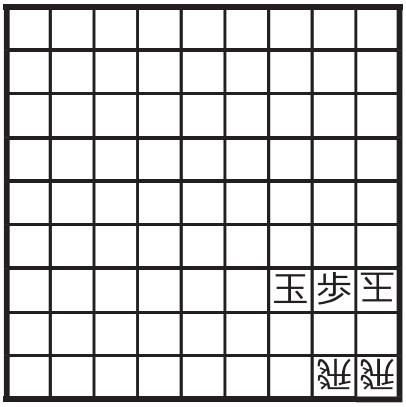
　短手数ながら、双方の駒の最遠移動が楽しめる好作だと思います。

（詰め上がり図）



4　背面

(10) 高坂　研



持駒　角

背面協力詰　1 手（透明駒 1+0）

　たったの 1 手で詰むのですが、分かりますか？正解は

18 角迄 1 手

です。確かにこれで詰んでいることを、以下でご説明しましょう。

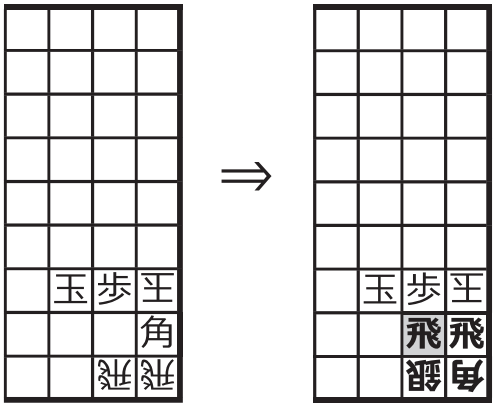
　まず、18 角と打った瞬間にこの角は飛の利きに、そして 19 飛は角の利きになります。すると、この手が合法であることから、28 に何か先手の透明駒があることになりますね。この透明駒は 29 飛と利きが入れ替わっていますから、現在飛の利きをもつことになります。従って、18 角を同玉と取ることはできませんね。又、19 飛は角の利きになっていますから、これで 18 角を取ることも不可能です。では、29 飛はどうでしょう？

　もし 29 飛がこの角を取れるとすれば、28 にある透明駒は銀か角ですね。その場合、確かに 29 飛で角を取ることはできますが、取った瞬間に 28 の透明駒は元の性能に戻りますから、これはセルフチェックの反則になってしまいます。

　最後に、19 飛で 28 の透明駒を取る手も考えてみましょう。この場合、18 角は飛の性能を失ってしまいますから王手を解除できているように見えますが、今度は 27 歩が飛の性能になるので、やはりセルフチェックです。

　以上より、玉方にはこの王手を外す合法手が存在しないので、確かに詰んでいることが示されました。たったの 1 手詰なのに、結構読みを必要とする作でしたね。

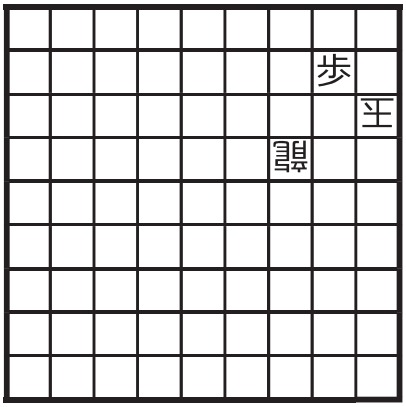
（詰め上がり図）



＊透明駒が銀の場合

(11) 高坂　研

(第 3 回透明駒解答選手権　2020/8)



持駒　なし

背面協力詰　3 手（透明駒 1+0）

　例によって、初手は X として相手の出方を覗います。これに対し、玉方は 2 手目に 24 龍とするのですが、これだけでは初手が

① 24 に透明駒を動かした（打った）

② 35 以遠から透明角で王手した

③ 33 に透明駒を動かした（打った）

のどれかは決まりません。しかし、更に 3 手目 X と指すと、①・②の可能性がなくなり、③だったことになります。

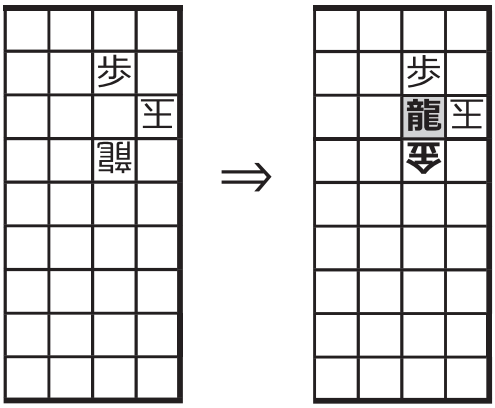
　2 手目に 24 龍と指せたことから 33 の透明駒は飛か金に絞られますが、飛だと 24 龍が王手放置の反則になってしまうので、結局 33 にいるのは金（又は馬か小駒成駒）ということになり、3 手目はこの透明駒を 23 に寄る手だったことも判明します。すると驚いたことに、玉はもう逃れる術がありません！

　というのは、この透明駒は現在龍の利きになっていますが、これを玉で取っても、或いは龍で取っても、どちらにしても 22 歩にその利きが移るのでセルフチェックの反則！（下図参照）よって、この局面はもう詰んでいるのです。以上より、作意は

X、24 龍、X 迄 3 手

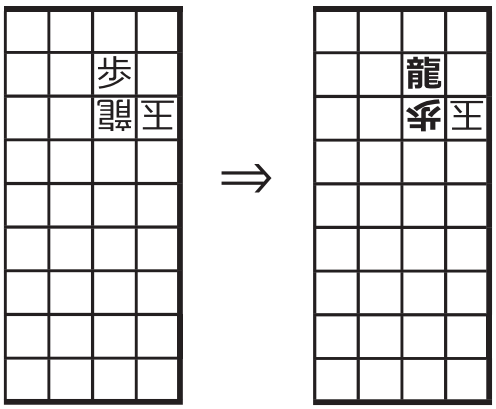
となります。

（詰め上がり図）



＊透明駒が金の場合

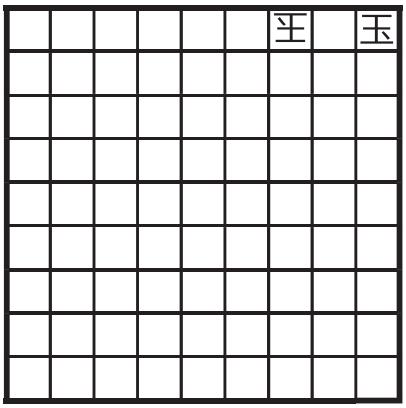
・23 透明駒を龍で取ると…



セルフチェックの反則！

(12) 小倉　杏

（Problem Paradise 79, 2017）



持駒　香

背面協力自玉詰　４手（透明駒 0+1）

　まずは 22 香としてみましょう。これが王手になることから、23 に玉方透明駒がいて、しかもその駒は斜め前への利きを持つことが分かりますね。玉方は 2 手目 X としますが、この透明駒は現在香の利きになっていますから、24 ～ 29 のどこかへ動いたことになります。

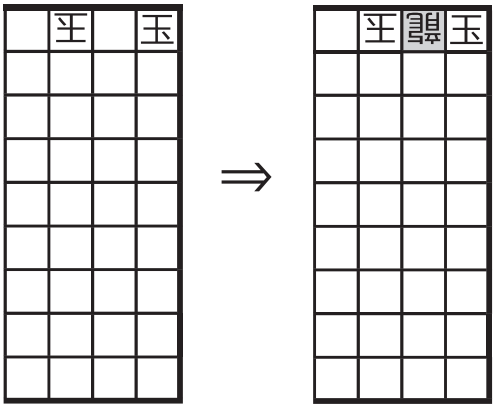
　更にここから 21 香成、同 X とすれば、24 以遠から 21 へ戻れることから透明駒は飛か龍だったことになり、最初の情報と合わせると透明駒の正体は龍に確定します。従って、これで確かに詰んでいますね。作意は

22 香、X、21 香成、同 X（＝龍）

迄 4 手

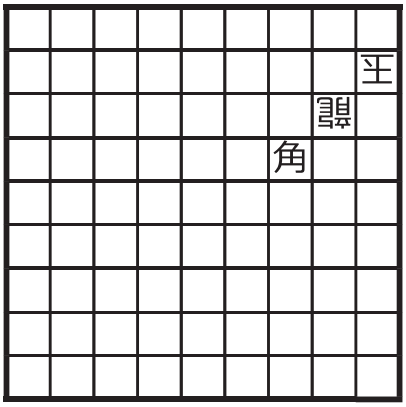
というものです。

（詰め上がり図）



5　マドラシ

(13) 高坂　研



持駒　銀

マドラシ協力詰　１手（透明駒 1+0）

　これは

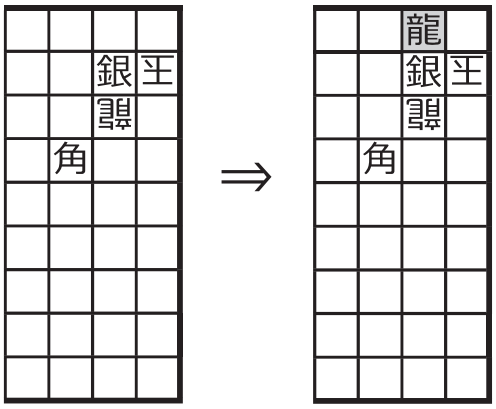
22 銀迄 1 手

です。これが王手であることから、21に攻方の透明龍がいることになりますね。つまりこの銀打は、龍どうしのマドラシ状態を解除する 1 手なのです。

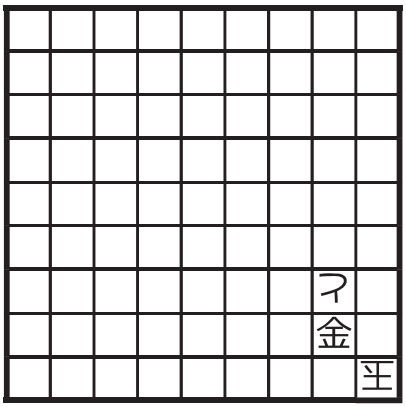
玉方は再びマドラシ状態を復活させてこの龍による王手を回避したいのですが、23 龍はピンされていて動けませんからこれで確かに詰んでいます。

マドラシでは、このようにマドラシ状態を解消したり、或いは逆にマドラシ状態を発生させる手がポイントになってきます。

（詰め上がり図）



(14) 高坂　研



持駒　飛

マドラシ協力詰　3手（透明駒 1+1）

初手 29 金に対し、平然と 18 に逃げる玉。この 2 手の応酬から、多くの情報を得ることができます。

まず、29 金はマドラシ状態になっていることが明らかです。このことから、玉方透明金が 39 にいたことが判明しました（38 にいたとすると、既にマドラシ状態なので 28 金は動けません）。でも、一寸ヘンですね。この金が利きを失っているのなら、そもそも初手は王手になっていないのではないでしょうか？

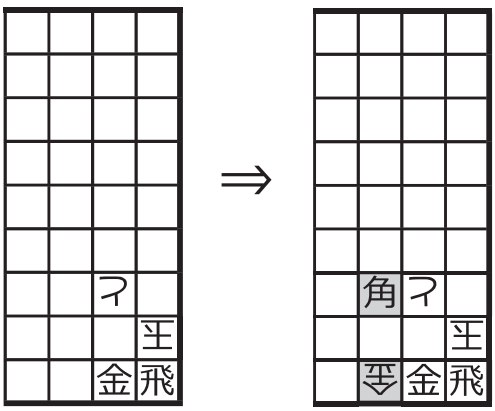
いえ、勿論これはちゃんとした王手です。つまり、初手は 37 以遠にいる透明角（馬）の利きを利用した開き王手だったのです！従って、3手目19飛と打てば、これで確かに詰んでいますね。作意は

29 金、18 玉、19 飛迄 3 手

というものでした。

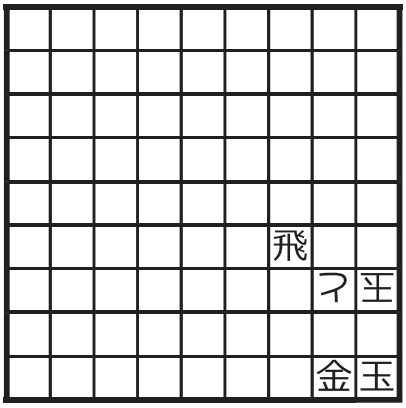
尚、平凡に 39 飛、X、29 金とするのは、28 金くらいで逃れ（同玉でも逃れます）。3 手目 29 飛も 39 飛とされて詰みません。又、初手 38 金と開き王手するのも、以下18玉、19飛に対して29飛！とマドラシ状態を作られてダメ。実は作意の29金には、「29飛という受けを消す」という意味合いもあるのです。

（詰め上がり図）



(15) 上谷直希

(第 3 回透明駒解答選手権　2020/8)



持駒　桂

マドラシ協力詰　3 手（透明駒 1+2）

　初手は 18 金としてみます。これを同 X ととらせておいて、29 桂と打てばこれで詰。しかし、手順を追っただけでは、何故これで詰んでいると言えるのか全く分かりませんね。以下、順を追ってご説明しましょう。

　まず、初手 18 金を取ったのは、後手の透明桂か透明飛のいずれかです。しかし透明飛だと 3 手目 29 桂が王手放置の反則になるので、2 手目は同桂成だったことになります。では、何故桂成なら王手放置にならないのでしょうか？

　それは、飛と違って成桂ならマドラシ状態を作れるからです！つまり、初形で 28 に先手の透明成桂がいれば、3 手目は合法な着手ということになる訳です。

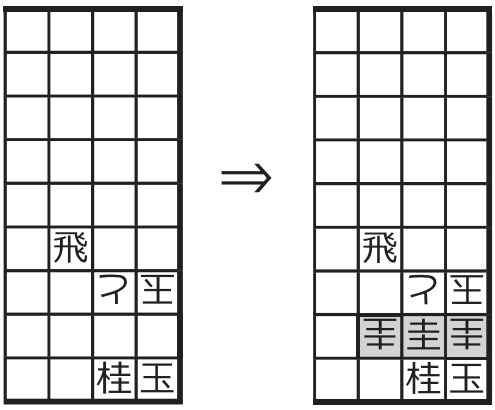
　しかし、この 28 成桂が初形で王手をかけていると、現在先手番であることに矛盾しますから、更にこの成桂もマドラシ状態になっていなければなりません。つまり、初形には 26 に後手の透明桂が、28 に先手の透明成桂が、そして更に 37（又は 18, 38）にも後手の透明成桂がいたことが分かりました。桂馬はこれで出尽くしていますから、3 手目 29 桂に対して 37 桂という受けは成立しませんね。よって、これで確かに詰んでいます。

　ロジックを追っていくと盤面に成桂が増えていくのが何とも愉快ですね。作意は

18 金、同 X、29 桂迄 3 手

というものでした。

（詰め上がり図）

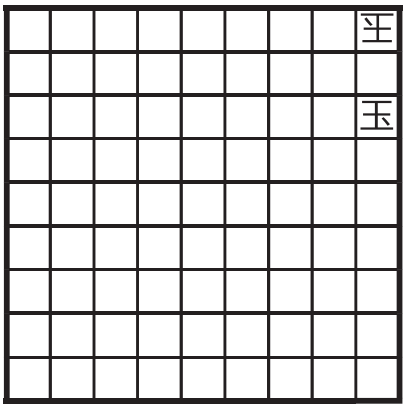


（圭＝成桂）

　ちなみに、この作品の中で既に利用しているのですが、「既にマドラシ状態になっている駒でも、新たに敵駒をマドラシ状態にする能力は持っている」というのが一般的な解釈です。言い換えると、「既に自らの能力を喪失していても、敵の能力を喪失させることはできる」という訳です。

6　天竺

(16) 高坂　研



持駒　飛

天竺協力詰　1 手（透明駒 1+0）

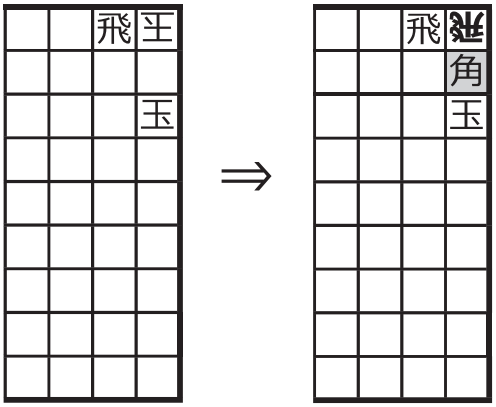
1 手詰で持駒が飛ですから、この飛を打つしかありませんが、さてどこに打ちますか？ 12 に打つと、後手玉は飛の利きになりますから横方向に飛んで行ってしまいます。しかし、例えば 51 飛としても同玉と取られてしまいますね。さて、どこに打ちますか？

正解は

21 飛迄 1 手

です！この瞬間、11 玉は飛の利きになりますから、これが合法であるなら 12 に何か透明駒がいる筈です。そして、12 に先手の透明駒がいるなら、それは角以外にないことも、すぐにお分かりでしょう。よって、これで詰という訳です。

（詰め上がり図）

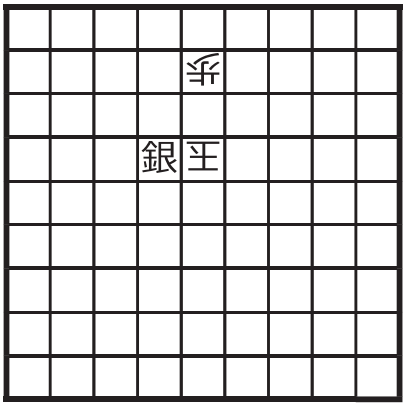


ちなみに、この局面に至る 1 手前の手は何か想像できますか？ 21 玉に 12 透明角が王手をかけて 11 玉と進んだのではありませんよ（何故なら、21 玉を 11 に動かすのは illegal です）。正解は 11 同玉です。つまり、11 飛を同玉と取ったか、あるいは 11 角を同玉と取ったかのいずれかですね。

このように、「その前の手は？」と時間を遡って局面分析することをレトロ解析といい、次章（透明駒 IV）で詳しく扱う予定です。

(17) 高坂　研

(第 3 回透明駒解答選手権　2020/8)



持駒　飛

天竺協力詰　3 手（透明駒 1+0）

例えば 73 銀生と開き王手すれば透明飛の存在は示せますが、それでは全然詰みません。

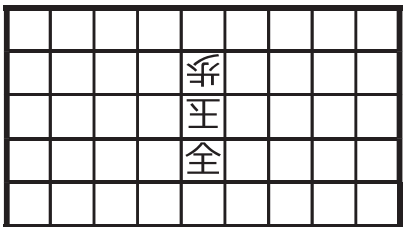
正解は 63 銀生！です。これで玉は銀の利きになる筈ですが、にも関わらず 2 手目は 53 玉！とします。この動きができるということは、初手の王手は銀だけのものではなかった、すなわち両王手だったということになりますね。すぐに分かるように、これは 74 ～ 94 のどこかに攻方の透明飛（龍）がいたことを意味します。

あとは普通に 54 銀成とすれば、金の利きになった玉は逃げる術がなく、これで確かに詰んでいます。結局作意順は、

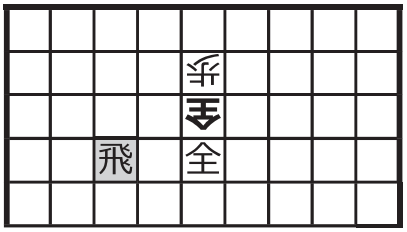
63 銀生、53 玉、54 銀成迄 3 手

というものでした。

（詰め上がり図）



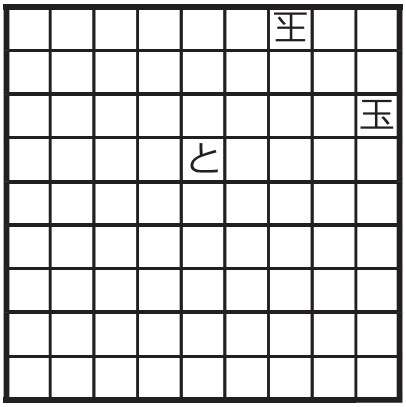
⇓



（全＝成銀）

＊透明飛（龍）のいる場所は 84、94 の可能性もある。

(18) 高坂　研



持駒　なし

天竺協力詰　3 手（透明駒 2+0）

b) 31 玉→ 32

a) は初手 X に対して 33 飛！とします。X は香（飛・龍）で、それに対して合駒をした訳ですね。ここで 3 手目も X とすれば、33 飛による自玉への王手を防ぎつつ 31 玉に王手をかけていることから、この手が 23 桂であることになり、31 玉は桂の利きになってしまいますから、これで詰んでいます。

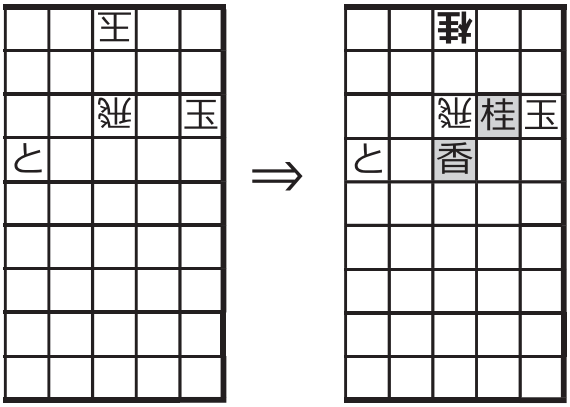
b) も同様に初手 X ですが、今度は 35 角！とします。これに対し X とすれば、a) と同様に詰んでいることが証明されます。

これまた ODT ですね。作意はそれぞれ

a) X、33 飛、X(=23 桂) 迄 3 手
b) X、35 角、X(=24 桂) 迄 3 手

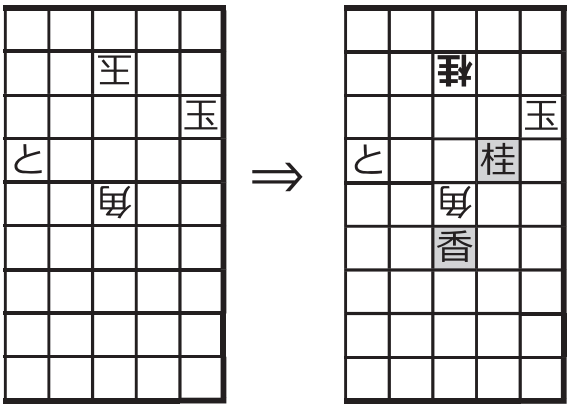
となります。

（詰め上がり図 a）



＊透明香のいる場所は 35 ～ 39 の可能性もある。

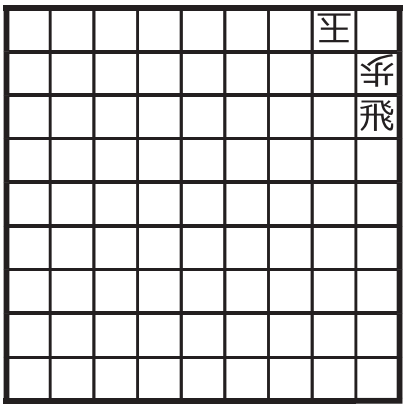
（詰め上がり図 b）



＊透明香のいる場所は 37 ～ 39 の可能性もある。

7　点鏡

(19) 高坂　研



持駒　なし

点鏡協力詰　1 手（透明駒 2+0）

透明駒が 2 枚もあると、結構悩まされるかもしれませんね。正解は

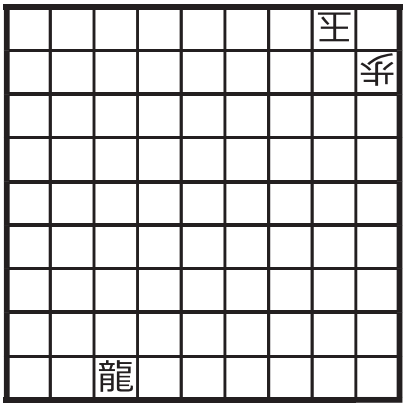
79 飛成！迄 1 手

です。

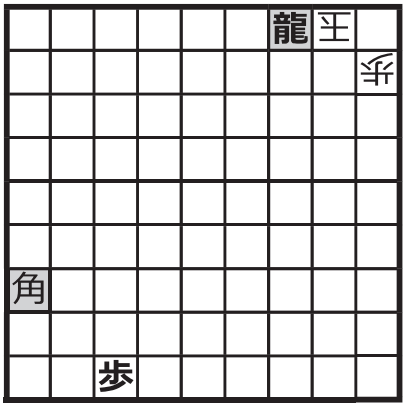
このように動けるためには 97 に透明角（馬）がいなければなりませんし、これが王手であることから 31 に何か攻方の透明駒がいることになります。これで玉方にもう受けはありませんね。このように、右上の玉を詰めるのに敢えて反対側の左下に着手するというのが、点鏡独特の感覚です。

ちなみに、31 飛成？としたら、玉方はどう逃れるのでしょうか。一見これでも詰んでいるように見えますが、これには 79 歩（これは合法な着手です！）とでもすれば、31 の龍は歩の利きになってしまいます。この逃れ方は点鏡では頻出ですので、是非ご記憶下さい。

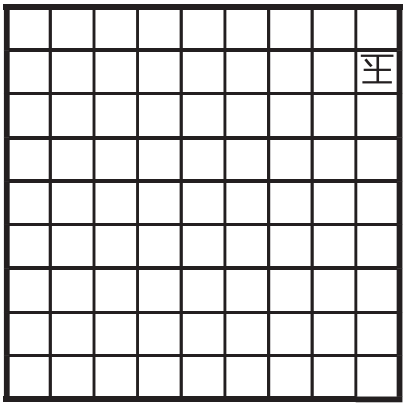
（詰め上がり図）



⇓



(20) 高坂　研



持駒　桂桂

点鏡協力詰　３手（透明駒 0+1）

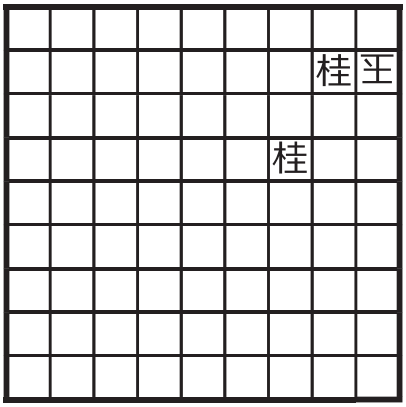
　まずは初手 34 桂と打ってみましょう。すると、これが王手になることから、76 に玉方の透明角（馬）がいることが分かりますね。この透明角はこの瞬間桂の利きになっていますから、２手目 X とすると、この透明角が 68 か 88 に動いたことを意味します。

　ここで３手目 22 桂打（これは反則ではありません！）とすれば、88 に透明馬がいることが証明されます。この馬はまたしても桂の利きになっており、動けませんからこれで詰。作意は

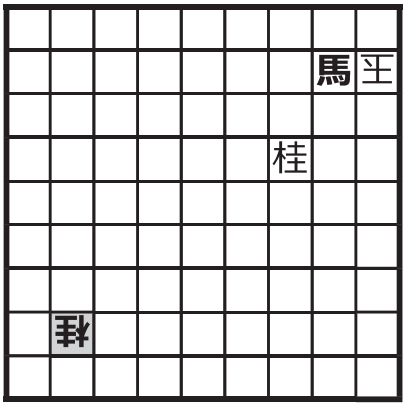
34 桂（X=76 角）、X、22 桂打（X=88 馬）迄３手

となります。

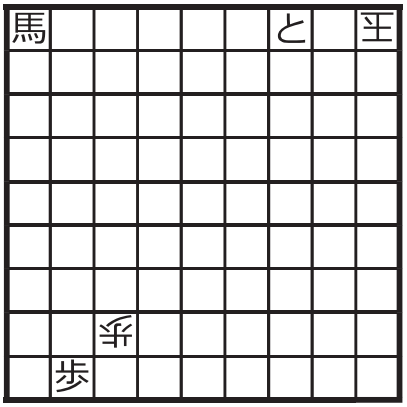
（詰め上がり図）



⇓



(21) 高坂　研



持駒　なし

点鏡協力詰　３手（透明駒 1+0）

　最後に、派手な例をお見せしましょう。まず、初手は 99 馬！です。この動きから、19 に透明飛（龍）がいることが分かりますね。しかし、これは両王手ではありませんよ。本当に王手をかけているのは、19 にいる透明飛です。

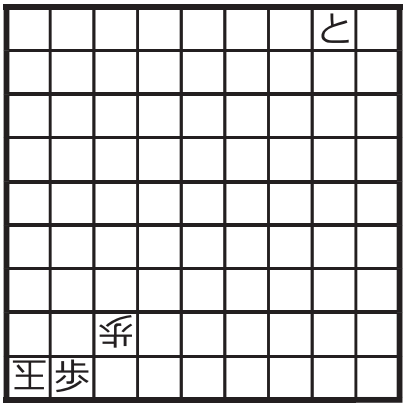
　99 にきた馬は、この瞬間に 11 玉と利きが入れ替わり、玉の利きになっています。逆に 11 玉の方は馬の利きになりますから、2 手目は同玉！と馬を取ることが出来ます。

　ここで 3 手目 21 とと指せば、今度は 89 歩と 21 との利きが入れ替わり、99 玉は詰んでいるではありませんか！つまり作意は

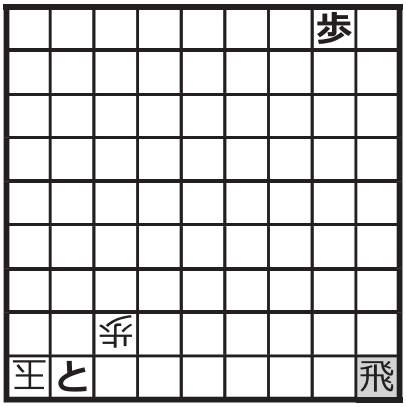
99 馬、同玉、21 と迄 3 手

となります。

（詰め上がり図）



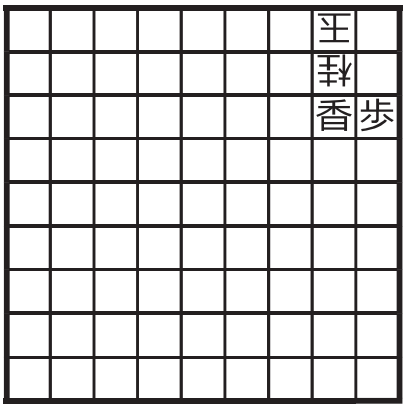
⇓



　この作の初手がそうですが、点鏡では 1 度の着手で最大 3 枚の駒の利きが変化します。利きが入れ替わったり、逆に入れ替わっていたものが元に戻ったりといった、目まぐるしい性能変化が点鏡の特徴であり、魅力の一つだと言えるのではないでしょうか。

8　強欲

(22) 高坂　研



持駒　銀

強欲協力詰　1 手（透明駒 1+1）

正解は

12 銀迄 1 手

です。でも、何故これで詰んでいると言えるのでしょうか？それを考える手掛かりとなるのは 23 香です。

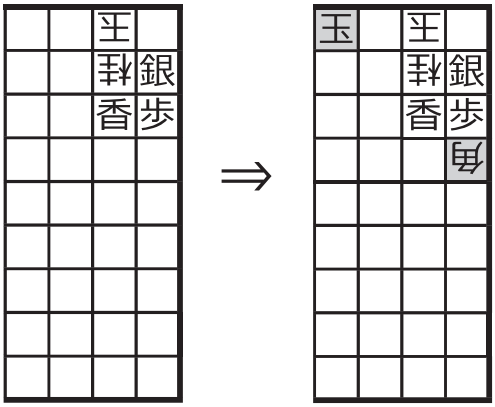
「強欲」というルールから、駒打ちよりも 22 香成という駒取りの方が優先される筈ですね。この駒取りが不可能だとすると、23香は実は動けない状態である、即ちピンされていることになります。すると、

①先手玉が 41、後手角が 14 にいる

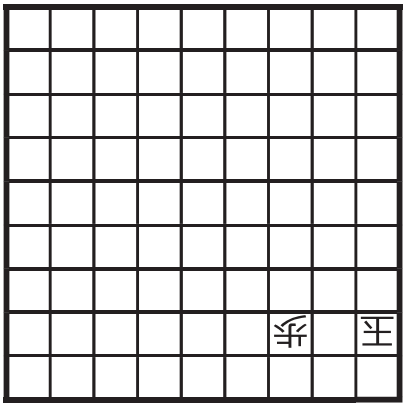
②先手玉が 45(56…)、後手角が 12 にいる

のどちらかになりますが、初手 12 銀と打てば②が否定されますから、これで確かに詰んでいます。

(詰め上がり図)



(23) 上谷直希



持駒　銀

強欲協力詰　3 手（透明駒 1+0）

初手は 19 銀としてみましょう。すると「強欲」というルールにも関わらず、玉はこれを取らずに 29 玉とします。それは、19 玉が合法ではない、つまり 19 銀にはヒモがついていることを意味しますね。

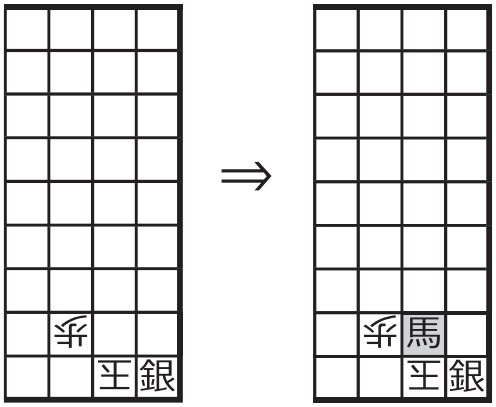
更に 3 手目 X とすれば、「19 にヒモをつけつつ、29 玉に王手をかけられる駒」ということで、28 に馬が浮かび上がってきます。作意は

19 銀、29 玉、X(=28 馬) 迄 3 手

となりますね。

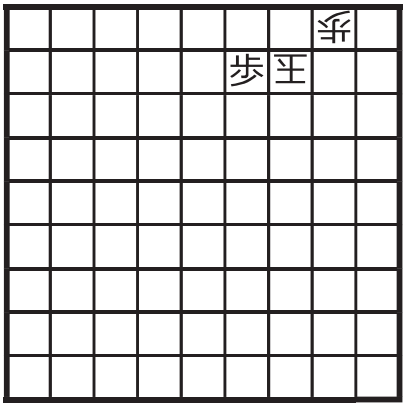
同じようでも、29 銀、19 玉、X ？という順だと、例えば「初形で 26 に透明飛がいて、3 手目が 16 飛だった」という可能性もあるので詰んでいません。

（詰め上がり図）



(24) 高坂　研

(第 3 回透明駒解答選手権　2020/8)



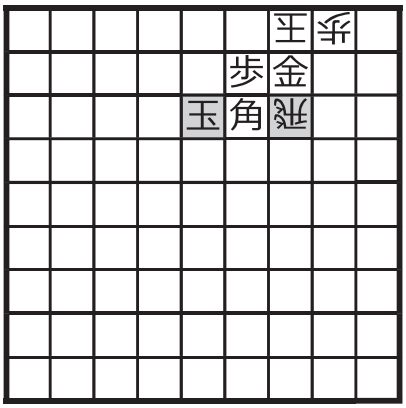
持駒　角金

強欲協力詰　3 手（透明駒 2+1）

試しに、初手 43 角としてみましょう。これを取らずに 31 玉とすれば、実は 43 に攻方透明駒の利きがあることになり、更に 32 金とすれば、21 角成と駒取りして王手をかける手が優先される筈なのに持駒を打つことから、実はこの角がピンされていることになります。

しかし、これでは詰んでいません。というのは、次図のような配置になっていると、32 金を透明飛に取られてしまうからです。

（失敗図）



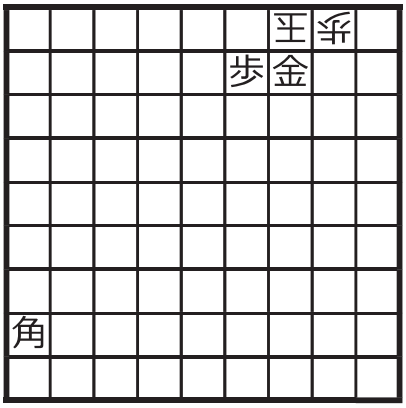
すぐに分かることですが、初手の角打の位置を 54、65…と遠ざけていっても全く同じ筋が成立します。では、どうしたらよいのでしょうか？

正解は 98 角です！角を最遠打したときのみ、横方向からのピンが不可能になり、最終手を透明飛に取られる可能性がなくなるのです。という訳で、作意順は

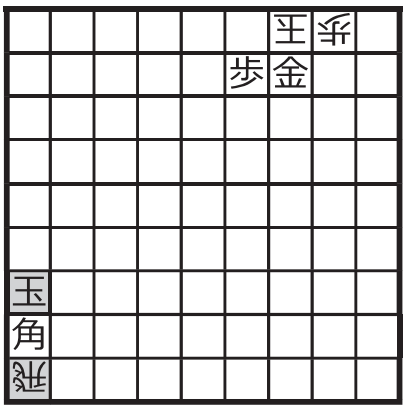
98 角、31 玉、32 金迄 3 手

というものでした。

（詰め上がり図）



⇓



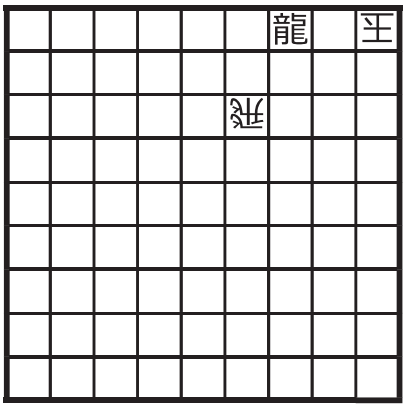
（99 玉、91 ～ 97 飛（香、龍）の場合もある）

ちなみに、玉方が 2 手目に歩を取らず 31 玉とする手は、「初形で 31 に攻方の透明駒がいる」と考えれば正当化できます（だから、透明駒は 2+1 なのです）。

また 42 歩は、透明飛が 92 にいるときの横利きを止める配置ですが、初形で透明駒が攻方 14 玉／玉方 41 角という可能性も消しています（つまり、作意通りに進むと、3 手目 32 金が illegal な手になる）

9 禁欲

(25) 高坂　研



持駒　なし

禁欲協力詰　1 手（透明駒 1+1）

作意は

21 龍迄 1 手

ですが、意味が分かりますか？この手は明らかに、玉方の透明駒を取っていますね。「禁欲」なのに駒取りをする、その着手を正当化する為の意味付けを考えてみましょう。

普通に考えると、このルールの下では 22 龍という着手が優先される筈です。これが非合法な着手になるとしたら、可能性は

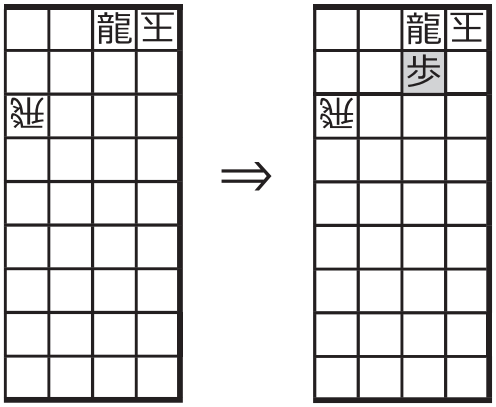
① 22 に攻方の透明駒がある
② 21 の透明駒が先手玉に王手をかけている

のいずれかです。では、①の具体例として 22 に例えば歩を追加配置してみましょう。この場合、駒取りせずに王手をかけるのは不可能なので、21 龍が正当化でき、これで詰んでいますね。22 の透明駒が香のときも、全く同様です。

②の場合はどうでしょうか。王手がかかっているといっても、24 玉／ 21 香のような配置では、21 龍は非合法な着手となってしまいます。21 龍が合法になる初形配置としては、例えば 32 玉／ 21 銀のようなものを考えることが出来ますね。21 の駒種を色々変えてみて、条件を満たす先手の玉位置が 32 以外ないことを実際にご確認下さい。

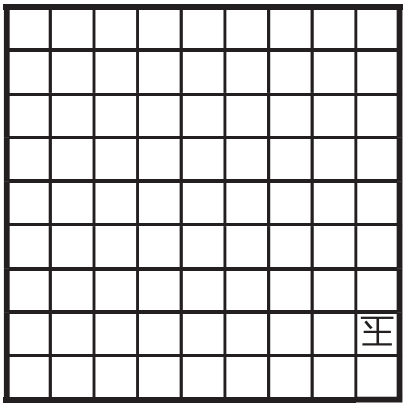
結局、どちらの場合も 21 の透明駒は確定しませんが（だから、最終手が駒取りでも手余り扱いとはなりません）、確かに詰んでいることが示されました。

（詰め上がり図）



＊ 22 に先手の透明歩がいた場合

(26) 上谷直希



持駒　金香

禁欲協力詰　３手（透明駒 1+0）

　初手 19 香を同玉と取ることで、この玉は駒取りせずにこの王手を躱す手段がないことになります。従って、初形における透明駒配置は、次の４パターンのうちのどれかですね。

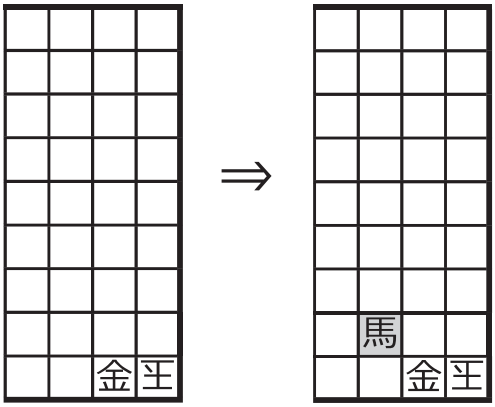
① 38 に馬（又は玉）がいる
② 21 ～ 26 に龍がいる
③ 21 ～ 27 に飛がいる
④ 29 に香がいる

　このうち④は、3 手目 29 金によって否定され、残りの①～③なら、いずれの場合も金打迄で詰んでいますね。以上より、作意は

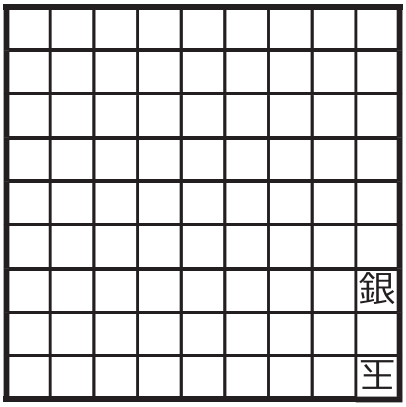
19 香、同玉、29 金迄 3 手

となります。

（詰め上がり図）



(27) 高坂　研
(第 3 回透明駒解答選手権　2020/8)



持駒　角銀

禁欲協力詰　３手（透明駒 0+35）

　初手 91 角を同 X と取ってもらうことで、多くの情報が得られます。まず、91 と 19 を結ぶ対角線上には合駒も移動合もできないことが分かりますね。更に、玉は 18 か 29 へ動くことで角の王手を躱せばよい筈なのに（そうすれば、駒取りせずに済みます）そうしないことから、

18 と 29 には 28 への利きを持たない玉方透明駒がいることになります。それが分かれば後は簡単。3 手目 28 銀打で詰みですね。結局、作意順は

91 角、同 X、28 銀打迄 3 手

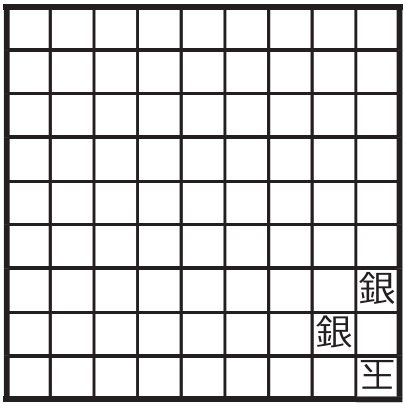
ということになります。

問題は、「何故最遠打しなければならないか」です。作意を見ただけで分かりますか？

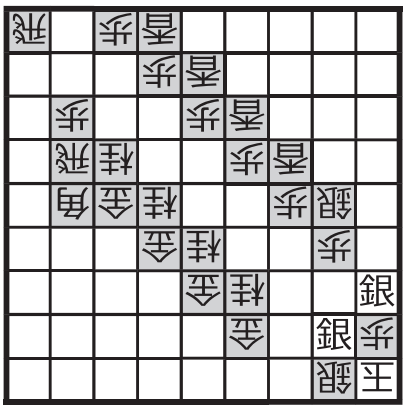
この問いに対する答は、初手 82 角？としたときの逃れ順を見て頂けば明らかです。つまり、もし 91 に透明角（馬）がいれば、最終手も同 X と取られてしまいますね。しかし、91 角なら同馬と取ることは出来ません。というのは、その場合透明馬は 81 又は 92 にいることになりますが、82 馬と移動合ができるのに 91 馬と駒取りするのは illegal だからです！

結局、91 角を取ったのは透明飛（龍）ということになり、確かに 28 銀打迄で詰んでいることが示されました。

（詰め上がり図）

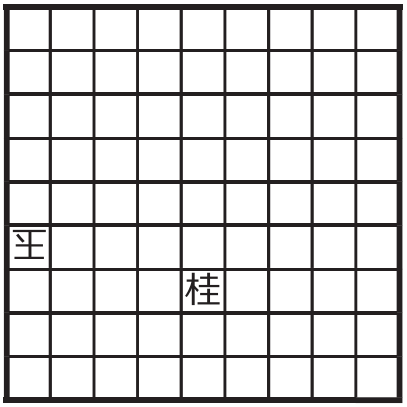


⇓



練習問題

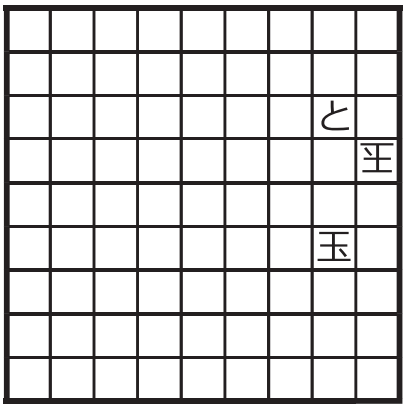
（1）高坂　研



持駒　なし

安南協力詰　3 手（透明駒 2+0）

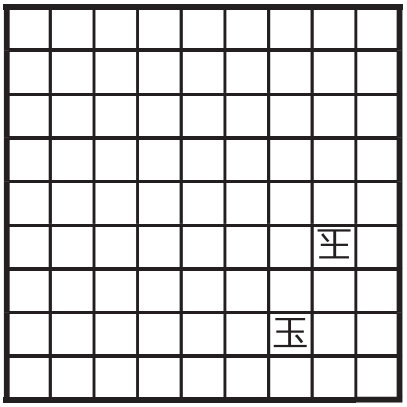
（2）高坂　研



持駒　金香

安南協力詰　3 手（透明駒 0+3）
＊利き二歩無効

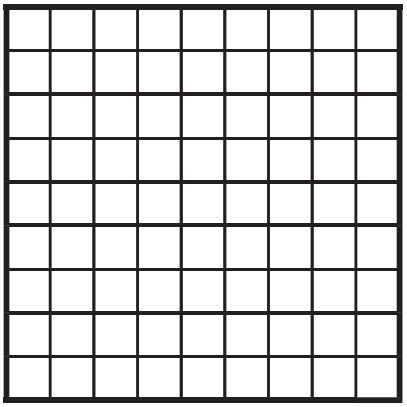
（3）曽和貴史



持駒　なし

安南協力詰　3 手　（透明駒 0+2）

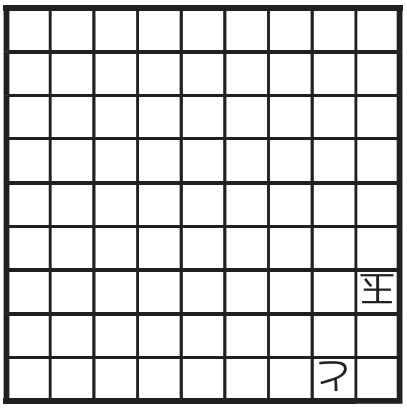
（4）佐藤一郎



持駒　角

安南協力自玉詰　2 手（透明駒 1+1）

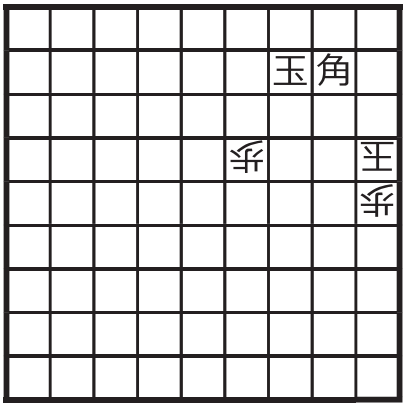
（5）久保紀貴



持駒　桂

安南協力詰　3 手（透明駒 2+1）
2 解

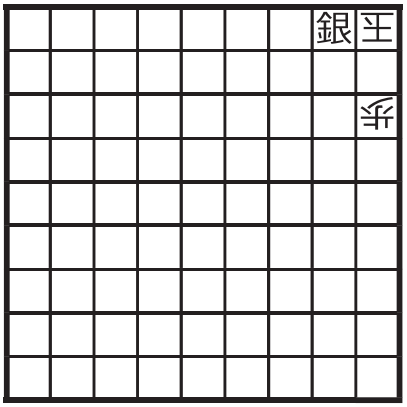
(6) 高坂　研



持駒　なし

対面協力詰　3 手（透明駒 0+2）

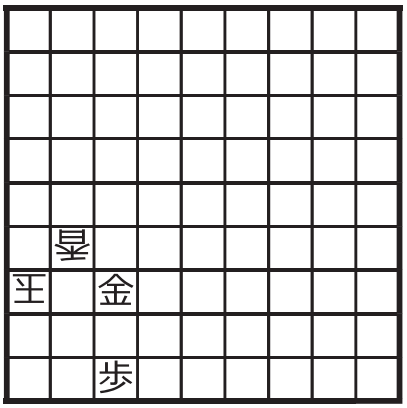
(7) 高坂　研



持駒　桂

背面協力詰　3 手（透明駒 1+1）

(8) 高坂　研

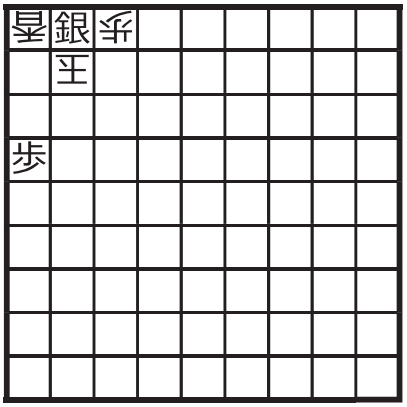


持駒　なし

キルケ協力詰　3 手（透明駒 1+0）

b) 透明駒 1+1

(9) 高坂　研

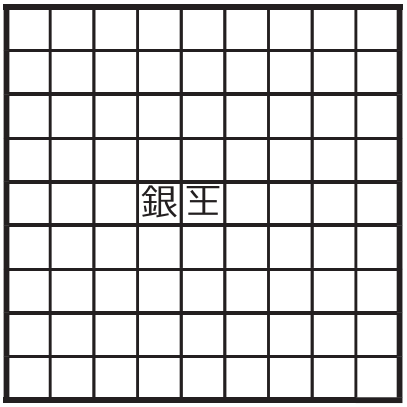


持駒　香

キルケ協力詰　3 手（透明駒 1+0）

b) 持駒　香→角

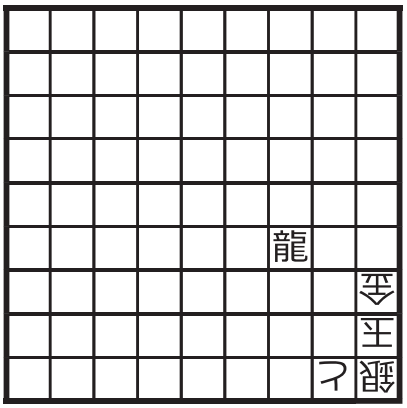
(10) 上谷直希



持駒　飛金

強欲協力詰　3 手　（透明駒 2+2）

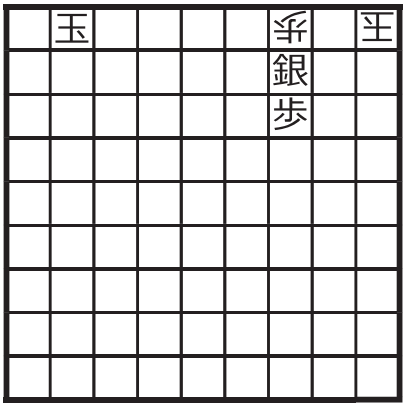
(11) 上谷直希



持駒　なし

禁欲協力詰　3 手　（透明駒 0+2）

(12) 高坂　研

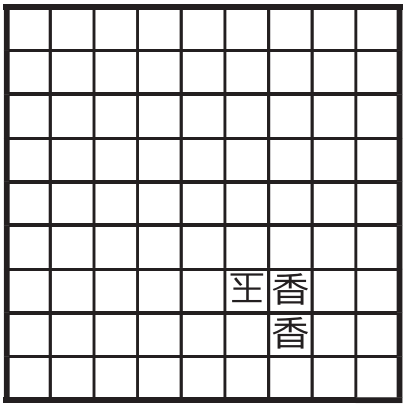


持駒　なし

禁欲協力詰　5 手（透明駒 1+0）

b) − 33 歩

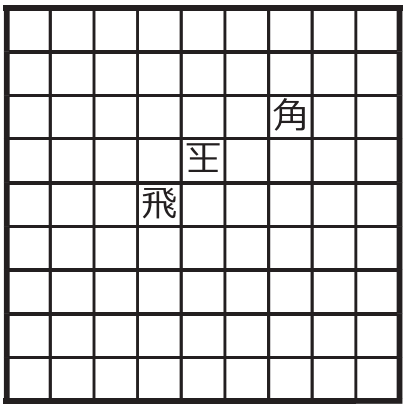
（13）上谷直希



持駒　なし

禁欲協力自玉詰　４手　（透明駒 3+12）

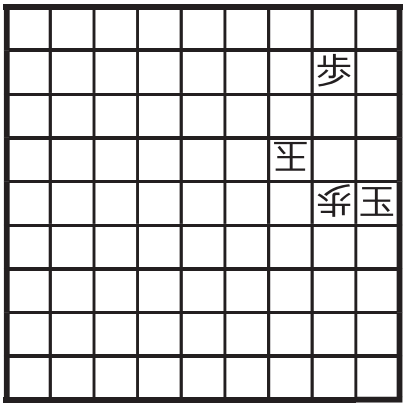
（14）高坂　研



持駒　なし

マドラシ協力詰　３手（透明駒 2+0）

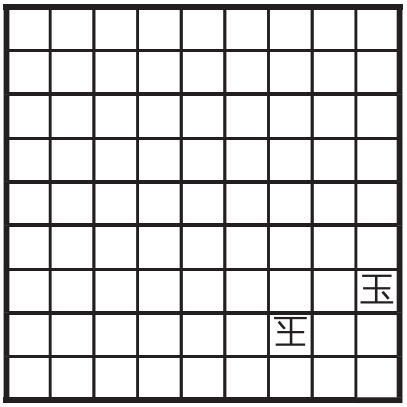
（15）高坂　研



持駒　角

マドラシ協力自玉詰　２手
（透明駒 1+2）

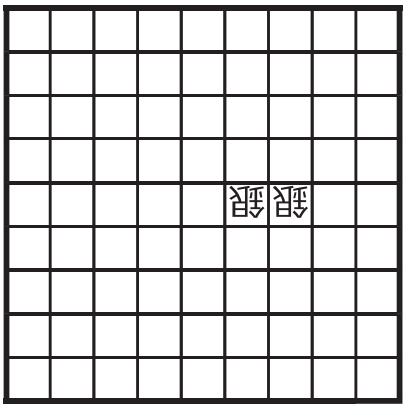
（16）上谷直希



持駒　なし

マドラシ協力自玉詰　４手
（透明駒 2+1）

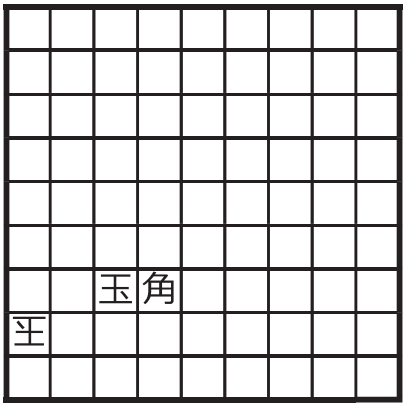
（17）高坂　研



持駒　なし

点鏡協力自玉詰　４手（透明駒 1+1）

（18）高坂　研



持駒　なし

天竺協力詰　５手（透明駒 0+1）

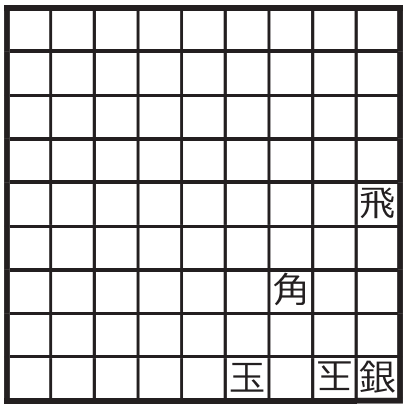
透明駒 IV
（レトロ篇）

高坂　研

ここでは、透明駒に関するこれまでのルールに加えて、「局面の合法性」も考慮するタイプの問題を扱います。合法性と言っても、それほど難しい概念ではありません。要するに、出題図は実戦初形から双方がルールを守って指した場合に到達可能な局面であるという仮定を加えておくのです（ですから、以下の図は全て双玉になっています）。

最初は余りピンとこないかもしれませんが、たったこれだけのことで、これまでとは全く異なるロジックを用いて局面を分析する（これを**レトロ解析**と呼びます）ことが可能になるのです！では、未来と過去が互いに影響を及ぼし合う不思議な世界の一端を、これから見ていくことにしましょう。

(1) 高坂　研



持駒　なし

協力詰　1 手（透明駒 1+0）

X（= 38 角（馬））迄 1 手。

透明駒がなければ 18 銀迄の 1 手詰ですが、出題図では先手の透明駒が 1 枚ある為に同玉！と取られてしまいます。つまり、16 や 17 に透明駒がいると主張されてしまう訳ですね。ここはやみくもに王手をかけるのではなく、まずは「透明駒はどこにいるか？」を考えてみることにしましょう。

例えば、透明駒が先手の持駒になっている可能性はあるでしょうか？　これはありませんね。何故なら、現在先手番ということは直前に後手の着手がなければなりませんが、玉がどこから動いてきたとしても、直前の局面が「不可能な両王手がかかっている」「玉同士が接触している」など、実戦では起こり得ない不可能局面になってしまうからです。

ここから、「先手の透明駒は、盤上のどこにいなければならないのか」が分かってきます。つまり、16 か 17 にいて 15 飛の利きを遮断してくれれば、18 玉に対して 19 銀、29 玉と動いてこの局面に到達したと考えることができるのです。

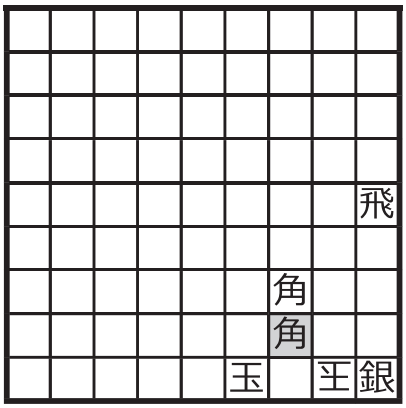
以上の考察により、正しい初手は X だと分かります。以下、これで確かに詰んでいることを確認してみましょう。

まず、先手の透明駒が 17 にいる場合、動いて王手をかけられる駒種は馬、飛、龍の 3 種のみ。ところが、このいずれの場合も、先に書いたような逆算ができません。つまりこれらはどれも不可能局面ですから、先手の透明駒は 17 にいないことが判明しました。

すると残るは 16 ですね。同様に考え

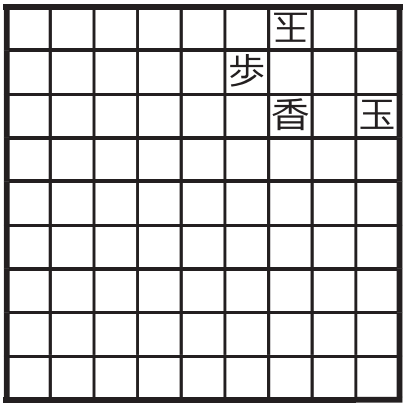
ると、16 にいる可能性のある駒種は角、馬、飛、龍の 4 種ですが、飛と龍はやはり不可能局面。従って 16 にいるのは角か馬であり、どちらにしても王手をかけるには 38 に動くしかありません。これで確かに初手 X で詰んでいることが証明されました。

（詰め上がり図）



＊ 38 角は馬の可能性もある

(2) 高坂　研
(Problem Paradise 80, 2017)



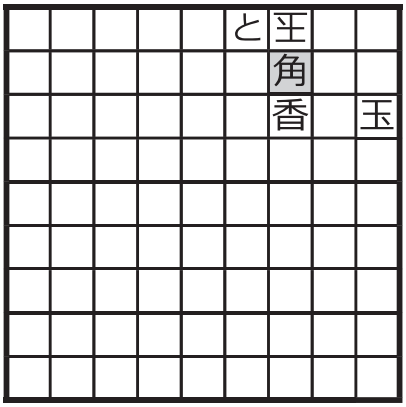
持駒　なし

協力詰　1 手（透明駒 1+0）
b) 13 玉→ 11

a) 41 歩成迄 1 手。
b) 13 飛迄 1 手。

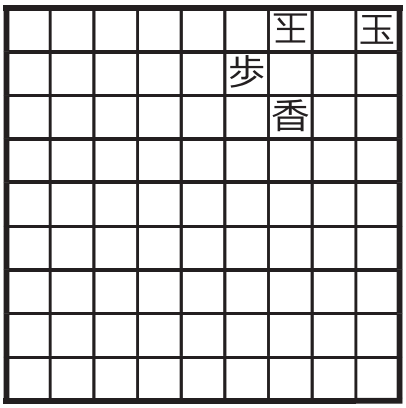
a) が 41 歩成で詰むのは、ここまで読み進めてきた読者にとってはほぼ自明でしょう。現在先手番ならば、32 に透明角がいることは必然だからです。

（a の詰め上がり図）



問題は b) です。こちらも a) と同様 41 歩成とできるように見えますが、実はこれは不正解。それは何故でしょう？

出題図 b)



持駒　なし

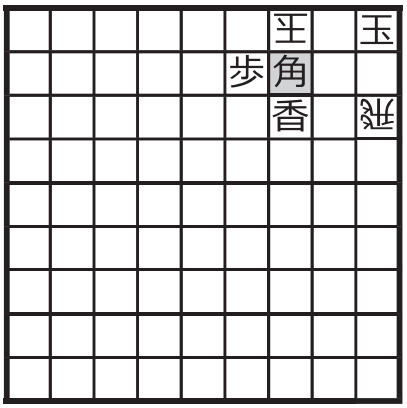
b) の出題図をよく見て下さい。何か気付きませんか？　そう､実はこの局面、先手番ではありえないのです！

というのは、もし先手番だとしたら直前の後手の着手がなければならないのですが、31 玉がどこから動いてきたとしても、その局面は非合法ですね。従って

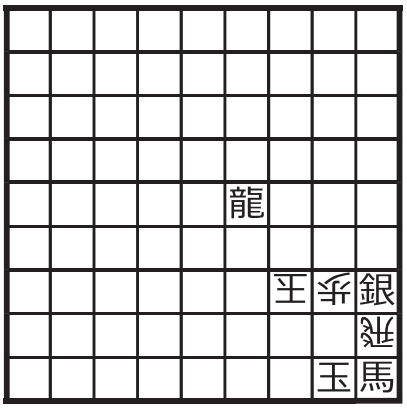
b) は現在後手番ということが証明され、後手から 13 飛とすれば先手玉が 1 手詰になります。

ちなみに、b) の場合もやはり 32 には先手の透明角がいることになりますから、飛打の場所も限定されていることになります。

(b の詰め上がり図)



(3) 高坂　研
(Web Fairy Paradise 105, 2017)



持駒　なし

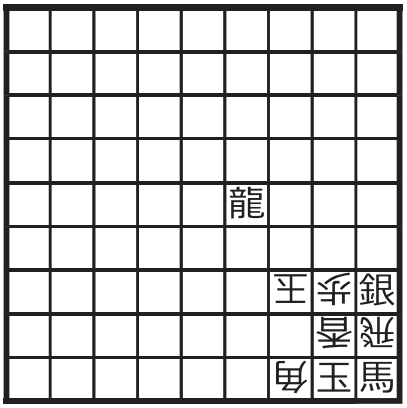
協力詰　3 手（透明駒 0+2）

28 馬、同 X、X（= 49 桂）迄 3 手。

初手は勿論、28 にある玉方透明駒を取る手です。3 手目に取った透明駒を打てることから、2 手目の応手は先手玉に王手をかけない同角生だったことも分かりますね（これは初形で 39 にいた訳です）。では、初手で取った玉方の透明駒は何だったのでしょうか？

もしこれが香／銀だったとすれば、それぞれ 4 手目に 38 合／ 48 玉とされて逃れ。従って、先手としては透明駒の駒種をきちんと確定する必要があります。そして、これを決定するにはレトロ解析が必要になるのです。

(28 の透明駒が香だった場合)



持駒　なし

もし初形で 28 にある透明駒が香ならば、出題図に至る直前の手は後手が 28 香と打つ手となりますね。しかしその香打を戻すと、更にその前の手が存在しません（19 に馬を打つことはできませんし、銀や玉で開き王手をかけることも不可能です）。よって「28 透明駒が玉方香の局面は illegal である」と結論することができます。

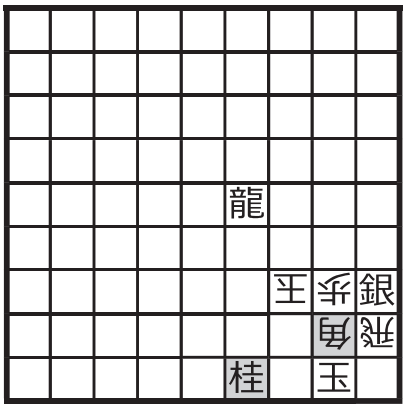
28 の透明駒が金や銀であっても、同様に不可能局面であることは明らか。でも、角が売り切れている以上、28 の透明駒は必ず先手玉に王手をかけている筈なのですが…。

ここで、28 の透明駒が成桂なら逆算

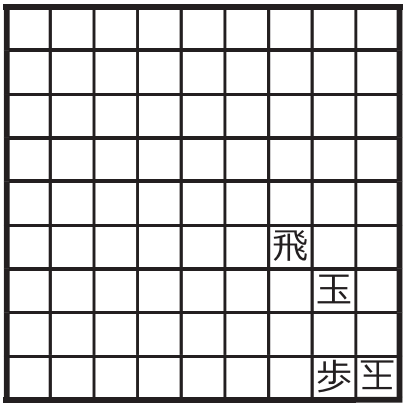
可能であることに気付いた瞬間が、解図の醍醐味というものでしょう。つまり、例えば 16 桂が 28 歩を取って成った局面だと解釈すれば、これは逆算可能になるのです！

従って、3 手目の X は 49 桂だったということになり、これで確かに詰んでいることが示されました。

（詰め上がり図）



(4) 高坂　研
(Problem Paradise 79, 2017)



持駒　なし

協力詰　5 手　（透明駒 0+1）

16 飛、X、18 飛、29 玉、
19 飛打迄 5 手。

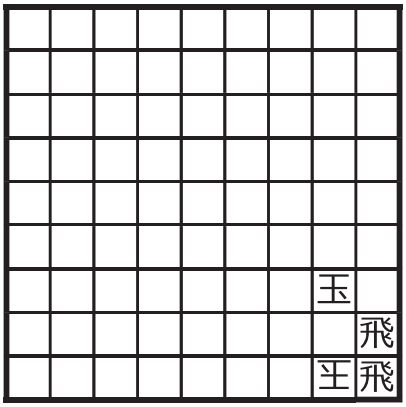
最終手で打った飛は明らかに 3 手目 18 で取った透明駒ですが、何故これが飛だと断言できるのでしょうか？それを証明する為にも、レトロ解析が必要となります。

もしも、2 手目の透明駒の着手が、駒台から盤面に駒を打つ手だったとしましょう。すると、出題図が先手番であることと矛盾が生じるのですが、分かりますか？

出題図が先手番ということは、直前に後手の着手があった筈です。透明駒が後手の駒台にある以上、19 玉が動かざるを得ませんが、どうしても不可能局面になってしまいます。これを回避するためには（つまり、現在先手番であることを正当化する為には）、出題図において後手の透明駒は駒台ではなく盤上にいなければなりません！これなら、「直前の後手の着手は透明駒によるものだった」と考えることができます。

そうすると、2 手目の透明駒の着手は 18 への移動合だったということになり、そういう着手が可能な駒種は飛に限られますから、先手の駒台に乗った時点で透明駒は可視化し、最終手が飛打であると宣言できます。お分かり頂けたでしょうか？

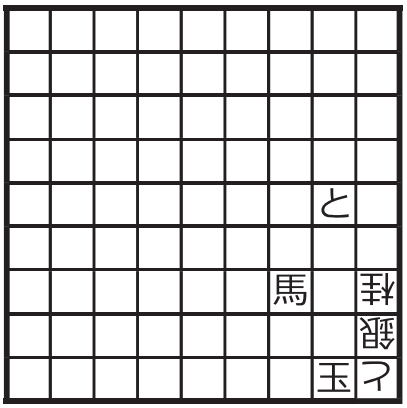
（詰め上がり図）



最後に、フェアリールールにレトロを絡めた作品も、一つご覧に入れましょう。

(5) 高坂　研

(第 4 回透明駒解答選手権　2020/10)



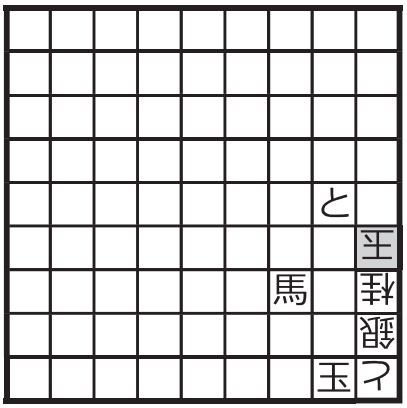
持駒　なし

安南協力詰　1 手（透明駒 0+1）

28 桂成迄 1 手。（15 と？）

現在先手玉には、普通の詰将棋なら絶対あり得ない 3 重王手がかかっているように見えますね。しかし安南なので、実際には 19 とは銀に、そして 18 銀は桂の利きになっており、本当に王手をかけているのは 17 桂のみです。勿論、この王手を放置することはできませんから、後手の透明玉は 16 にいることがすぐに分かります。

（16 玉を追加した局面）

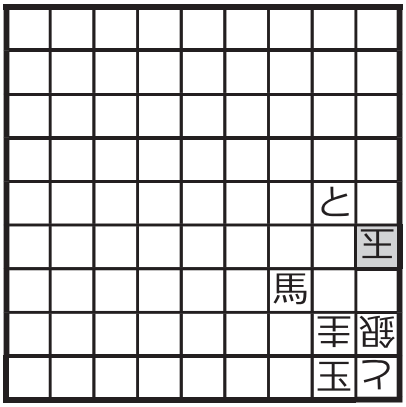


では、この玉を 1 手詰にする手はどれでしょう？一見、複数の手段があるように見えますが、実は 26 とや 26 馬は同桂！と取られてしまいます（桂は玉の利きになっているので）。ああそうか、15 と迄の 1 手詰かと思いきや、これも不正解。さて、どこがオカシイのでしょうか？

実はこの局面、先手番ではあり得ないのです。例えば後手 27 玉の配置から 37 馬、16 玉と進んだ局面だと想定してみると、37 馬が非合法な着手になっています（17 桂による王手放置の反則）。同様に、直前の着手が 17 桂や 18 銀だったとしても、やはり合法な逆算はできません。以上より、この局面は後手番ということが証明されました。

従って、正しい手は 28 桂成ということになり、これは成桂と 18 銀による両王手なので、同馬と取っても受けになりませんし、19 とが銀の利きになっているので、同玉ともできません。従って、確かにこれで詰んでいますね。「1 手詰にできるように相手の玉を追加したら、逆に自玉が 1 手詰にされた」という一局でした。

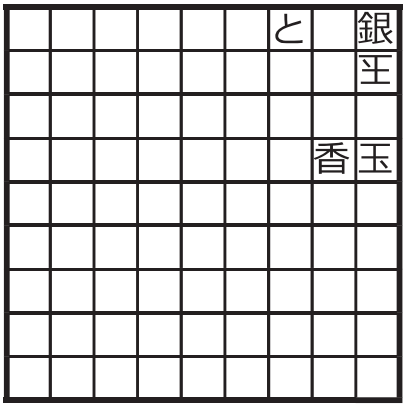
（詰め上がり図）



（圭＝成桂）

練習問題

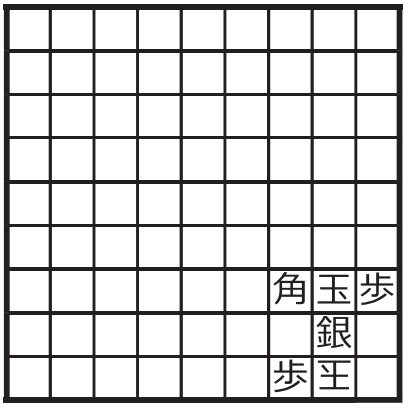
（1）高坂　研



持駒　なし

協力詰　１手（透明駒 1+0）

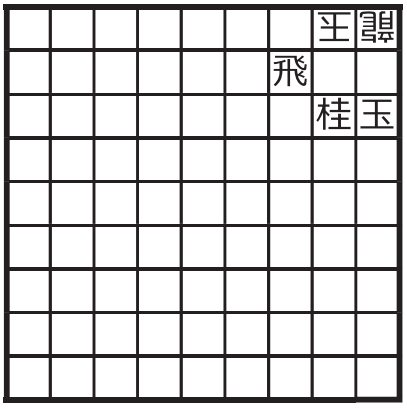
（2）高坂　研



持駒　なし

協力詰　１手（透明駒 1+0）

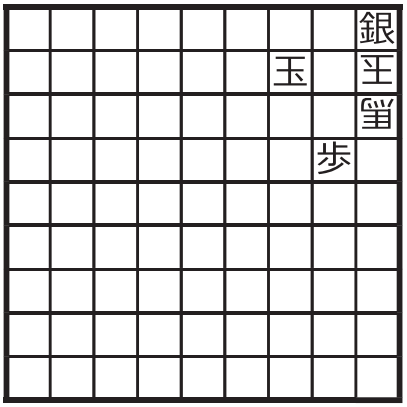
（3）高坂　研



持駒　なし

詰将棋　１手　（透明駒 1+1）

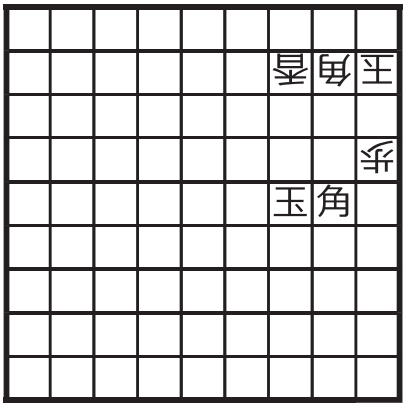
（4）高坂　研



持駒　なし

協力詰　３手（透明駒 1+0）

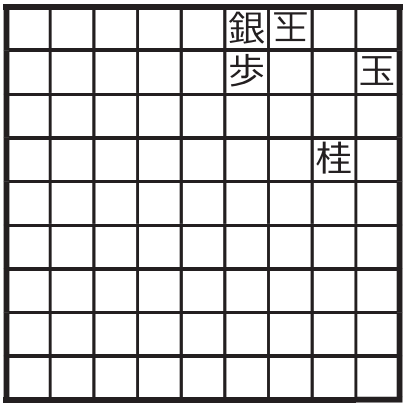
（5）高坂　研



持駒　なし

キルケ協力詰　３手（透明駒 0+2）

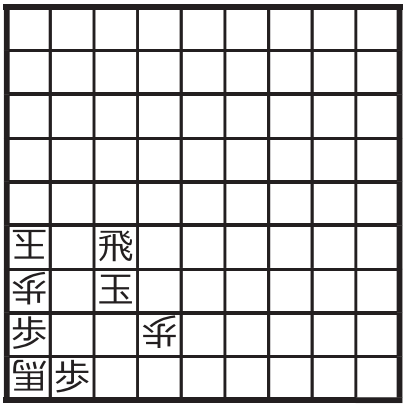
(6) 高坂　研



持駒　なし

協力自玉詰　４手（透明駒 1+1）

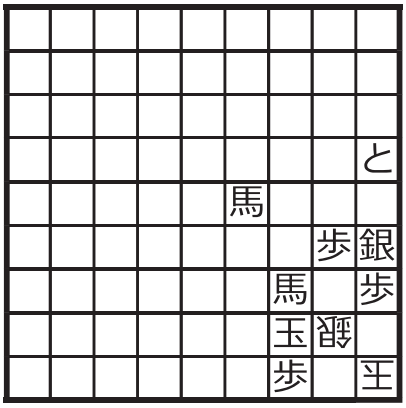
(7) 高坂　研



持駒　桂

協力詰　5 手（透明駒 0+2）

(8) 高坂　研



持駒　なし

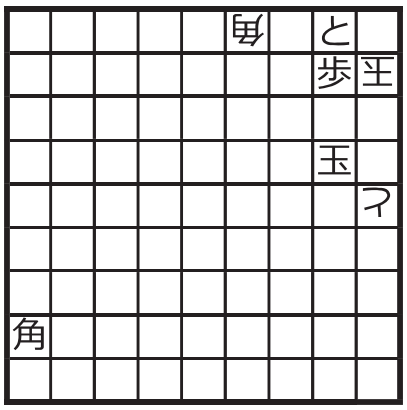
詰将棋　9 手（透明駒 0+1）

解答篇

透明駒Ⅰ
練習問題　解答

會場健大

(1) 相馬慎一、久保紀貴
（詰パラ　2013/11）



持駒　銀

詰将棋　5手（透明駒 0+1）

13 銀、同 X、11 と、同玉、
21 角成迄 5 手。

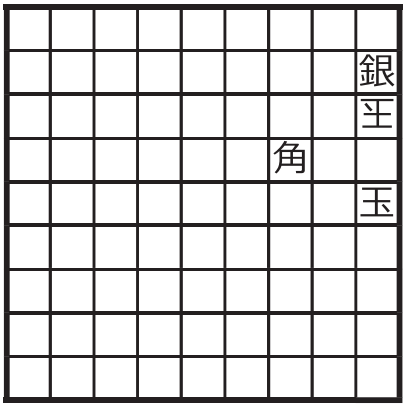
表面的な手順だけ追うと、本作は練習問題にあった透明駒の位置を固定する手順の作といえる。初手に 13 銀と捨ててしまい、13X と取らせる。13X と取りを行える駒は飛か龍しかないが、3 手目に 11 とと着手していることから、龍だった可能性は否定される。そのため 13 の駒は飛車に決まるが、この駒はなんであっても 21 角成までの詰上がりを邪魔しないので本質ではない。

ということで、解くだけならこのように基本を押さえられていれば簡単だが、本作のおもしろいところは紛れにある。初手に 89 角と引く手がそれで、一見これでも詰んでいそうに見える。たとえば 23 歩合なら同角成と取ってしまって、同角に 13 銀と打つ。14 以外に透明駒があったとき、13 銀を取れる位置、駒はなく、14 に透明駒があったときには、それは 24 玉に王手をかけないような駒でなければならないので、13 の駒も取れない。

同角成に対して、同角ではなく同 X なら、これにも 13 銀と打てばよい。23 の透明駒は前に利かない駒であり、角は売り切れなので、桂だったのだ、ということになる。

しかし、89 角に 67 桂合とするとどうだろうか。以下同角、56 桂合、同角、45 桂合、同角、34 桂合、同角、23 歩合とする。先ほど同様に 23 同角成、同 X と進んだときに 4 連続桂合の効果が表れる。いま 23 に進んだ透明駒が、24 に利きを持たないという可能性はなくなっているのである。角は盤上に売り切れ、桂も先手の駒台にすべて出そろっている。透明駒は見えていない駒のどれかなので、この駒は必ず 24 の玉に逆王手をかけていることになり、逃れ。

(2) 久保紀貴
（詰パラ　2014/5）



持駒　なし

詰将棋　5手（透明駒 1+1）

23 銀不成、X、X、X、
14 銀迄 5 手。

初手の 23 銀不成は、盤上の駒では王手になっていない手を指すことで、透明駒による王手を主張する手筋。これによって、11 に先手の飛か龍がいることがわかる。対する着手としては、普通駒の合駒を 12 歩合などとする手もあるが、12X とされたときに困ってしまう。X と応手すると、これで 12X による王手を解除したということは、玉方の透明駒で 12 の攻方透明駒を取ったという可能性しかあり得ないが、続けて 12 銀成とされて早く詰んでしまう。

そういう事情があるので、玉方は 2 手目に X としておく。一言でいうと、普通駒を盤上に登場させると○○ X と透明駒の餌食にされてしまうので登場させない、という手段である。これは 11 の攻方透明駒を取っているか、12 に合駒として（あるいは移動合として）置かれているかのいずれかである。もちろん玉方としては前者であるといえればうれしいが、この段階では決まらない。もし仮に 3 手目 12 銀成としてくれれば、喜んで 12X とする。4 手目に 12X ができるということは、3 手目の 12 銀成は透明駒を取る手ではなかったということになり、したがって 2 手目の X は 11 で先手の透明駒を取る手だったのだ、ということがレトロスペクティブに証明できるからだ。

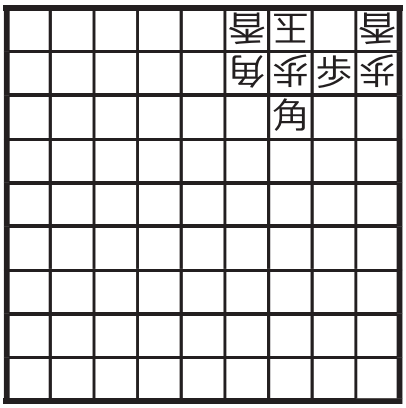
透明駒は取られていない、ということを簡単に主張するわかりやすい方法は、何はともあれ X と指してしまうことであった。3 手目は X が正解。これで先手の透明駒が 2 手目に取られていた可能性はなくなった。すると 2 手目は 12 に透明駒を打ったないし移動合した手だということになるので、3 手目の X は、12 の透明駒を取っている可能性がある。そうであればこれで詰んでいるので、攻方としてはうれしい。

これに対して、「透明駒は取られていない、ということを簡単に主張するわかりやすい方法は、何はともあれ X と指してしまうこと」をそのまま返す 4 手目がおもしろい。どうやら 3 手目の X は、12 の透明駒を取る手ではなかったようだ。そのような可能性がまったく皆無であれば、4 手目の X は指せない。しかしこの図では、最初に王手をかけた 11 の駒が龍であった場合に限り、12 の駒を迂回して 22 龍と進めた可能性があり、かつそれしかあり得ない。

ということで、4 手目の X は 22 龍を取り返した手なので、22 の地点はふさがっており、最終手 14 銀までで詰んでいる。12 から 22 に移動できる駒で 14

に利く駒はないことに注意。

(3) 時風瑞季
（詰パラ　2014/5）



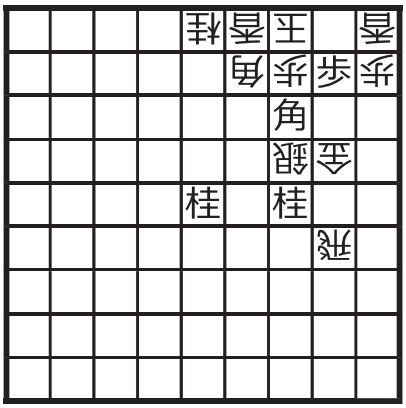
持駒　なし

詰将棋　9手（透明駒 3+4）

X、X、X、X、
X、X、X、X、
X 迄 9 手。

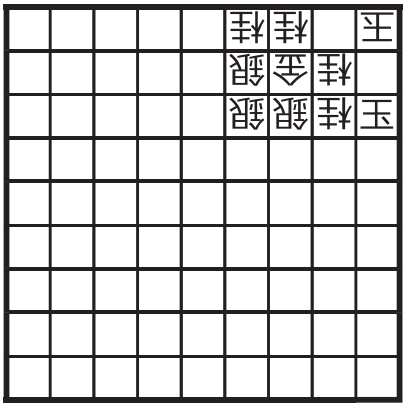
X と王手したとき、それは 21 からしているか、23 から桂で王手しているか、43 から桂で王手しているかのいずれかである。21 からしている場合には、玉方は抵抗する手段がないので困ってしまう。そこでとにかく X と指して、指せる手があるということは詰んでいない、ということ、したがって直前の王手は 23 桂（不成）か 43 桂（不成）で、それを取り返して王手を解除した、という主張をすることになる。つまり、玉方の X はすべて桂を取る手である。ところが、桂は 4 枚しかないにもかかわらず、攻方は 5 回目の王手をしている。これは 21 金(飛)しかあり得ず、これで詰んでいる。

本作ではもうひとステップ踏む必要がある。それは、このように X が 9 回続く手順が実際に可能であることを示すことである。これは成立している配置の例をひとつ示せばよく、たとえば次図でそれは可能である。



持駒　桂

(4) 高砂　裕　after 岡谷阿矢子
（Problem Paradise 64, 2013）



持駒　なし

詰将棋　111 手（透明駒 30+0）

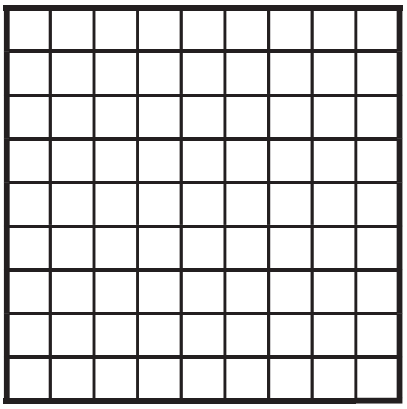
「X、21 玉、X、11 玉」× 27、
X、21 玉、X 迄 111 手。

いま使われていない駒には、歩が 18 枚、香が 4 枚、金が 3 枚、角が 2 枚、飛車が 2 枚あり、ここまでで 29 枚。ほかに銀が 1 枚あり、計 30 枚がすべて先手

の透明駒であることになる。この 30 枚のうち、銀だけは王手で使うと必ず後手玉が詰んでしまう。それ以外の駒は、そもそも打っても詰みにならないか、詰みにならない打ち方が必ず 1 つあり、玉方としては玉を動かし続けることで詰まないような使い方だったのだと示し続けるしかない。

18 枚の歩と 4 枚の香、 2 枚の飛車は 12 に打ってただちに 11 になり捨てたのだ、と考えればこれで 4 × 24 = 96 手が稼げる。そのあと 21 金、同玉、12 角、11 玉、21 角成、同玉、12 角、11 玉、21 角成、同玉、11 金、同玉、21 金、同玉と進むのが一番玉方にとって都合のいい解釈である。途中の手順はさまざま前後しうるが、とにかく本質的にはこの組み合わせで 110 手延命することができ、かつこれが最大値である。ここまでで攻方の歩香金角飛はすべて取り切られているので、最後の王手はどのように解釈しても銀によるものでしかあり得ず、これで詰みとなる。

(5) 岡谷阿矢子
（Problem Paradise 69, 2015）



持駒　金銀銀桂

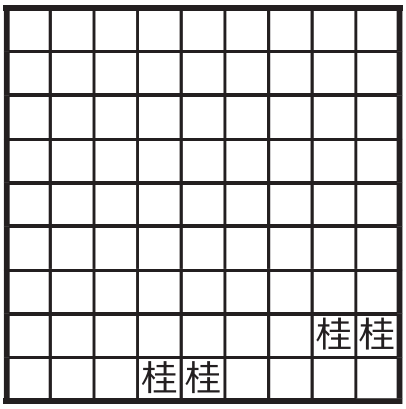
詰将棋　7 手（透明駒 0+1）

24 桂、X、31 銀、X、
21 金、同玉、22 銀打迄 7 手。

盤面に何もない透明駒特有の図式。玉方には透明駒が 1 枚あるが、これは言うまでもなく玉である。問題は位置がどこか、ということだが、ここで一度冷静になって考えてみると、玉位置がどこだったとしても、普通詰将棋として詰むことはない。ということは、攻方にとっては玉位置が判明する状況になってしまうとまずい。たとえば初手から 14 桂と打ってしまうと、玉は 22 にいるということになり、透明駒のルールから可視化してしまう。すると以降は普通詰将棋となり、33 玉などと位置を明言して逃げられまったく詰まない。そこで本作では、玉位置は複数あり得るような手順で王手を続け、最後には詰むような位置に追い込んでいかなくてはならない。

ということで初手は 24 桂と入る。玉は 12 か 32 のいずれかだ。X とかわす手は、12 か 32 から 1 マスで動けるマスすべての可能性があるが、続いて 31 銀が王手になるということで、22 か 42 のいずれかに絞られる。このように、 1 つには決まらないようにしつつ、同時に玉位置を絞り込んでもいくとうのが本作の手順。最後に 21 金と打てば、ここまでの手順がすべて王手になるような玉位置は 12 → 22 → 11 の 1 通りしかないことがわかる。ここで玉は可視化するが、これまでの手順で 11 を囲む駒を配置しておいたので、結局 21 同玉と取るしかなく、詰め上がる。

（参考）
茶園伸吾
（未発表）



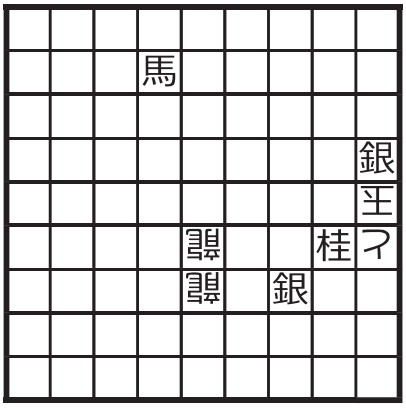
持駒　なし

詰将棋　19 手（透明駒 0+1）

57 桂、X、47 桂、X、
36 桂、X、26 桂、X、
35 桂、X、45 桂、X、
34 桂、X、24 桂、X、
33 桂生、X、23 桂生迄 19 手。

　透明玉を可視化させたくないという設定の初出は本作だと思う。詰み上がりが例の四桂詰しかないので、桂を順番に跳んでいく手順は見えやすいが、この順で跳んでいかないと玉位置が定まってしまうことに注意してほしい。また本作は最後まで玉が見えない（最終形でも 11 か 31 かわからない）のがおもしろい。

(6) 幻想咲花
（Web Fairy Paradise 65, 2013）



持駒　なし

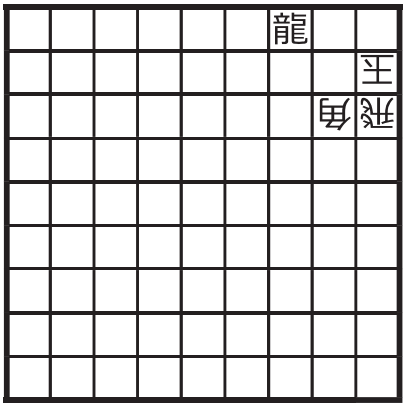
詰将棋　11 手（透明駒 1+0）

51 馬、42 角合、同馬、33 銀合、
24 角、同玉、33X、35 玉、
53 馬、同龍、36 銀打迄 11 手。

　角がまだ見えていないので、初手の 51 馬は透明駒のひも付き。つまり、51 同龍には同 X と王手で取り返せるため、同龍に 25 飛まで。また合駒も同 X と取り返してしまえばやはり角（馬、24 の場合は銀の可能性も）での王手となって詰む。したがって、２手目は 42 角合と角と登場させてしまうのが急所。これなら同 X は王手にならない。もっとも、ふつうに同馬と取られて一時しのぎでしかないようだが、ここで 33 銀合が狙いを秘めた一手。これを手拍子に同馬と取ると、24 銀合とされたときに、角に続いて銀も売り切れとなってしまう！飛車も２枚盤上に見えているので、もう斜め後ろに利く駒がない。売り切れの手筋をさらに高度に展開させた一作だといえるだろう。
　そこで 33 銀合には 24 角としておく。

合駒が可能な着手をさせないように距離を詰める意味だ。同銀なら同Ｘでめでたく詰め上がるため、同玉と応じるが、以下は馬捨てでまとめており収束まで完璧。

(7) 會場健大
（Web Fairy Paradise 71, 2014）



持駒　なし

詰将棋　13 手（透明駒 1+0）

Ｘ、11 玉、Ｘ、12 玉、
Ｘ、11 玉、Ｘ、12 玉、
Ｘ、11 玉、Ｘ、12 玉、
Ｘ迄 13 手。

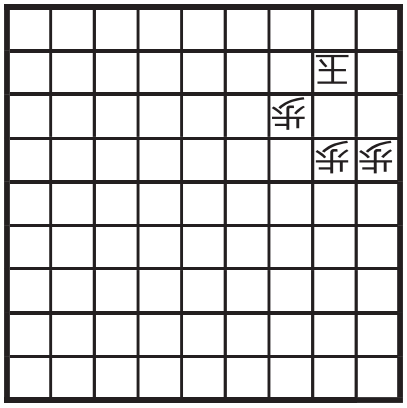
合法な手順であれば起こりうる、ということを突き詰めて考えると、ふつうの詰将棋では考える必要のない手順も意味をもつようになることがある。純粋な千日手手順がそのひとつだ。

本作では、初手のＸが 21 角（銀）の王手以外であればすべて詰んでいるというのが基本的な設定。そこで玉方は 11 玉として、自玉は詰んでいないこと、21 に銀か生角があることを主張する。３手目のＸはそれを開いた開き王手なので、12 玉の一手。そこにまたＸと指すと、11 玉とされて局面は変化を伴わずに還元する。12 に玉がいるときに 21 角成（馬）と指せないと局面は前に進まないのだが、そこで利用するのが連続王手の千日手の禁だ。将棋では連続王手の千日手は王手をかけている側の反則なので、13 手目のＸは初手の王手と同じように 11 に逃げられる状態での王手だったのだとすると反則になってしまう。ということで、13 手目は 21 角成（馬）だったのだということになり、これで詰んでいる。チェスでは連続王手の千日手も反則ではなく引き分けなので、反則を背景にしたこの主張はできない。将棋がたまたまそういうルールでよかった。

透明駒 II
練習問題　解答

馬屋原剛

（1）須藤大輔
(ProblemParadise 70, 2015)



持駒　金銀

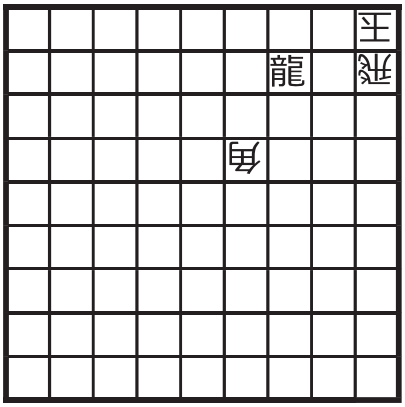
協力詰　5 手（透明駒 0+1）

23 銀、21 玉、22 銀生、12 玉、
13 金迄 5 手。

持駒の金銀を使った詰形は色々ありますが、下手な形ですと受方の透明駒に取られて失敗します。少し試行錯誤してみるとわかると思いますが、持駒の金銀だけでは透明駒の情報を絞り込むのは厳しいので、透明駒が何であれ防ぐことのできない詰上がりを探します。要するに最終手を取られなければいいので、そうすると 22 銀、12 玉の形で 13 金と打つ詰上がりが有力そうに思えます。ただ、受方 23 金や 21 桂が居ると 13 金を取られて詰まないのでどうすればよいでしょうか。答えは明快で、可視駒で着手してしまえばそこに透明駒がいないことが証明されます。そのための手順が初手と 2 手目なのです。

詰上がりを正しく想定できればあとは論理的に解ける問題でした。

（2）須藤大輔
(ProblemParadise 70, 2015)



持駒　なし

協力詰　5 手（透明駒 0+2）

31 龍、X、22 龍、同角、
X 迄 5 手。

攻方には強力な龍が居ますが、受方も透明駒 2 枚と鉄壁の守備です。正攻法では陥落できません。攻方は龍 1 枚では詰ませられないので駒を補充したいところですが、41 龍、31 桂合、同龍、X、23 桂では 2 枚目の透明駒に桂を取られてしまいます。

初手は 31 龍が正解です。対しては、X とさせて 1 枚目の透明駒の位置を確定させます。ここで 22 龍が妙手。同角と取りますが、すかさず X とすればこれで詰んでいます。

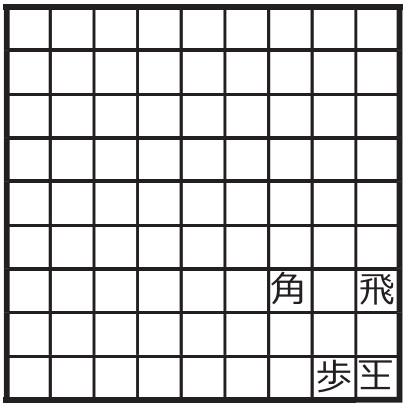
さて、ここで二つの疑問が浮かぶかと思います。一つ目はなぜ攻方は透明駒を持ってなかったのに透明駒の着手ができ

るのか。二つ目は受け方の透明駒に取り返されないのか。一つ目の理由は攻方が手順中に受方の透明駒を取ったからです。取ったことを証明していないのに、持っていること主張していいのかと思われるかもしれませんが、堂々と主張して構いません。むしろ、透明駒の着手を宣言することで、1 手目または 3 手目に透明駒を取ったことが証明されます。一つ目の理由がわかれば二つ目の理由も自ずとわかると思います。答えは単純で、受方の透明駒は取られたので盤上に居ないのです。

透明駒を取るのは強力な手段なのでぜひ覚えてください。

余談ですが、私が初めて作った透明駒の作品は本作とほぼ同じでした。まだまだ作例が少ない透明駒でいきなり衝突するのは運がいいのか悪いのか。

(3) 高坂　研
(Problem Paradise 82, 2018)



持駒　なし

協力詰　3 手　(透明駒 1+2)

X、X、X 迄 3 手。

不可能な両王手がかかっているように見える初形です。もちろん透明駒が間に挟まっているので実際には王手はかかっていません。

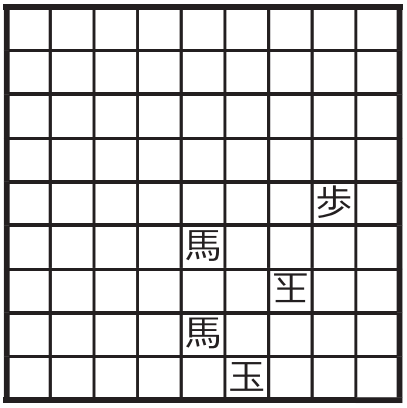
先に解答を見てしまうと X、X、X の 3 手詰です。全て透明駒の着手ですが一体全体何が起こっているのでしょうか。まず、18 と 28 の両方に受方の透明駒が居る場合を考えてみます。そうすると、初手の X に対して、X という着手はできないのです。なぜなら、初手の X は 18 または 28 の玉方透明駒を取った手であり、もう一つの透明駒で取り返したいのですが、飛車又はは角でピンされているので取り返せないからです。

従って、18 と 28 の透明駒の内、片方は攻方の透明駒、もう片方は受方の透明駒となります。そうすると、初手の X は開王手、2 手目の X は 18 又は 28 に合駒する手となります。そして 3 手目は初手で動いた透明駒で 2 手目の合駒を取った手となります。

このような手順が成立する具体的なパターンは 2 通りあります。一つは、18 の角が馬になって戻ってくるパターン。もう一つは 28 の飛が龍になって戻ってくるパターン。いずれのパターンも詰んでいます。

本作は往復したのが飛車なのか角なのか確定しません。しかし、確定しないからこそ、一つの作品で角の往復と飛車の往復を両方とも行ったスケールの大きい作品と言えるのではないでしょうか。

（4）高坂　研
(Problem Paradise 73, 2016)



持駒　なし

協力詰　5 手（透明駒 2+1）

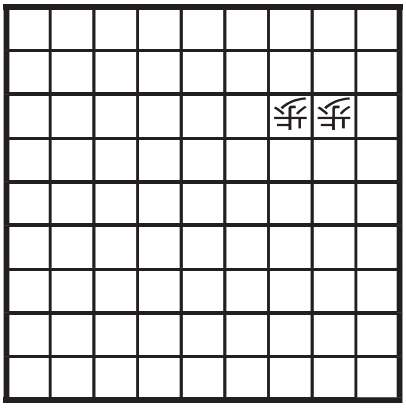
59 馬、同 X、X、27 角、
46 馬迄 5 手。

本作は何時間も考えても解けなかった思い出があります。馬 2 枚に攻方透明駒も 2 枚あり色々な筋が考えられますが普通の手段では詰みません。攻方玉がある場合は自玉への王手を考えてみたいところです。ただし、すぐに見える 55 馬、46 香合では後続手がありません。

まずは、59 馬、同 X と馬を取らせます。そして X に 27 角合とするのが好手順です。馬を捨てたのはこの角合をするためでした。ここで 46 馬とすれば 38 の駒は桂であることが確定し、これで詰みとなります。

自玉への（疑似）王手のために準備工作が必要な奥深い作品でした。

（5）太刀岡甫
(詰パラ　2019/12)



持駒　金金

協力詰　5 手（透明駒 1+3）
b) 33 歩→ 43 歩

a) 22 金、X、21 金、X、
11 金打迄 5 手。
b) 32 金、X、31 金、X、
21 金打迄 5 手。

透明玉で手のつけどころに悩むところですが、歩の配置から右上で詰むことは想像できます。また、玉方の透明駒が多いので、どんな駒でも取れない位置に金を打ってトドメを刺すのがよさそうです。

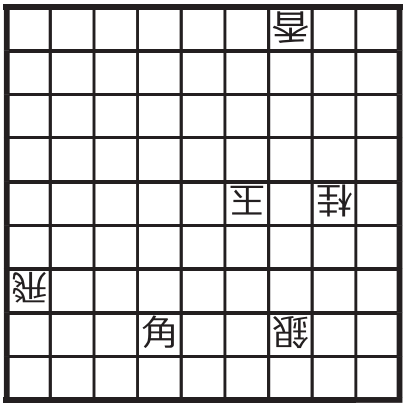
22 金、X に 21 金が好手です。冷静に玉の居る位置を考えれば、21 金は直接王手ではなく、開王手であることがわかります。そして最終手に 11 金打とすることで、玉は 12 に居ること、2 手目に玉は 13 に居たこと、31 に角（馬）が居ることがわかります。33 歩のおかげで遠くに角が居ても 11 金を取ることができずに詰みとなります。

b) の方は、32 金、X に 31 金が好手です。これも開王手以外ありえないこと

がわかります。そして最終手に 21 金打とすれば、玉は 11 に居ること、2 手目に玉は 12 に居たこと、4 筋～ 9 筋のどこかの 2 段目に飛（龍）が居ることがわかります。43 歩のおかげで遠くに角が居ても 21 金を取ることができずに詰みとなります。

a) は角で開王手、b) は飛で開王手と、手順の対照性が完璧なツインの作品でした。

(6) 前担当 †
(Problem Paradise 73, 2016)



持駒　香

協力詰　7 手（透明駒 1+2）

49 香、35 玉、X、45 玉、
38X、36 玉、27 銀迄 7 手。

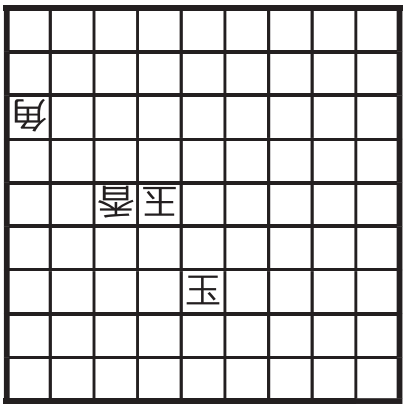
5 手でも難しいのに本問は 7 手です。予備知識なしに解くのは至難の業でしょう。

初手の香最遠打に対して、35 玉とあえて角筋に逃げます。この着手で 57 に透明駒が居ることがわかります。3 手目の X に対して、45 玉と今度は香筋に逃げます。この手で攻方の透明駒が、46、47、48 のいずれかに居ることがわかります。そして 38X とします。この手で実は攻方透明駒が判明します。まず、38X としたことから、3 手目の攻方の透明駒の位置は 47 か 48 に絞られます。さらに、この駒は 57 から移動してきた可能性しかありません。つまり、今の考察でわかったのは、攻方の透明駒は 57 → 47 → 38 または 57 → 48 → 38 と動いたことです。続いて駒種を考えてみましょう。例えば馬はどうでしょうか。確かに先述のルートを動くことができます。しかし、57 に馬が居ると 2 手目に 35 玉とはできないので馬ではないことがわかります。では龍はどうでしょうか。龍も先述のルートを動くことができます。しかし､47 (48) に龍が居ると、4 手目に 45 玉とできないので龍でもないことがわかります。金や銀では先述のルートを動くことができません。それではこの手順は幻の手順だったのでしょうか。いいえ、一つ駒を忘れています。そう、王であれば、先述のルートを動くことが可能であり、馬や龍のような矛盾も生じません。

さて、最終手は 27 銀迄詰みなのですが、後手の透明駒に取られたりしないのでしょうか。ポイントは 97 飛と 31 香の配置です。2 手目に玉が 57 に居るのに 97 飛で取れないということは、67、77、87 のどこかに透明駒がいることがわかります。また、5 手目に 38 玉としたのに、31 香で取れないことから、32、33、34、36 のどこかに透明駒があることがわかります。そして 6 手目に 36 玉と指したので、36 の可能性は消えます。以上のことから、後手の透明駒の位置、種類が何であれ、27 銀を取

ることができないことがわかります。
　攻方玉が出てくる驚愕の作品でした。

（7）高坂　研
(第 2 回透明駒解答選手権 2020/4)



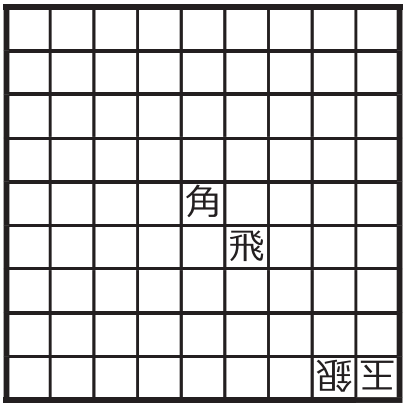
持駒　角桂

協力自玉詰　４手（透明駒 0+1）

77 桂、同香成、47 角、X 迄 4 手。

　4 手詰で持駒が 2 枚あるので先手は持駒を打っていくしかありません。私は角打ちから考えて散々悩みました。正解は先に桂打ちです。
　77 桂、同香成となって先手玉に王手がかかったように見えますが、そこで 47 角と打つのが好手です。対して X と切り返すことでなんと先手玉は詰んでいるのです。4 手目の X は、56 に移動した手というのは明らかです。また、3 手目に 47 角と打てたということから、2 手目には先手玉には王手がかかっていないことになり、66 または、84 に透明駒がいたことになります。84 から 56 に移動できる駒はありません。横に利く駒であれば 66 から 56 に移動できますが、斜め前に利く駒だと王手放置となりまずいですね。そうすると、66 飛が 56 に移動した可能性しかないことがわかります。綺麗な両王手の詰み上がりですね。47 に打った角も見事に先手玉の退路を消しています。

（8）高坂　研
(Web Fairy Paradise139, 2020)



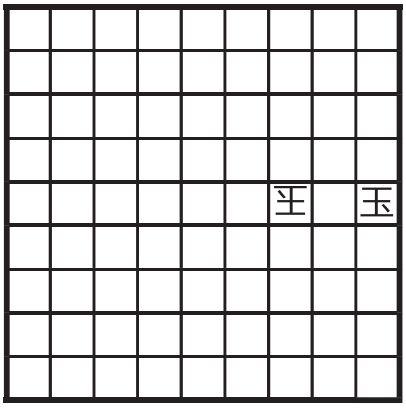
持駒　金

協力自玉詰　４手（透明駒 1+0）

16 飛、28 飛合、18 金、同銀成迄 4 手。

　自玉詰なのに攻方玉が盤上にありません。このことから先手の透明駒が玉であることがわかります（自玉詰の場合攻方玉は必ず存在し、証明の必要はありません）。
　まずは、攻方玉の位置を確定させる必要があります。16 飛として両王手（に見える手）をしてみましょう。対して 28 飛合とすることで、17 に玉が居ることが判明します。あとは普通の協力自玉詰と同じです。18 金、同銀成で詰みとなります。
　簡潔な方法で自玉を可視化する作品でした。

(9) 上谷直希
(Web Fairy Paradise 87, 2015)



持駒　なし

協力自玉詰　4手（透明駒 3+0）

X、33飛合、X、13飛迄4手。

受方の駒は玉しかないので、2手目に合駒を出して4手目にその合駒を動かす方針が有力です。そして作者名からシフマンを使うのだろうと想像がつきます。

X、33飛合、ここまでは予想通りですね。ここからX、13飛として自玉は詰みなのですが、それを確かめてみましょう。4手目13飛は13角（馬）を取った手ですね。ですが、飛車は2手目に合駒されたばかりなので通常なら動けないはずです。なのになぜ動けたのでしょうか。その鍵は3手目にあります。13角を王手にしつつ、飛のピンを外す一石二鳥の手があるのです。そう、24桂が32に移動すれば、開王手しながら31の飛（龍）の利きを遮断してピンを外すことができるのです。

なお、X、53飛合、X、13飛の手順は、攻方の24飛が開王手で44に動いたことになりますが、この場合は最後に14飛の受けが残っているので失敗です。

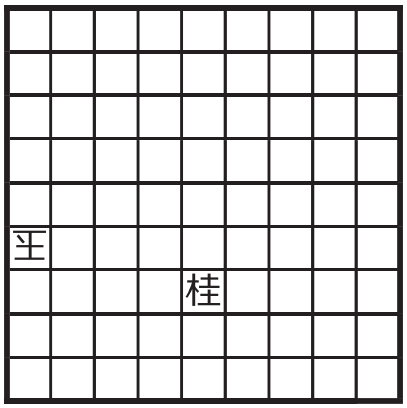
双裸玉のシンプルな配置で期待を裏切らない手順が現れる作者らしい好作でした。

透明駒 III
練習問題　解答

上谷直希

○安南

（1）高坂　研
（第 1 回透明駒解答選手権　2020/2）



持駒　なし

安南協力詰　3 手（透明駒 2+0）
＊修正図

93 桂成、95 玉、94 成桂迄 3 手。

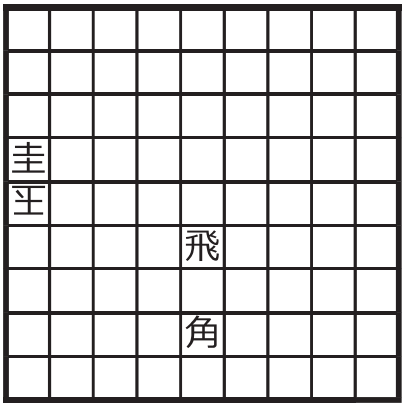
初手が非常に情報量の多い一手。一見王手には見えないが、逆に言えばこの手が王手になるとはどういうことかと考察する余地がある。順々に紐解いていこう。

初手では 57 の桂が 93 に移動している。もちろんこれは桂本来の性能ではない。57 の桂は角あるいは馬の性能に変わっていると考えるしかなく、58 地点に馬か角がいることが示された。

まだ謎が残る。王手をかけている駒がまだ判明していないのだ。58 の透明駒も、93 の成桂も王手をかけているわけではない。すなわち王手をかけているのはもう 1 枚の透明駒で、しかも桂を動かしたことで王手となる状況であったことが分かる。

ここまで考えが及べば、正解まであともう一歩。ここで 56 地点に着目すれば、桂が動くことで性能変化が解除されたと理解できるであろう。そう、56 地点には透明駒の龍か飛が存在したのだ。

（詰め上がり図の一例）



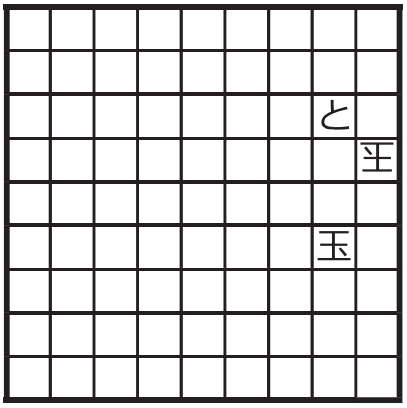
（圭＝成桂）

本作のように、安南ルールを用いた作品で駒が三段に積み重なり、真ん中の駒をダイナミックに動かす作品には名作が多い。是非覚えておきたい筋の 1 つだ。

初手で判明した 2 枚の大駒の利きを活かし、引き締まった詰め上がりに仕上がっている。

（2）高坂　研

（第 1 回透明駒解答選手権　2020/2）



持駒　金香

安南協力詰　3 手（透明駒 0+3）

＊利き二歩無効

15 香、同 X、13 金迄 3 手。

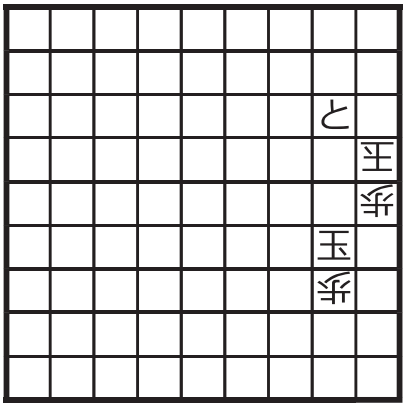
本作も解答選手権で出題されたうちの 1 題。この選手権には私もリアルタイムで挑戦した。全 10 題に対し与えられた時間は 60 分。本作にはかなりの時間を費やしたがそれでも解けなかったと記憶している。

まず詰め上がり形が見えない。概して玉方透明駒は守備駒として強力であるため、透明駒の情報を明らかにしてその力の及ばない地点から玉を仕留めるというのがオーソドックスな解法となるが、本作では透明駒が玉方に 3 枚もあるのだ。3 枚もの情報を 3 手で明らかにするのは不可能と考えても不思議ではない。現に私は不可能だと思っていた。しかし本作では分かるというのだから驚かされる。

そんな私でも 15 地点がキーとなるのはなんとなく分かっていた。玉が向かい合う形では、その周囲の地点に活路を見出すのが透明駒作品解図のコツ。15 香、同 X と進めて私は「これは逆王手になるからダメだ」と読みを打ち切ってしまった。15 の透明駒の駒種が何であれ、この駒の利きは安南ルールにより玉の利きになるはずだからだ。しかしもう少し深く読めばこの手が逆王手とならない " 抜け道 " に思い至ったかもしれない。

ここで利き二歩有効 / 無効の概念を再確認してみよう。「玉を取ると二歩になってしまう手を無効とする」ことを " 利き二歩無効 " と呼ぶ。その条件ならば、15 地点に受方駒があったとしても自玉に王手がかからない合法局面があり得る。たとえば以下のような図だ。

（自玉に逆王手がかからない局面の一例）



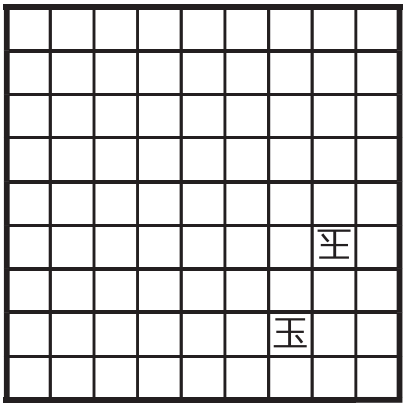
すなわち、本作では 15 地点に受方透明駒をおびき寄せることで 1 筋と 2 筋に歩の存在を示すことができる。ここまでくれば正解はすぐそこ。あとは「15 の歩はどこからやってきたのか？」を考える。歩の動きで 15 地点にやってきたわけではないのは明白で、角か飛（あるいは大駒成駒）の性能で歩が動いたと考えるしかない。なるほど、透明駒のもう 1 枚は盤上のどこかにいる大駒のようだ。以上の考察で、3 枚の透明駒の正体がすべて判明した。より具体的な情報を

得るには手数が足りないが、少なくともどの駒も 13 地点に利きを伸ばしていないことは分かっているので、最終手で詰みを堂々と宣言できる。

3 手と短手数ではあるが濃密な読みを要求され、3 枚もの透明駒の情報が一気に判明する作品であった。正真正銘の上級者向け作品であろう。

なお、利き二歩を有効とするか無効とするかは発表先毎に異なるため、読者諸氏がその類の作品を投稿するときには事前に発表先の取り決めを確認しておくのが吉。

(3) 曽和貴史
(Problem Paradise 72, 2015)



持駒　なし

安南協力詰　3 手　(透明駒 0+2)

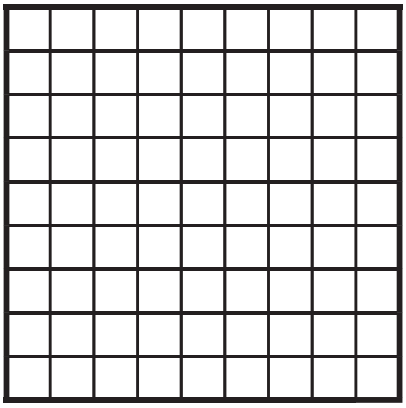
27 玉、48 玉、38 玉迄 3 手。

玉で王手をかける作品。相手玉が性能変化していなければ禁手なので、逆説的に相手玉の性能変化を強制できる。2 手目の玉の動きから推測して、25 地点に角の透明駒が浮かび上がる。

ついで 3 手目も自玉による王手。すなわち 47 地点にも何らかの透明駒が存在しており、玉の利きが変化していると考えるしかない。47 の透明駒および玉がともに 38 地点に利きを持たないとなると、透明駒の駒種はかなり絞られる。桂か香か歩しかないことがお分かりいただけただろうか。いずれの駒種でも相手玉に有効な逃げ場所がなく、これで詰みとなる。

玉が多彩な駒種に変化するのが楽しい。

(4) 佐藤一郎
(未発表)



持駒　角

安南協力自玉詰　2 手（透明駒 1+1）

92 角、28 角迄 2 手。
(左右対称解も正解)

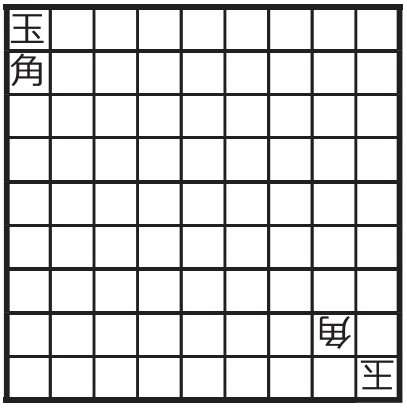
協力自玉詰なのに盤面の玉が見えない。透明駒はそれぞれに 1 枚ずつなので、双方の玉が透明駒となっていることが分かる。一般に玉が透明になっている作品は紛れが多く難度が高いと言われているため、短手数ではあるものの練習問題の部に収録した。

2 手目に受方は初手の角筋とは異なる筋に合駒している。この一見奇妙な

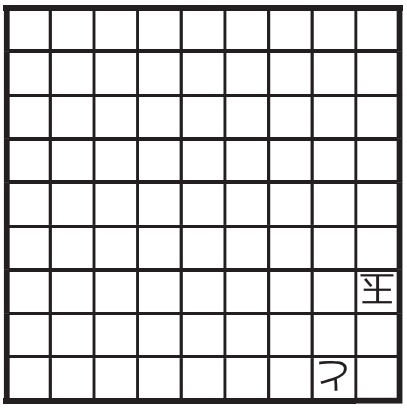
着手が手順を物語っている。初手は 91 の透明駒、すなわち自玉が相手玉に王手をかけていたのだ。28 角合は逆王手の合駒で、角に性能が変化している自玉はこれで逃げ場がない。

2 手目に 37 角合でも同じようだが、これには同玉の余地が残る（玉が 28 にいるのか、19 にいるのかが確定していないため）。28 角合ならば玉は 19 地点にあると確定するため、角に紐がついていることが保証されている。

（詰め上がり図）



（5）久保紀貴
（Web Fairy Paradise147, 2020/9）



持駒　桂

安南協力詰　3 手（透明駒 2+1）2 解
＊修正図
① 18 桂、71 玉、81 桂生迄 3 手。
② 77 桂、71 玉、73 桂成迄 3 手。

普通詰将棋の分野でも著名な久保氏の作品。

①のほうが先に見える方が多いだろうか。私もそうであった。初手で 19 地点に攻方の透明駒の存在が示唆される。この透明駒は前に利きを持つことだけは分かっているがそれ以上のことは分からない。2 手目 71 玉で 16 地点に玉方の透明角あるいは馬の存在が確定する。これで受方の透明駒は出払うことになる。

筆者は 3 手目が見えなかった。72 ではなく 81 地点に、しかも生でいくのがミソ。この着手で 19 地点の透明駒が馬であることが確定し、加えて 82 地点に透明駒飛が浮かび上がる。この 82 飛には遠く 19 の馬が紐をつけておりなんとも味がよい。ぴったりとした詰め上がり。

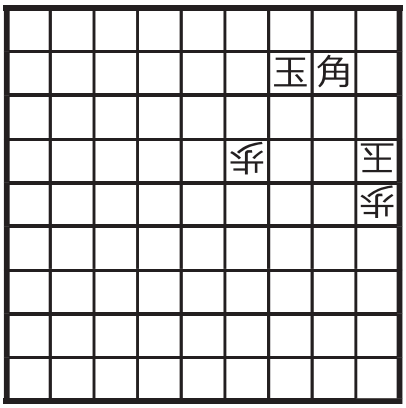
さてもう 1 解。①では桂を角の動きで移動させる手順であったため、こちらは飛の動きで移動させるのではないかと推測できる。ただしこちらの解でも 71 に玉を飛ばすのは共通になっている。統一感があってとても良い。

桂の利きが飛であるのに玉が 7 筋に侵入できると説明するためには、7 筋のどこかにこの利きを遮断する駒が介在しなければならない。最終手 73 桂成でその透明駒が 72 地点にいることが確定し、さらにその透明駒は安南ルールにより成桂の性能に変化。これで詰みが証明される。

なお、原図には余詰があったため今回は修正図を収録している。怪我の功名で作品にさらに磨きがかかったようだ。

○対面

(6) 高坂　研
（未発表）



持駒　なし

対面協力詰　3 手（透明駒 0+2）

12 角生、X、23 角生迄 3 手。

本作も棋譜表記だけ見ても全体が見えてこないかもしれない。順を追って解説する。

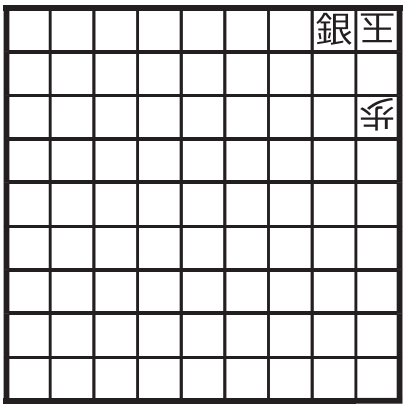
受方に 2 枚透明駒がある。これらの駒の情報が得られないことには到底詰みそうにないので、複数の手がかりを得られるような手を指したいところ。初手 12 角生はそういった意味で有力な着手だ。角が合法的に横に動くためには 21 に飛が居ることになるし、12 角が王手となるためには 11 に飛か龍が居なければならない。しかし 2 枚の透明駒の手がかりが得られるのはいいが、2 枚もの強力な防御陣が玉周囲に出現してしまった。果たして本当にこれで詰むのだろうかと不安になる（少なくとも私は不安になった）。

2 手目 X は 11 の透明駒を動かす着手。続く 23 角生は通常の利きで角を動かす自然な手。しかしながらこれで詰みというのだから一瞬理解が追いつかなくなる方もいらっしゃるだろう（少なくとも私はそうだった）。冷静に考えてみると、2 手目が 11 の飛（か龍）を角の利きで退避させる手であるとすれば、退避場所は 22 か 33 のどちらか。よって 2 手目は逆王手になっている。3 手目がこの王手を解除しつつ相手玉に王手をかける着手であることより、2 手目は 22 龍しかありえないのだ！

自玉をヒントに相手の強力な防御陣を逆用する手順。手順にも読みにも骨のある作品であった。

○背面

（7）高坂　研
（第 4 回透明駒解答選手権　2020/10）



持駒　桂

背面協力詰　3 手（透明駒 1+1）

X、23 歩、12 桂迄 3 手。

さて本作。13 の歩の配置でピンときた方は鋭い。狙いを推測しながら解図に取り掛かろう。

2 手目 23 歩で、初手が 22 地点への

着手だと分かる。この場合の透明駒は角、金、銀、あるいは各種成駒……。斜め前に利きがある駒であれば何でもよい。

3 手目 12 桂。この桂は背面ルールにより歩の利きになっている。色々な受けが残っていそうだが、実はこれで受けなし。直感的には受け入れがたいと思うので、順に解説する。

まずは玉が逃げる手。22 地点は 21 の銀がカバーしている。21 地点は 22 の透明駒がカバーしている（3 手目の局面で、22 の駒の利きは歩になっているので）。次に 23 の歩が 12 の桂を取る手が考えられるが、これは 22 の透明駒の本来の利きが復活してしまうため駄目。

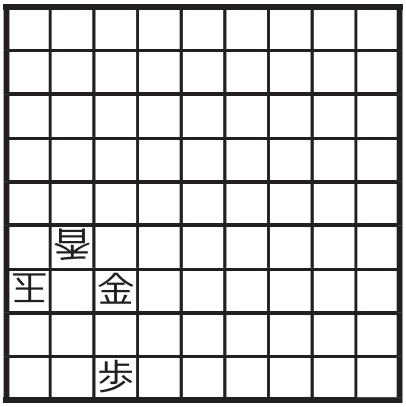
最後に 13 の歩が 25 歩と跳ねて 12 の桂の利きを戻す受けはどうだろう。しかしこの手、よく見たら二歩ではないか！　なるほど、この手を封じるための 2 手目限定であったのかと膝を叩く。

以上、色々な応手を振り返ってみたがそのいずれでも逃れることはできなかった。これでようやく詰みが確認できたようだ。一件落着。

2 枚の歩が並んで身動きがとれなくなる手順がユーモラス。

○キルケ

（8）高坂　研
（第 1 回透明駒解答選手権　2020/2）



持駒　なし

キルケ協力詰　3 手（透明駒 1+0）
b) 透明駒 1+1

a) X、87 香生、X(=98 飛) 迄 3 手。
b) X、88 香生、X(=98 香) 迄 3 手。

本作も解答選手権より。当時の私の場合、a) はすぐに解けたと思う。まず a) から解説していく。X､87 香生と進めて、初手が 87 地点の王手であったことが分かるが駒種は分からない。攻方は 3 手目も X とする。3 手目は初形位置に戻った透明駒で再度王手を試みる手であったというわけだ。

そして、ここ迄の情報で駒種もバッチリ確定する。初形位置に戻ってから、合法局面を保ちつつ再度 97 の玉に王手をかけることができる駒は飛しかないはずだ。よって a) の手順の中身は 87 飛 (or 龍)、同香生 /28 飛、98 飛であったことが分かる（79 地点が埋まっているため X= 銀の可能性はない。いくらキルケといっても、その駒が戻るべき位置が既

に埋まっている場合には復活できない。普通の駒取りの挙動をとる)。

b) は解けなかった。一般的にツインでの 2 つの解は親戚のようなもので、1 つの解が分かればもう 1 つの解もその近傍にあることが多く、格段に読みやすくなるはずなのだが……。ちなみに、この現象に陥ったのは私だけではなく、b) だけ無解の解答者が続出した。不思議な妖力みたいなものだろうか。

b) では玉方にも透明駒が 1 枚与えられている。a) と同様に進めてもうまくいかない。

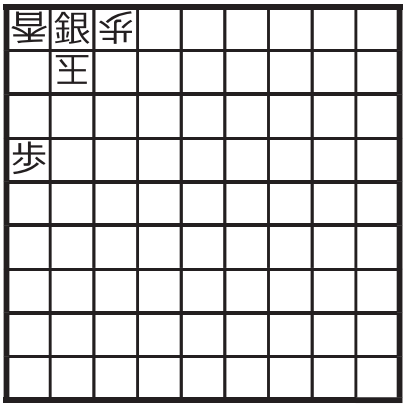
2 手目 88 香生と今度は飛の横移動を妨げるように移動させる。3 手目 X と進めれば、a) と同様に復活駒による再王手であることが分かる。しかしながら、a) の場合と異なり攻方の透明駒は少なくとも飛ではない。a) の解図時には X は飛しかありえなかったはずだが……？

b) では受方に 1 枚透明駒がある関係で、新しく X= 香の可能性が生まれている。すなわち、受方の透明駒が 98 地点に存在し、初手が成香による王手であったというわけだ。3 手目は 98 香の駒取りで、取られた玉方透明駒は駒種が分からずどこに復活したかは不明。詰みの判定には影響を及ぼさない情報なので分からないままで問題ない。

2 つの解を見返せばしっかりと対照的に仕上がっている。名手の軽作という評価も正しいはずだが、多数の解答者を無解に陥れたダークホースでもある。作者にとっても意外な解答成績だったかもしれない。

(9) 高坂　研

(第 1 回透明駒解答選手権　2020/2)



持駒　香

キルケ協力詰　3 手（透明駒 1+0）

b) 持駒　香→角

a) 89 香、92 香 /88 角、55 角
迄 3 手。
b) 19 角、93 香 /28 飛、88 飛
迄 3 手。

「魔女返し」と呼ばれる手筋がある。飛び道具による王手に対して、自分の駒を合駒するのではなく、相手の駒を復活して合駒代わりに使うキルケ特有の手筋のことだ。名前の由来には詳しくないが、キルケの元ネタも魔女であるわけでその辺りが関係しているのかもしれない。

本作では a) でも b) でも魔女返しが登場する。

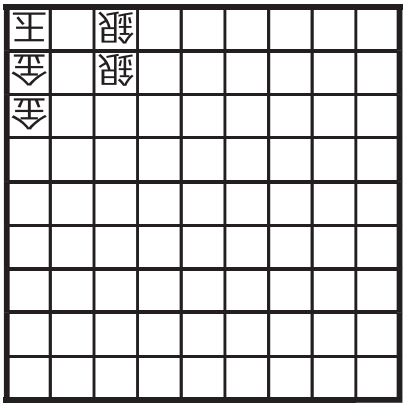
まず a) を解説する。派手な手で開幕するが、この最遠打の意味付けはその後すぐ判明する。2 手目が実に不思議な感触の一手。香で王手されているはずなのに、その香筋から外れた地点の着手である。これが受けになっているというのだから驚きだ。この手こそがまさに魔女返し。すなわち、92 地点に攻方の透明駒

が存在しており、その駒を初形位置に戻すことで香筋を遮断したというわけだ。そして香筋を遮断できる駒は角しかない（歩でも良さそうだが、92 地点の駒取りでは87ではなく97に復活してしまう）。たった 2 手で新規のバッテリーが忽然と浮かび上がり、3 手目に鮮やかな両王手が実現する。

b) では持駒が香から角に変わっている。作者が何を狙っているかは解説するまでもないだろう。

明快な狙いの作品ではあるが、以下のような前例がある。

（9-a）神無太郎＋神無次郎
（第 3 回神無一族の氾濫 1994/12）



持駒　飛角

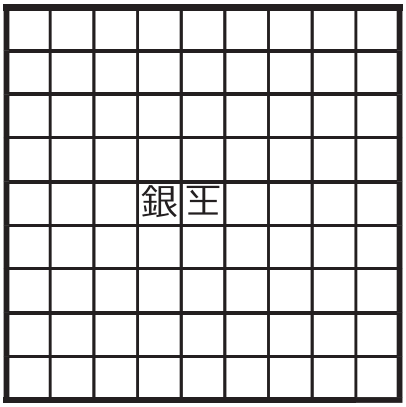
キルケ協力詰　5 手
b)91 玉→ 81 玉

a)19 角、81 玉、82 飛、 同 玉 /28 飛、88 飛迄 5 手。
b)89 飛、91 玉、82 角、 同 玉 /88 角、55 角迄 5 手。

フェアリーではこのような偶然の一致が案外たくさんある。ともすれば普通詰将棋の場合より多いかもしれない。今回の場合は完全な衝突というわけでもなく、それぞれの作品で違った主張点がある。時系列的に後に続く作品にはプラスアルファの主張点が求められると思われるが、高坂氏作では 2 手目の香移動による対比がそれに当たるだろうか。

○強欲

（10）上谷直希
（フェアリー時々詰将棋　2015/12）



持駒　飛金

強欲協力詰　3 手　（透明駒 2+2）

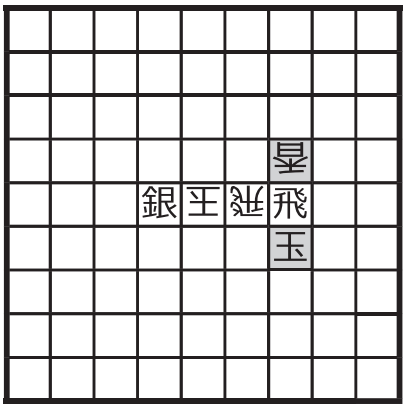
35 飛、45 飛、56 金迄 3 手。

まずは、作意順をじっくりと見て欲しい。おかしな点があることに気付く筈だ。強欲ルールの下で、どうして 3 手目に金が打てるのだろうか？このルールは「駒取りの着手が優先される」というものなので、2 手目の飛合を取れるのに 56 金と打つ手は、ルール違反ではないのだろうか？

しかし、金打を合法手にする手段は確かに存在する。それは 35 飛をピンすることだ！具体的には、例えば初形で 36 に攻方の透明玉がいて、34 に玉方透明

香があったとすれば 45 飛を取る手は不可能になり、結果として 56 金と打つ手を正当化出来る。

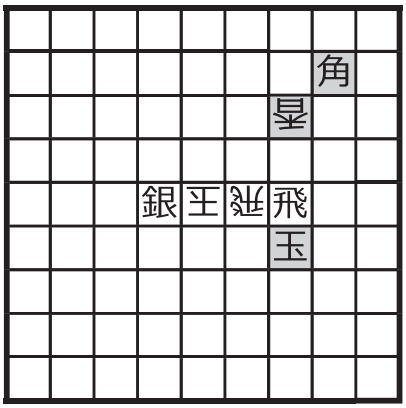
（34 透明香の局面）



持駒　金

ところが、ここで新たな問題が発生する。35 飛をピンする為に配置した 34 透明香で 35 飛を取ることができるなら、今度は 2 手目の 45 飛合が反則手になってしまうではないか！この解決手段はもうお分かりだろう。この香もまた、ピンされているのだ。

（33 香 -22 角の局面）



持駒　金

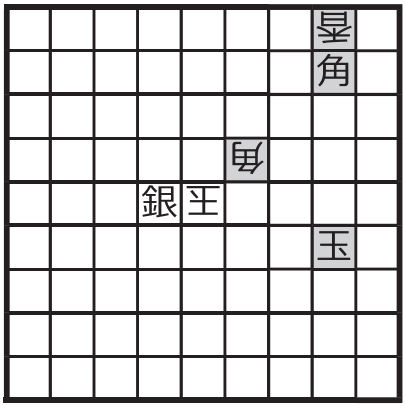
しかし、これでもまだダメである。何故なら、この図では角で香を取れるので、今度は初手 35 飛とは指せないことになってしまう。従って、この 22 角もまたピンされていなくてはならない！勿論、36 玉型ではこれは不可能であるから、結局、35 飛をピンしていたのは玉方透明香ではないことが判明した。（ここ迄の議論を読んで「ピンの連鎖の無限退行が起こるのではないか」と危惧される方がいらっしゃるかもしれないが、ご心配なく。作者はちゃんと解決策を用意している）

上の構図では旨くいかなかったが、どういう局面を目指せば良いかは見えてきた。一寸ややこしくなってきたので整理すると、

① 35 飛は、玉方透明駒 A によりピンされている
② A は攻方透明駒 B にピンされている
③ B は玉方透明駒 C にピンされている

という局面を構成することができれば、作意順を成立させることができることが分かった。では、実際にそういう局面を作ってみよう。作意手順中に飛は 2 枚とも使われているので、このピンを構成するのに使える駒は、先手玉以外には角と香しかない。ということで、少し試行錯誤すれば次図が見つかるだろう。

（判明した図）



持駒　飛金

＊角は馬の可能性もある

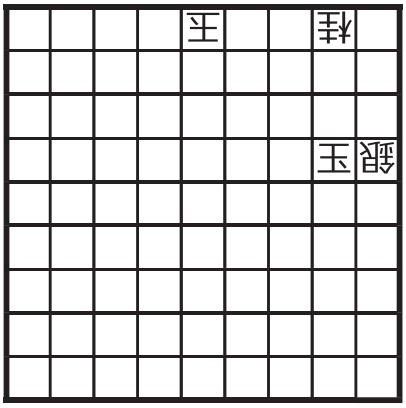
このような配置になっていれば、強欲ルールに抵触することなく、35 飛以下の作意順が成立する。明らかにこれ以外の構図はないので、作意順で確かに詰んでいることが示されたことになる。

では最後に、残しておいた疑問を解決しておこう。どうして 21 香はピンする必要がないのだろうか？ 22 角の王手に対し 44 角と合駒をするのは、強欲ルールに違反しないのだろうか？これに対する解答は簡単で、「44 角は合駒ではなかった」というもの。例えば 53 角が 44 歩を取って王手をかけた直後の図だと解釈すれば、何も問題はない。という訳で、上記の配置は強欲ルール下でも合法な局面であり、これで全ての謎は解けた。

尚、このようなピンの連鎖は、フェアリーの世界では古くから知られている筋だ。一例として、次図を挙げておこう。

（10-a）　左　真樹

（詰パラ　1980/6）



持駒　飛角角

協力自玉詰　6 手

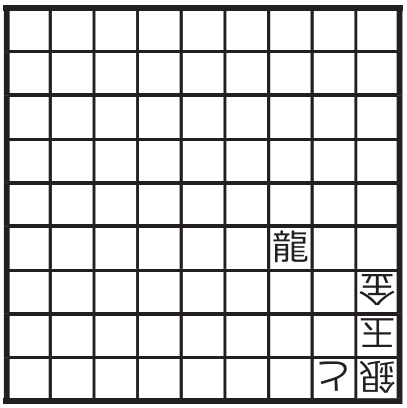
62 角、同玉、69 飛、68 角、
35 角、44 飛迄 6 手。

尚、本作については、以下のブログで作者自身による解説を読むこともできる。熱心家は是非、こちらも一読してみて欲しい。
http://fairypara.blog.fc2.com/blog-entry-22.html

（文責高坂）

○禁欲

（11）上谷直希
（フェアリー時々詰将棋　2020/6）



持駒　なし

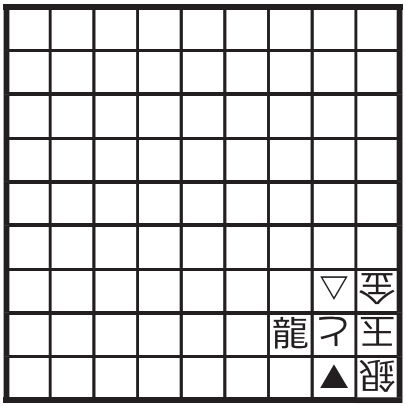
禁欲協力詰　3 手　（0+2）

38 龍、28 と、X 迄 3 手。

3 手目 X。初形時点では攻方は王手をかけられるような透明駒は持っていなかったはず。すなわちこの透明駒は受方から奪った駒だ。手順を振り返ると、駒を取るタイミングは初手しかありえない。よって、駒を取らない王手を優先せねばならない禁欲条件でも駒を取れる初形であったと考えるしかない。

初手で可能な王手は 27 龍と 38 龍の 2 通り。38 龍が駒取りであるとすれば、27 地点にも受方透明駒が居なくては辻褄が合わないことになる。すなわち、初形で先手が選べる手がすべて駒を取る手であれば、いくら禁欲といっても駒を取る手を選ぶしかないというわけだ。27 地点は埋まっているため、最終手 -X は 29 地点の王手しかありえない。受方の透明駒が出払っていることも証明されており、これで詰み。

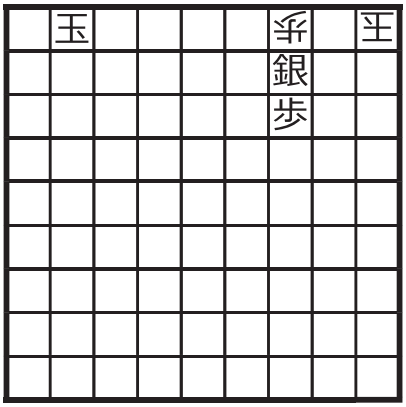
【詰め上がり図】



※ 27 地点の駒は玉方の透明駒で、駒種は不明。29 地点の駒は攻方の透明駒で、角か金か銀。

本作に限らず、1 手で複数の透明駒が明らかになる展開を考えておけばひとまず作品になる……かもしれない。

（12）高坂　研
（第 4 回透明駒解答選手権　2020/10）



持駒　なし

禁欲協力詰　5 手（透明駒 1+0）
b) − 33 歩

a) X、18 角、同 X、22 玉、
11 角迄 5 手。
b) X、88 飛、同 X、12 玉、
11 飛迄 5 手。

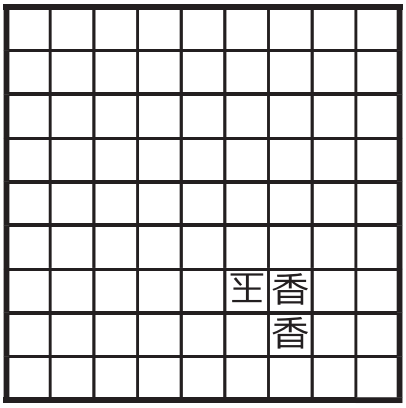
a)、b) ともに戦力不足であるため攻方は駒を補充したい。a) の場合は 12 合などとしてどうだろう。しかしこれでは駒を取らない王手である 21 銀成を強制され失敗する。禁欲なのに駒を取るためには何かしらの仕掛けが必要だ。本作の場合は 81 の玉が意味深。この自玉に働きかける合駒を考えれば、自ずと答えは見えてくるだろう。2 手目 18 角合が妙着で、いくら禁欲といえども自玉への王手は無視できない。

b) は a) に比べて 33 の歩が消えている。本作がツインであることを考えると、b) の答えはすぐそこだ。それぞれの手順を比べてみると、合駒を請求する駒種と逆王手の合駒となる駒種がそっくりそのまま入れ替わっているではないか！これは見事な対比。

解図は易しいが、2 解の完璧な対照性で魅せる作品だ。

たくぼん－きれいなツイン。81 王の意味を考えれば解けました。
一乗谷酔象－ 81 玉で禁欲を回避。縦横の対比が面白い。
神在月生－遠駒で　飛角の対比　好みなり

（13）上谷直希
（Web Fairy Paradise 143, 2020/5）



持駒　なし

禁欲協力自玉詰　4 手　（透明駒 3+12）

31 香成、27 香、37 香、29 香成
迄 4 手。

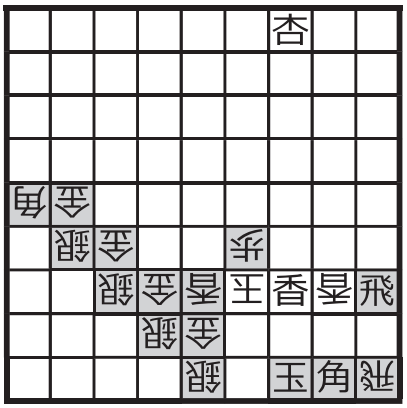
解図の手掛かりになりそうなものが全く見当たらない初形を見て、解答者は呆然とするに違いない。自玉詰なのに先手玉も透明化しているし、おまけに透明駒は全部で 15 枚もある。しかし、確かに 4 手で先手玉が詰んでいることは示せるのだ。以下で、それを証明してみよう。

まず、先手の 1、3 手目がいずれも開き王手であることから、先手の透明駒のうち 2 枚が飛（龍）と角（馬）であることが分かる。すると、4 手目の 29 香成は、先手の透明角（馬）を取る手だったことになるが、これは一寸ヘンだ。禁欲ルールでは駒取り以外の手が優先されるのだから、玉方は透明角を取る代わりに 38 に何か合駒をしなくてはならないのではないだろうか？

実はここが、本作の最大のポイントである。何故、後手は大量にある持駒を打てないのか？考えられる可能性は 2 つ

ある。1 つは「打歩詰」で、もう 1 つは「二歩」だ。しかし先手が初手で 31 香成としている以上、後者の可能性はない。従って、「38 に歩を打つと打歩詰になる」という局面を構成できれば、最終手を正当化することができる。そのような局面の例が下図だ。

（4 手目 38 歩が打歩詰になる局面の例）



（色のついた枡には透明駒がいる）

ここで玉方の合法な応手は 29 角を取る手しかなく（桂は 8 段目に打てない）、29 香成で確かに先手玉が詰むことが証明された。

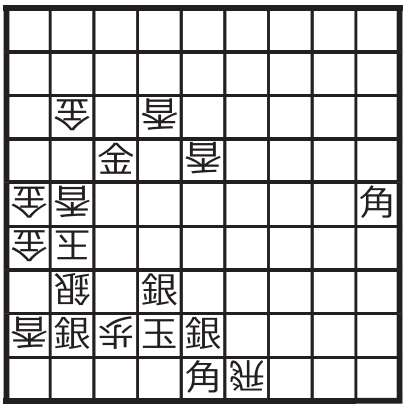
分かってみれば、後手の透明駒が 12 枚というのも絶妙な枚数であって、2 手目に香合をした後に後手の駒台にある可視駒は 21 枚、即ち歩が 17 枚＋桂 4 枚（又は歩が 18 枚＋桂 3 枚）という訳だ。言うまでもなく、これは最小値である。というのは、後手の透明駒が 11 枚だと駒台の可視駒は歩 18 枚＋桂 4 枚の 22 枚となる。すると盤面に透明歩が存在しないことから二歩禁の可能性がなくなるので、初手が非限定になってしまう。難解だが、非常に良くできたパズルではないか！

作者－逆打歩詰誘致っぽいテーマを、持駒制限無しでずっとやってみたかったのです。（中略）こちらから意思を持って働きかけないと応えてくれない条件設定……。奥行きというか、情報の揺らぎというか、そんなものが感じられれば幸い。真Ｔ－攻方玉がどこか分からないと思ったら、打歩詰を利用するとは！

尚、こちらについても作者自身による解説がある。上谷氏の本作に対する思いが伝わってくる「熱い」文章である。
http://www.dokidoki.ne.jp/home2/takuji/WFP146.pdf （WFP146 号 P18 ～）

では最後に、逆打歩詰誘致の一号局を載せておこう。

（13-a）愛　上夫
（詰棋めいと　1984/6）



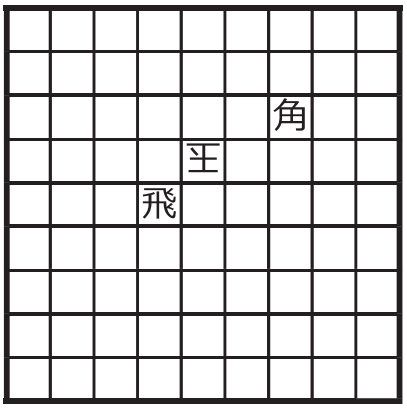
持駒　飛

66 飛、76 桂、69 玉、77 桂、
同銀、97 玉、89 桂迄 7 手。

（文責高坂）

○マドラシ

（14）高坂　研
（第 3 回透明駒解答選手権　2020/8）



持駒　なし

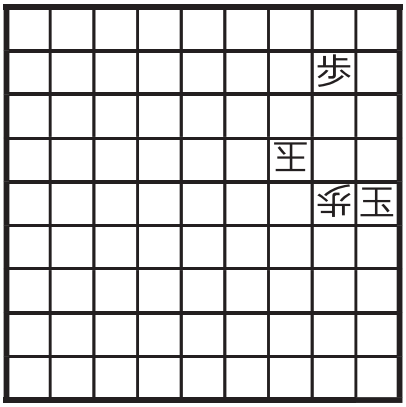
マドラシ協力詰　3 手（透明駒 2+0）

X、45 飛、63 飛成迄 3 手。

　飛が宙ぶらりんで不詰感が漂う初形。初手は透明駒で攻めてみる。対する 2 手目は合駒。これで 65 の飛は動けなくなったかと思いきや直後の手で飛が動く。この挙動により 55 地点に何かしらの駒があったことが分かる。要するに、飛が向かい合ったらお互い動けなくなるはずなのに駒が動くという一見矛盾した手順が、飛筋を遮断する駒の介在を示唆しているわけだ。55 地点の駒は頭の丸い角か桂だが、角は手順中に合駒を請求した 1 枚と盤面に 1 枚の計 2 枚と出払っているため消去法で桂に決まる。この桂馬も詰め上がりでよく働いている。
　マドラシ＋透明駒の組み合わせは私も何作か試してみたが、石化にばかりこだわって”石化するはずなのに動ける”という方向性での創作は思いつかなかった。個人的には結構驚かされた一作。

ＮＺ－マドラシだと動けることで透明駒の存在を証明できるんですね。
まゆしぃ－ 2 手目に合駒をする意味が見出せずに苦労した。

（15）高坂　研
（第 4 回透明駒解答選手権　2020/10）



持駒　角

マドラシ協力自玉詰　2 手
（透明駒 1+2）

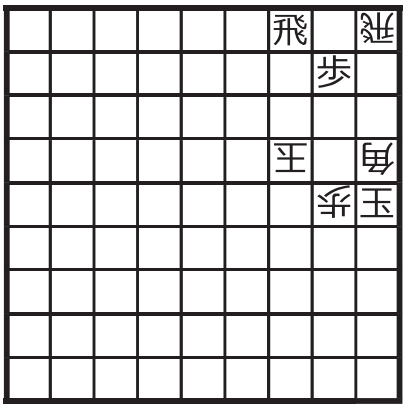
21 角、X（＝ 32 角）迄 2 手。

　たったの 2 手ながら情報量の多い作品。解くのに苦戦した記憶がある。順番に読み解いていこう。
　初手 21 角。この角が王手をかけているわけではない。これは透明駒の石化を解除する手だ。1 段目に先後の飛（あるいは龍）が配置されており、その間に角が割って入ることで先後の飛の利きが復活する。
　より厳密に局面を考えると、先手の飛は 31 にいて、後手の飛が 11 にいることが分かる。1 筋の飛の利きが自玉に直射していては 21 角が合法な着手にならないため、もう 1 枚の玉方透明駒も 1 筋に存在する。

21 に角を打つだけでこれだけの情報が得られるのも驚きだが、詰みを証明するにはあともう少し情報が必要だ。2 手目の X がトドメとなる。この透明駒は 1 筋から 3 筋への移動合である。

ここまで解説すれば、皆様の頭の中の想定図は以下の図に確定しているはずだ。

【想定される初形の一例】

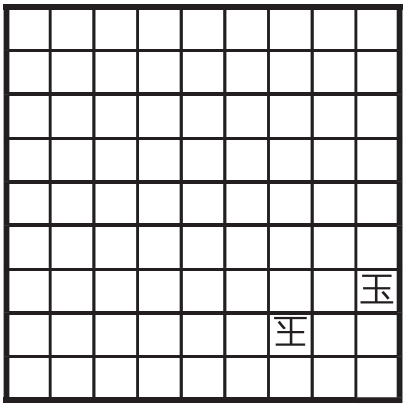


持駒　角

飛が成っているかどうかで皆様が思い描く想定図に若干の違いは生じるものの、14 の生角配置はこれしかない。2 手目、14 地点の角が 32 に動く移動合は確定事項であり、他の可能性はない。よって 21 地点の角の石化も確定である。2 手目の X に対する受けは残っていない。

すべてのピースがかちりとはまって詰め上がりが証明されるのも爽快感があって良い。

（16）上谷直希
（Web Fairy Paradise 148, 2020）



持駒　なし

マドラシ協力自玉詰　4 手
（透明駒 2+1）

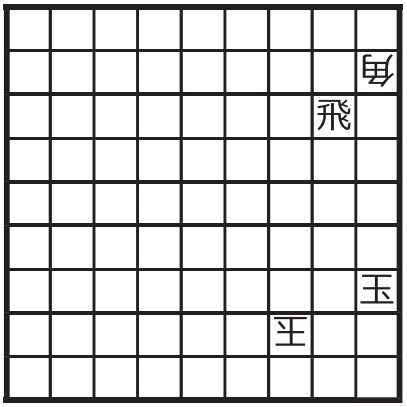
X、47 飛、X、27 飛成迄 4 手。

自作には合駒を 2 手後に動かすものが多い。普通詰将棋および協力詰ではパターンが限られるが、フェアリールールを使用すればより多彩なバリエーションが考えられる。

さて本作。2 手目の瞬間にはこの 47 飛が合駒なのかマドラシ対（攻方の 37 飛 or48 飛に対する応手）なのかは分からないが、4 手目に 47 の飛が動かせる余地があるとしたら合駒の場合のみであるため、消去法的に合駒であることが確定する。

さて 47 飛合が直後に動かせる局面を想定してみるが、普通詰将棋でお馴染みのシフマンの形はうまく構築できないはず。ここはマドラシルールでうまい形がないか探してみよう。そうすれば、以下のような図に辿り着けるかもしれない。

【想定される初形の一例】



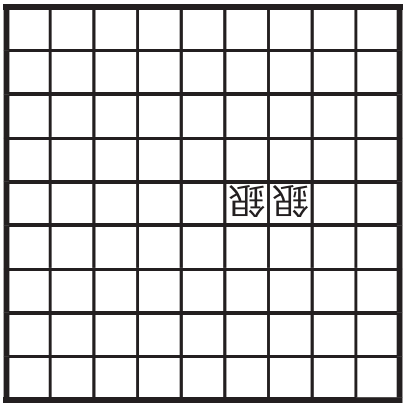
持駒　なし

上の初形から 56 角、47 飛合、27 飛成と進めれば、うまいタイミングで攻方角は石化され、47 の飛車は自由になる。マドラシルールを活用した合駒のアンピンの手法といえるだろうか。自由の身になった飛が自玉を仕留める詰め上がり。キビキビとした手順だと思っていただければ幸い。

なお、3 手目 28 飛成の可能性は 3 手目が王手放置の禁手となるため棄却される。

○点鏡

(17) 高坂　研
(第 3 回透明駒解答選手権　2020/8)



持駒　なし

点鏡協力自玉詰　4 手（透明駒 1+1）

X、36 銀右 (X=74 玉、75 玉)、
65 玉、45 銀寄迄 4 手。

双方の玉が透明な作品。さぞかし難しいのかと身構えてしまうが、攻方は玉で玉に王手をかけるしかなく、そのためには銀の助力を得るしかなさそうだ。

当然初手は X しかない。そもそも、相手玉が玉の利きのままだと王手の隙が無いため、相手玉は 65 か 75 地点に居るとしか考えられない。先手玉は相手玉の腹か尻から王手しているのだろう。

2 手目は X とするのが一番素直で、玉が逃げたと解釈できるがこれでは双方の玉について有力な情報が得られない。玉位置の情報を得るために銀を動かしてみよう。すなわち今度は自玉も銀の利きになることになる(銀は横に動けないので、自玉は相手玉の尻から王手をかけていることが確定する)。ただし、相手玉の利きは銀のままにしておかないと 3 手目

に王手をかけることができなくなる点は要注意。よって例えば 2 手目 36 銀上といった手は選べなくなる。

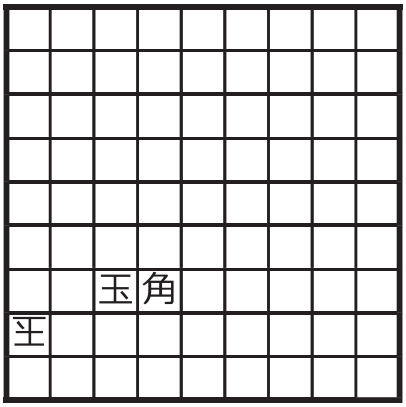
ここまで考えれば、2 手目は 46 銀左か 36 銀右かのどちらだと分かる。後は二者択一であたってみよう。後者を考えれば、二手目の局面で攻方玉が 74、受方玉が 75 に居ることが確定し透明化は解除される。あとは 65 玉とやはり銀の利きの間隙を縫うように王手をし、最後は 45 銀寄。この手が味わい深い好手。これまで銀の性能に甘んじていた玉の立場が逆転する。かくして攻方玉を左右から挟撃し詰め上がり。

恥ずかしながら私は性能変化系のルールの理解が苦手で、本作についても適切な理解ができているか今でも不安なのだが、少なくとも本作のようなパズルチックな仕上げ方については好ましい印象を受ける。本稿で取り上げた高坂氏の透明駒作品のなかでは一番好みの作品かもしれない。

太刀岡甫ー利きが入り乱れて頭がこんがらがる。パズルみたいで楽しい。

○天竺

（18）高坂　研
（第 4 回透明駒解答選手権　2020/10）



持駒　なし

天竺協力詰　5 手（透明駒 0+1）

89 角、21 玉、X、11 玉、
12 角成迄 5 手。

角 1 枚のみではどう見ても戦力不足。手順のどこかで戦力を補給しなければならないと思われる。

まず私の思考順を述べてみる。初手 76 角から始めるのは詰め上がりを構築できそうにない。合駒稼ぎも間に合わないし、何より作意順らしい " 華 " がない。となると初手は 89 角か。玉を左下で詰ますのは難しいので、角の利きで玉を飛ばすのだろうと考えていた。作者を信頼して、2 手目 21 玉は決め打ち。3 手目をどうするかであるが、ここで X としないと戦力不足が解決されないばかりか相手の守備力が強すぎて詰まない。

ここまで考えてあと 2 手に気付けないのだから人の思考は度し難い。ここで 77 の駒がなぜ玉なのかに思いを巡らせることができれば良かったのだが……。

正解は 11 玉からの 12 角成！　自玉に王手をかけてしまうような一着で、3 手目の透明駒の情報を得ようとしている。12 角成が合法であるためには 22 ～ 66 のラインに何らかの遮蔽駒が必要で、そんな駒は 33 の桂か 22 の飛ぐらいしかないが、4 手目に玉が横に動いたという情報から透明駒は 22 の飛に確定するという寸法だ。

透明駒の枚数も少なくシンプルな作品に感じられるかもしれないが、解図は難しく第 4 回解答選手権でも正解者は 1 名のみであった。駒の利きが変化する透明駒作品の解図はいつも難しい。

◯最後に

透明駒の理解だけでも難しいのに、さらにルールを複合させてより深く、より悩ましいロジックとなった作品が勢揃いとなった第Ⅲ部。本著のなかでも屈指の難所であることは間違いない。様々なルールが登場する分野であるため、お初にお目にかかるルールに困惑している読者の方もいらっしゃるだろう。そんな方は是非、「フェアリールールの定義」を先に確認してみてほしい。ルールの理解に役立つこと請け合いだ。

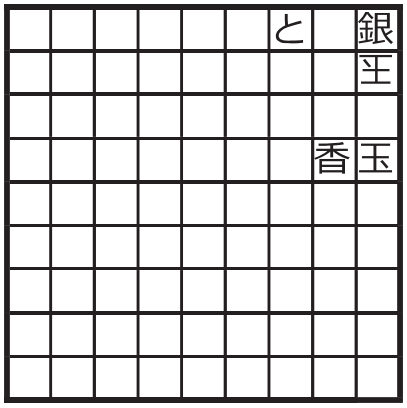
しかしルールを理解した後でも第Ⅲ部の作品には苦戦を強いられるかもしれない。それだけ透明駒とフェアリールールの組み合わせは複雑怪奇だ。原稿作成当時の発表作は手数が短い作品ばかりであったが、今後より発展的な作品が登場したとしたら、一体どうなってしまうのだろうかと今から戦々恐々としている。私も淡々と解説しているようで、裏では四苦八苦したり、作者にヒントをもらったり、ギブアップして答えを教えていただいたりしてなんとか完成にこぎつけている。なんともお恥ずかしい話ではあるが、逆にいえば、「本部の作品が難しいと感じたのはあなただけではない」と私は自信を持って証言できる。

一読で理解する必要はない。じっくりと、時間をかけて楽しく苦しんでほしい。苦しみに見合うだけの内容は保証する。

透明駒 IV
練習問題　解答

高坂　研

(1) 高坂　研
(Problem Paradise 91, 2020)



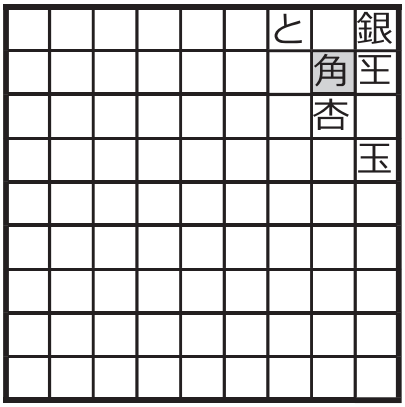
持駒　なし

協力詰　1 手（透明駒 1+0）

23 香成迄 1 手。

　もし透明駒が先手の駒台にあったとしたら、直前の後手の合法な着手がない（どこに後手玉を動かしても、あり得ない両王手がかかったり、玉同士の接触が起きてしまう）。このことから、先手の透明駒は 22 か 23 にいることになる。従って 22 香成は illegal であり、また 22 銀成は同玉と取られてしまう（この場合、後手は透明駒が 23 桂だと主張しているのだ）。

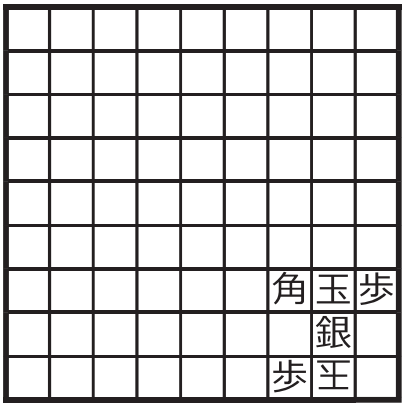
（詰め上がり図）



（杏＝成香）

　正しい手は 23 香成であり、これにより 22 に透明角がいることが証明できる（直前の後手の着手は 21 玉→ 12）ので、これで詰。

(2) 高坂　研
(Web Fairy Paradise 137, 2019)



持駒　なし

協力詰　1 手（透明駒 1+0）

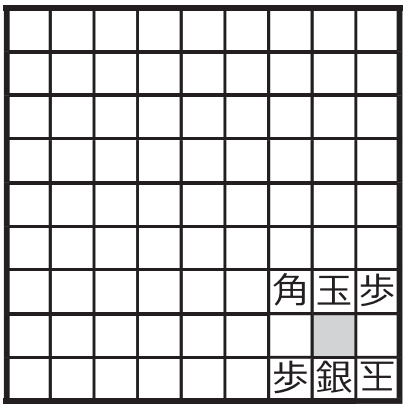
X 迄 1 手。

　仮定より、先手の透明駒の着手は常に王手であると看做されるので、初手に X とすれば殆ど詰んでいるように見える。唯一、X= 角である場合を除けば。つまり、本作が解けたという為には、X ＝角

があり得ないことを証明しなければならない。

この局面に至る手順は、どのようなものだったのだろうか？一寸考えてみれば分かるように、それは下のような配置で 28 銀と透明駒を取り、それから 29 玉とする以外ない。

（2 手前の局面）

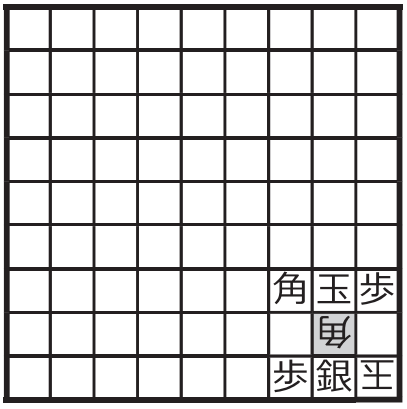


持駒　なし

＊ 28 には何か玉方透明駒がいる

問題は、この図において 28 に後手の角（馬）を追加した局面が合法かどうかだ。このうち馬が非合法なのはすぐに分かる。一方、角の方は一見あり得る局面に見えるのだが…。

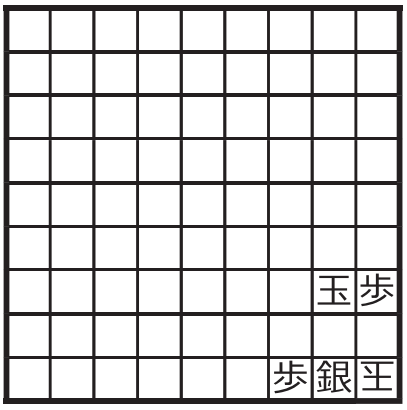
（28 透明角の場合）



持駒　なし

更に逆算を続けてみよう。現在先手番だから、直前の着手は後手のものであり、それは 28 角打しかない。この角打を戻すと今度は 37 角が 19 玉に王手をかけてしまっているので、先手の逆算はこの角をどこかに動かすか、或いは駒台に乗せるかだ。そうすると、以下のような局面を得る。

（4 手逆算した局面）



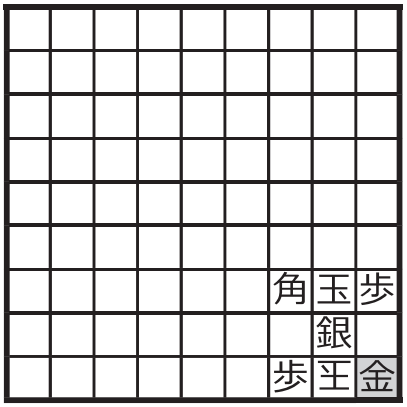
持駒　角

＊ 37 角を持駒に戻した場合

この局面は後手が戻す番だが、合法な逆算はもはや不可能である。これは 28 の透明駒を角だと仮定した為に起こった矛盾なので、先手が 28 で取った駒は角ではなく、従って初手 X で詰んでいることが証明された。

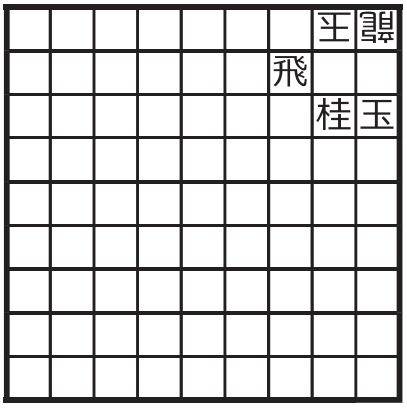
ちなみに、先手が 28 で取った可能性がないのは角（馬）だけである。

（詰め上がりの一例）



（19 金は、他の駒の可能性もある）

(3) 高坂　研
(Problem Paradise 79, 2017)



持駒　なし

詰将棋　1 手　（透明駒 1+1）

12 飛生迄 1 手。

初手 31 飛成（31 桂成）は、いずれも同 X と取られてしまって逃れ（この場合は、先手の透明駒が 12 にいることになる）。詰将棋なので、3 手以上かかっても詰めば余詰なのだが、初手から 11X（11 桂成）としても 32 玉とされてとても捕まらない。

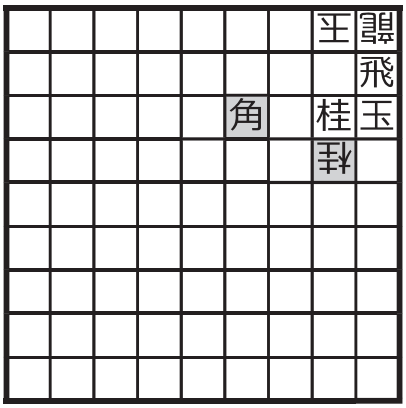
まず、12 の桝目に透明駒がいるかどうかで分類してみよう。すると

①玉方の透明駒がいる
②攻方の透明駒がいる
③透明駒はいない

の 3 通りになるが、このうち①は、現在先手番であることと矛盾（∵ 12 の透明駒は角か桂ということになるが、いずれも直前の後手の着手がない）。これより、②か③のどちらかである。

初手 12 飛生とすると②も否定されるので結局③ということになるが、すると出題図では先手玉に王手がかかっていたことになり、この場合の直前の着手は 12 桂→ 24 しかない。更に、12 飛生が王手になることから 43―98 のラインのどこかに攻方角 (馬) がいることになる。以上より、これで詰んでいることが証明された。

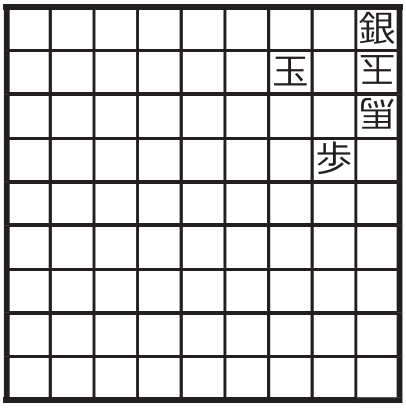
（詰め上がりの一例）



（43 角は他の位置の可能性もある。また、馬の可能性もある）

(4) 高坂　研

(Problem Paradise 82, 2018)



持駒　なし

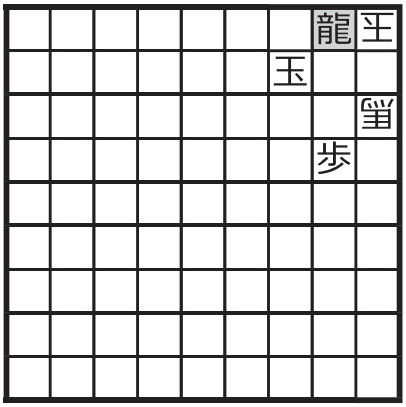
協力詰　3 手（透明駒 1+0）

X、11 玉、21 飛成迄 3 手。

一見、例えば 14 透明歩（或いは 25 透明桂）がいて 13X、11 玉、22 角迄 3 手詰という余詰が成立するように見えるが、勿論これは不成立。何故だかお分かりだろうか。

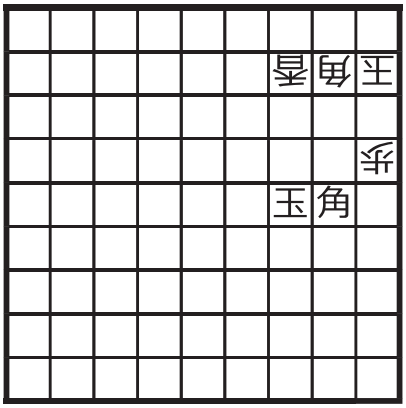
現在先手番ということは、直前の着手は後手のものだった筈。それは一体何だろうか？すぐお分かりのように、それは 14 馬を 13 に引く手以外あり得ない。ところが、14 馬は 32 玉に王手をかけてしまっている。つまり、直前の後手の合法な着手が存在する為には、先手の透明駒は 23 にいなければならないのだ！23 から 12 玉に王手をかけられる駒種は飛か香の 2 種しかない。そして 2 手目 11 玉により、初手は 22 飛生に確定する。以上より、作意順は確かに成立することが示された。

（詰め上がり図）



(5) 高坂　研

(Web Fairy Paradise 146, 2020)



持駒　なし

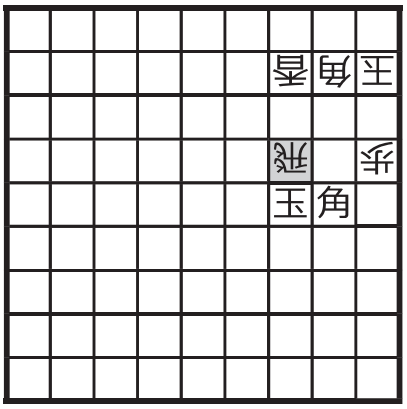
キルケ協力詰　3 手（透明駒 0+2）

34 角、13 玉、X 迄 3 手。

先手は初手で玉方透明駒を取り、3 手目にそれを打っているのだが、3 手目 X が王手になる為には桂以上の駒でなければならない。もし桂ならば、初形で 34 に透明桂が、そして 21 に何か玉方透明駒が配置されていたことになり、これは確かに詰んでいる。同様の議論は銀・金でも成立する（尚、角は売り切れ）。問題は、透明飛が配置されていた場合だ。持駒に透明飛があった場合は、どこから王手したのか不明なので詰みを宣言でき

ないのだが…。

（初形で 34 に透明飛がいた場合）

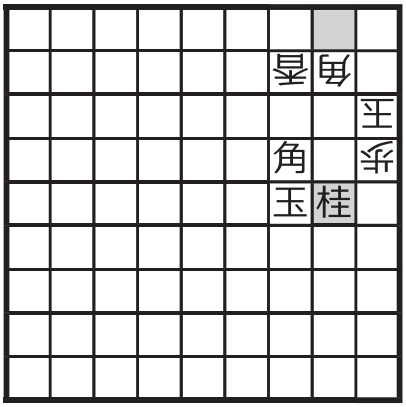


持駒　なし

ここで 34 角と透明飛を取り、これが先手の持駒になるのだから、もう一枚の玉方透明駒は 82 にいる筈だ。一見何の問題もなさそうだが、実はこれ、不可能局面である。

直前の玉方の手は何だったのだろうか？ 32 香の配置から、34 飛打ではあり得ない。すると直前の手は飛で 34 にいた先手の駒を取る手だったことになるが、その取られた駒はどこに行ったのだろうか。先手陣は全て空いているのだから、何か普通駒を取ったのだとすれば、それが復活していないのはオカシイし、もし先手の透明駒を取ったのだとしても、出題図における（0+2）という表記に反する。以上より、初形局面で 34 に飛がいることはあり得ないことが示された。従って、3 手目の X もまた飛ではないことになり、作意順で確かに詰んでいることが証明された。

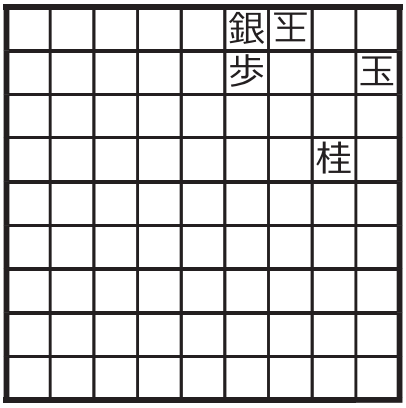
（詰め上がりの一例）



（25 桂は、他の駒の可能性もある）

(6) 高坂　研

(Web Fairy Paradise 141, 2020)



持駒　なし

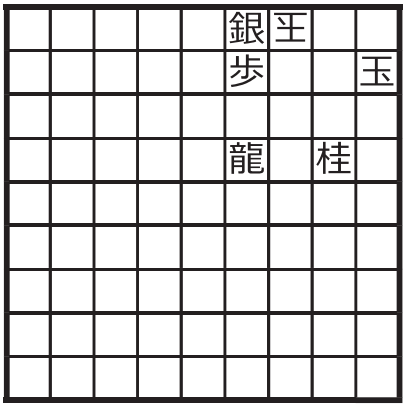
協力自玉詰　4 手（透明駒 1+1）

X, X, X, X 迄 4 手。

これを満たす着手は、33 龍、32 合、22 龍、同 X しかない。だが、もし 2 手目の合駒が飛または金なら 4 手目で詰んでいないが、大丈夫なのだろうか？しかし、実はこの合駒はありえないことが、簡単なレトロ解析によって判明する。

もし 2 手目が飛（金）だった場合、これは移動合ではありえないので、出題図は次のような局面だったことになる。

（2 手目が打合だった場合の初形）

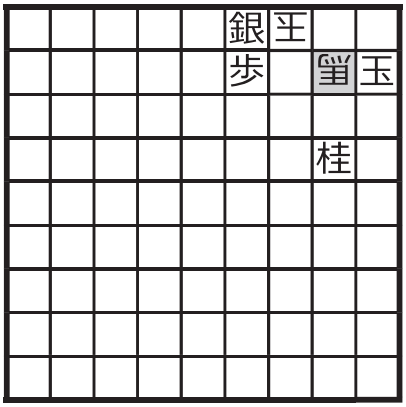


持駒　なし

しかし、これは illegal である。何故なら、現在先手番ということは直前の着手は後手だった筈だが、そのような合法な逆算手は存在しないからだ。

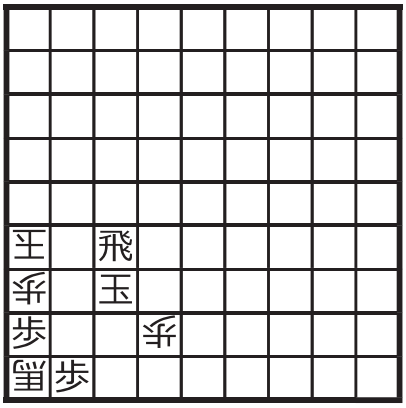
以上より、2 手目の合駒は打合ではなく移動合だったことになり、該当するのは龍か馬しかない。従って、たしかに 4 手目の局面は詰んでいることが証明された。

（詰め上がりの一例）



（22 馬は龍の可能性もある）

(7) 高坂　研
(Problem Paradise 77, 2017)



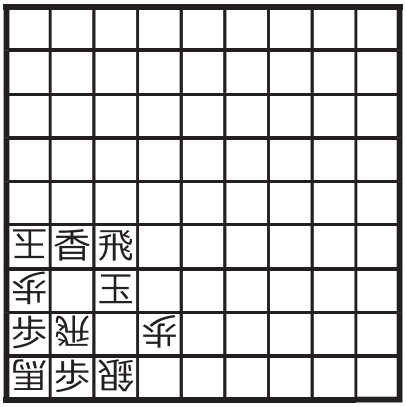
持駒　桂

協力詰　5 手（透明駒 0+2）

88 桂、同 X、86 飛、95 玉、
96 飛打迄 5 手。

86 に玉方透明駒があるのは明らか。また、初手で 88 に桂が打てることから、初形で先手玉には 99 馬により王手がかかっている。この王手は一体どのようにしてかけられたのだろうか？

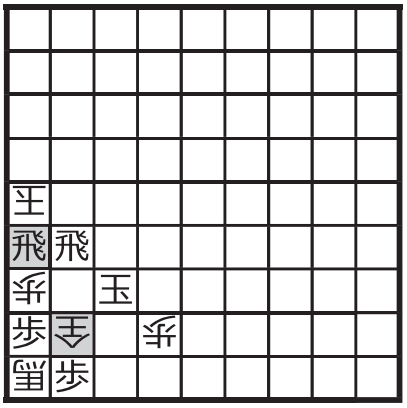
それは、2 手目で桂を取った駒による開き王手ではありえない。唯一の可能性は、88 にいた飛が 86 にあった先手駒を取ったというものだ。即ち、出題図の一手前は、例えば次のような局面だったことになる。



持駒　桂

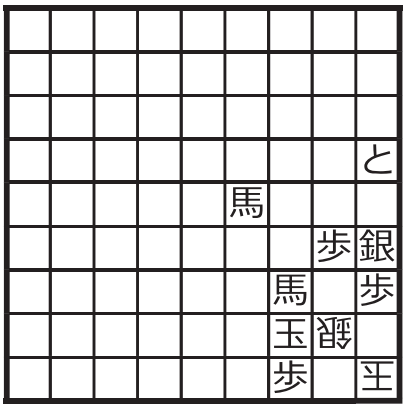
ここから 86 飛生と王手をかけて出題図になったという訳だ。従って、先手の駒台には可視化した飛があることになり、最終手が正当化される（勿論、詰上りにおいて 88 にある駒は玉方の成銀である）。

（詰め上がり図）



（全＝成銀）

(8) 高坂　研
(この詰将棋がすごい！ 2015)



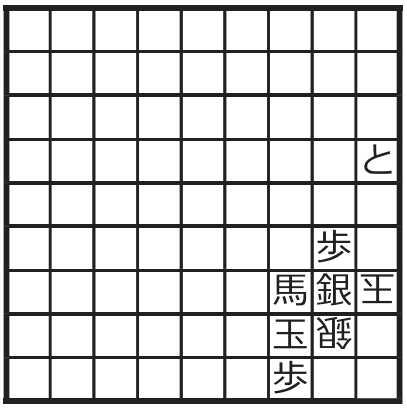
持駒　なし

詰将棋　9 手（透明駒 0+1）

18 馬、同玉、27 銀、17 玉、
X、19 銀生、18 銀、同玉、
27 馬迄 9 手。

何はともあれ作意通りに 4 手進めると、次の局面になる。

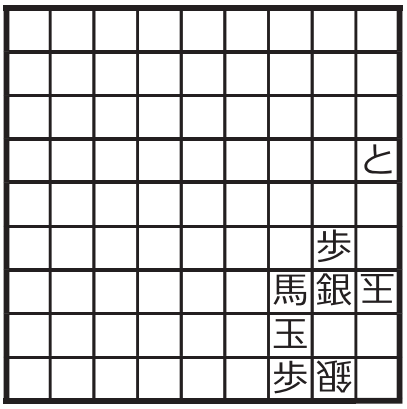
（5 手目の局面）



持駒　なし

これが問題の局面。ここで攻方は X とするが、これに対し 29 銀生として「攻方が初手で取った透明駒は成桂だった」と玉方に主張されたら、どうすればいいのだろうか？

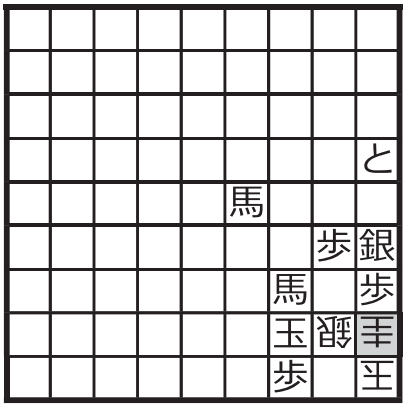
（逃れ図？）



持駒　なし

しかし、それはあり得ないことが、以下のように証明できる（ここからは簡単なレトロ解析である）。

（18 成桂のある図）

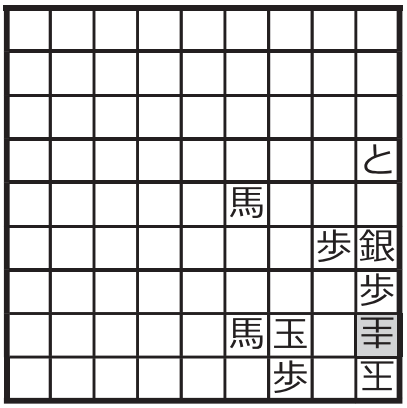


持駒　なし

（圭＝成桂）

初形において 18 に成桂があったとして、矛盾を導こう。出題図で攻方の手番ということは、この直前は玉方の着手だった筈である。すぐに分かる通り、その手は 28 銀しかない。すると、更にその前の手として、先手は 37 馬を戻すしかない。

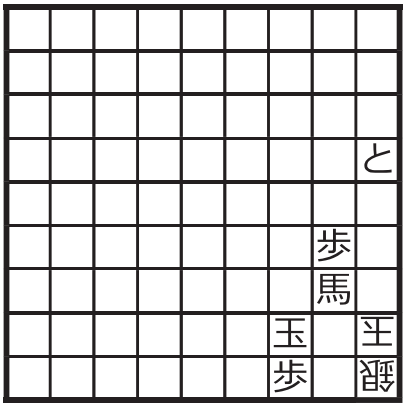
（上図から 2 手戻した図）



持駒　なし

ここでもはや玉方の戻し手は（illegal なものを除いて）存在しない。即ち、出題図において、透明駒が 18 成桂だとすると不可能局面である（勿論、桂以外の駒なら 18 に打つことができるので逆算可能だ）。よって、6 手目 29 銀生もまたあり得ないという結論が得られる。従って、玉方は 6 手目 19 銀生として 5 手目の着手が 19 飛（又は香）だったと主張するのが最善となり、以下は簡単に収束する。

（詰め上がり図）



フェアリールールの定義

高坂　研

フェアリー詰将棋について

詰将棋において、指し手に何らかの制限を加えたり、ある条件下で駒の性能を変化させたりといった特殊ルールを追加することがあります。これらのルールを一般に**フェアリールール**といい、フェアリールールを加えた詰将棋を**フェアリー詰将棋**と呼びます(実はこの他にも、フェアリー駒を加えたり、盤面にある種の変形を加えたりといったフェアリー詰将棋が存在し、それらもなかなか興味深いのですが、この「透明駒入門」では扱わないので、ここでは省略させて頂きます)。

これらのフェアリー詰将棋もまた広義の詰将棋であり、二歩や打歩詰は原則禁手です。しかし、将棋及び詰将棋における三大禁手のうち「行き所のない駒」については、ルールにより扱いが異なりますので、詳細については各ルールの定義を参照して下さい。

更に、協力詰と同様、協力系のフェアリー詰将棋も無駄合概念がありません。従って、普通の詰将棋でよくある「合い利かず」の詰め上がりは、協力系のフェアリーでは詰として認められませんので、ご注意下さい。

馴染みのないルールでは、詰んでいるかどうかも最初は分かりにくいでしょう。そこで以下では、盤上で性能変化した駒はゴシックで表しておきます。詰め上がり図で、確かに詰んでいることを各自ご確認下さい。

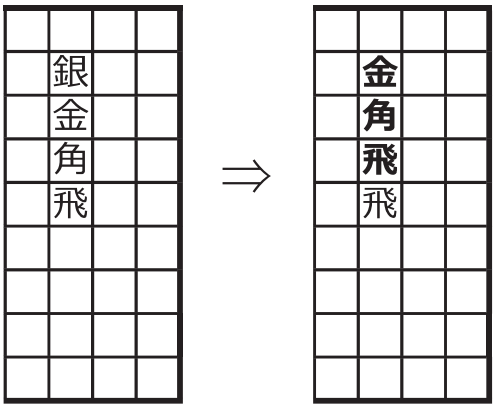
一口にフェアリールールといっても、実に多種多様です。以下では、これらを
(A) 駒が性能変化するタイプ
(B) 着手に制限がかかるタイプ
(C) 取られた駒が復活するタイプ
の順で紹介していきます。

(A) 駒が性能変化するタイプ

安南

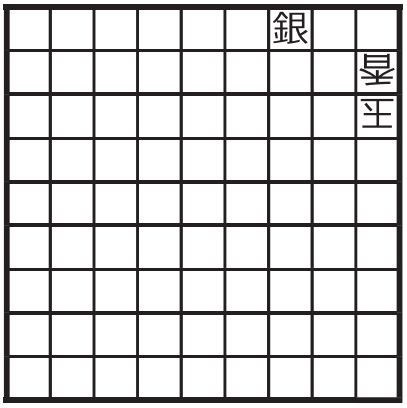
盤上の駒は、そのすぐ下の枡に味方の駒が存在するとき、その駒の性能に変化する。ただし、3 枚以上駒が重なった場合でも、性能変化が連続して伝播することはない。

例えば、下図の左側のような配置だと、32 銀／ 33 金／ 34 角はそれぞれ金／角／飛の性能になる。



また、所謂「行き所のない駒」は存在しない。これは、たとえ 11 歩生としても、将来 12 に何か駒が来ることで、この歩が自力で動ける可能性があるからである。

例題１　真Ｔ
（詰パラ　2008/7）



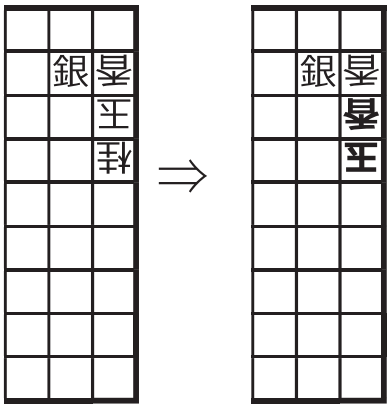
持駒　角

安南協力詰　５手

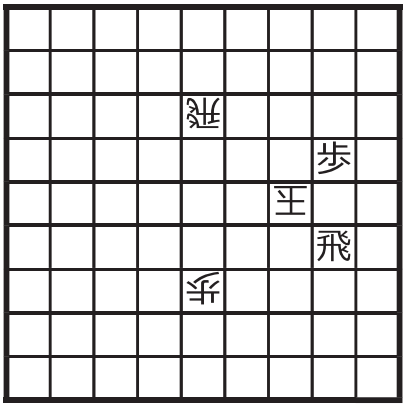
32 角、22 桂、14 角成、同桂、
22 銀生迄５手。

　初手は 31 銀を角の利きにする王手。これに対して玉方は桂合をするが、ここですかさず初手に打った角を成り捨てるのが、気持ちの良い１手。玉は香の利きになっているので同桂と取らせて銀を引けば、これで詰んでいる。

（詰め上がり図）



例題２　神無太郎「刺客」
（詰パラ　1990/9、第４回妖精賞）



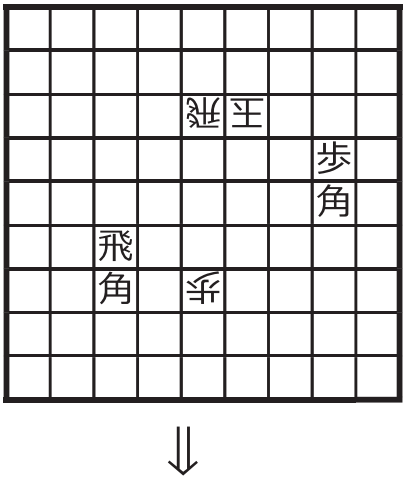
持駒　角角

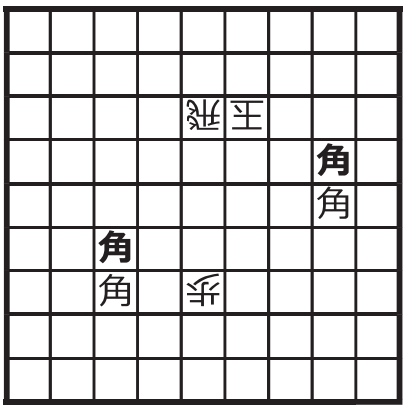
安南協力詰　５手

25 角、44 玉、77 角、43 玉、
76 飛迄５手。

　最終手 76 飛とすると、この飛は角の利きになり、25 角は元の利きに戻るので、両王手になっていてこれで詰。詰め上がりで角の利きを持つ駒が４枚あるので、「四角」→「刺客」という訳。

（詰め上がり図）



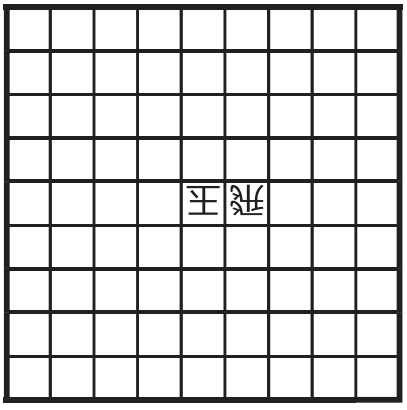


対面

盤上の駒は、すぐ前の枡に敵の駒があるとき、動きがその駒の動きに変化する（言い換えると、敵駒と向かい合うと互いに利きが入れ替わるのである）。

１段目の桂香歩は成らなければならないが、２段目への桂不成は可。

例題３　加賀孝志
（詰パラ　1992/6）



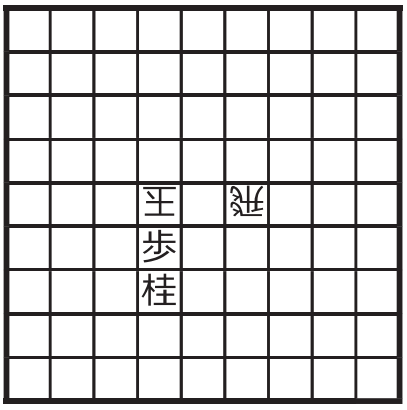
持駒　桂歩

対面協力詰　３手

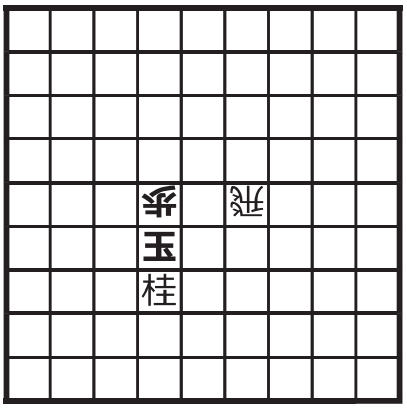
67 桂、56 玉、46 歩、65 玉、
66 歩迄５手。

序の２手は舞台作り。３手目 46 歩と打ち、これを 66 に滑らせるのが面白い手で、この瞬間歩と玉の利きが入れ替わるので、これで詰。尚、詰め上がりで玉が 66 歩を取ったとしても、今度は 67 桂が玉の利きになるので、王手を防いだことにならない。

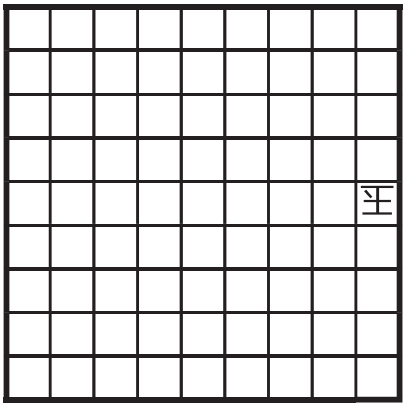
（詰め上がり図）



⇓



例題４　左　真樹
（詰パラ　1991/8）



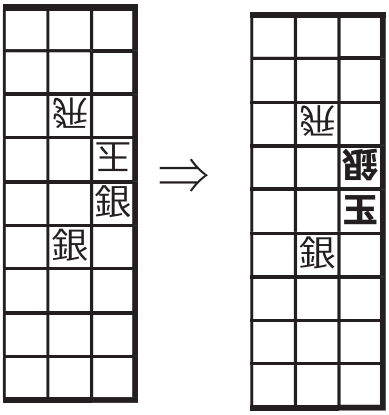
持駒　銀銀

対面協力詰　５手

24 銀、23 飛、26 銀、14 玉、
15 銀打迄 5 手。

初手 24 銀に対する 23 飛が、「対駒」と呼ばれる対面独特の合駒。これで銀が飛の利きになったので、3 手目 24 銀を 26 に移動することができ、14 玉に頭銀で詰。最終局面で、玉は銀の動きになっているので 13 玉とはできない。

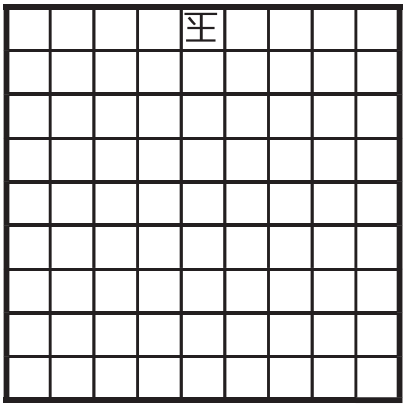
（詰め上がり図）



背面

盤上の駒は、すぐ後ろの枡に敵の駒があるとき、動きがその駒の動きに変化する。また、「行き所のない駒」は存在しない。

例題 5　神無大九郎
(Onsite Fairy Mate 1999/8)



持駒　桂桂

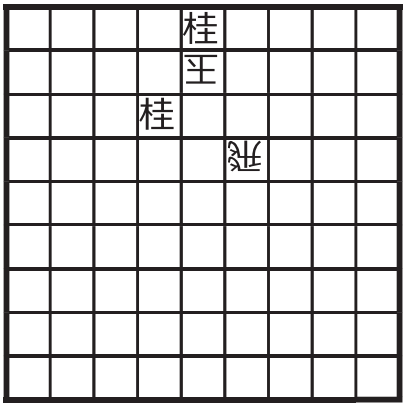
背面協力詰　5 手

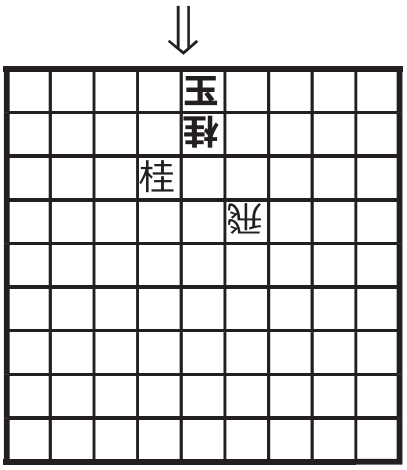
43 桂、44 飛、63 桂生、52 玉、
51 桂打迄 5 手。

初手は桂を打つよりないが、これに対して玉方は 44 飛と「背駒」を打って受ける。これで飛の利きになった桂を 63 に動かして再度王手をかけ、52 玉に対して 51 桂打（反則ではない！）とすると、これで詰。

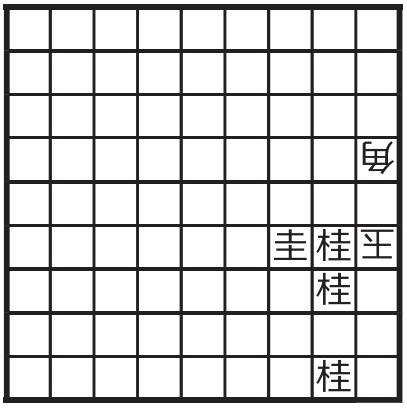
桂の利きになった玉が 64 に跳ねると詰まないように見えるが、その瞬間玉の利きに変化した 63 桂に取られてしまう。

（詰め上がり図）





例題 6　山田嘉則
（詰パラ　1993/3）



持駒　角歩

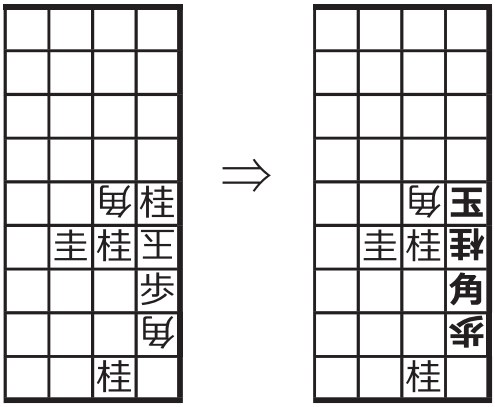
背面詰　5 手　　（圭＝成桂）

25 角、同角、17 歩、18 角、
15 桂迄 5 手。

初手から 17 歩は打歩詰。しかし、初手に角を捨てておいて 17 歩と打つと、この手が今度は打歩詰にはならない。何故なら、18 角という「背駒」により詰を回避できるからだ。

角合を発生させておいて 5 手目に 15 桂とすれば､桂と玉は利きが入れ替わり、更に 17 歩が角の利きになっているのでこれで詰。

（詰め上がり図）

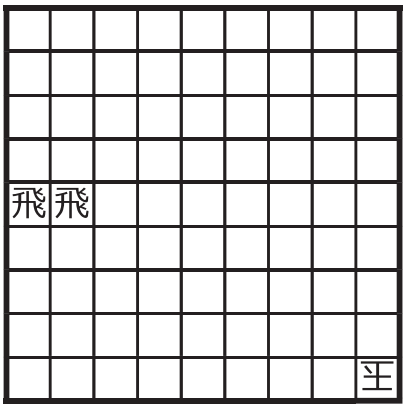


天竺

双方の玉は、王手をかけられたとき、王手をかけた駒の性能に変わる（両王手の場合は、両方の駒の性能を併せ持つことになる）。

「行き所のない駒」については、普通の詰将棋と同様禁手。

例題 7　ほっと
(Web Fairy Paradise 105, 2017)



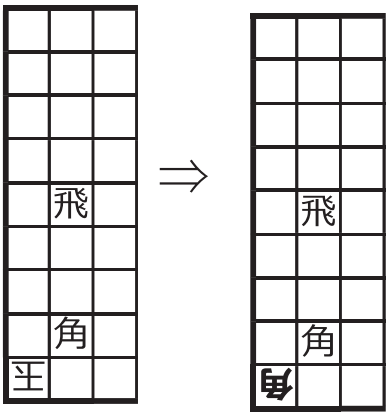
持駒　角

天竺協力詰　3 手
b) 95 飛→桂

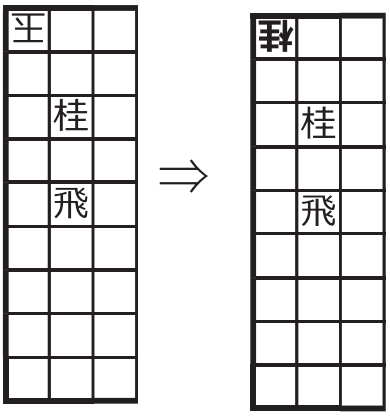
a) 99 飛、同玉、88 角迄 3 手。
b) 91 角、同玉、83 桂生迄 3 手。

a) では、99 飛の瞬間に玉は飛の動きになるので、これを同玉と取ることができる。そして 3 手目 88 角と打てば、今度は玉が角の動きになるので、これで詰。一方 b) では、91 角の瞬間に玉が角の動きになり、同玉に対して 83 桂とすれば、今度は玉が桂の動きになるので、これで詰。

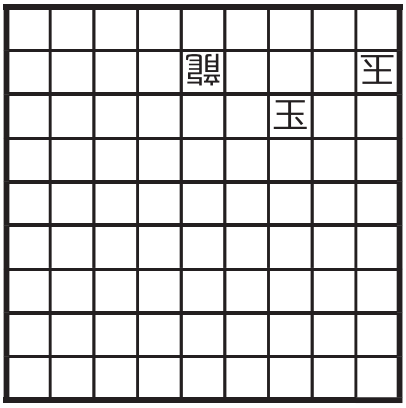
(a の詰め上がり)



(b の詰め上がり)



例題 8　汐多ダダ
(詰パラ　1989/10)



持駒　飛銀

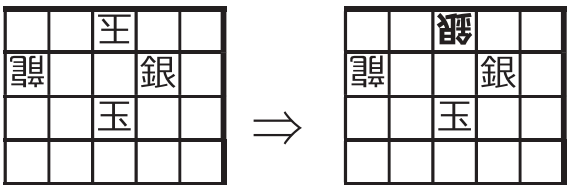
天竺詰　5 手

23 銀、21 玉、31 飛、同玉、
22 銀生迄 5 手。

初手 23 銀に対し 13 玉なら 14 飛迄。よって 2 手目は 21 玉と下がるが、31 飛と捨てて 22 銀生とすると、何とこれで詰んでいる！

というのは、玉は銀の利きになっているので 41 玉とは出来ないし、同龍と取るとその瞬間に 33 玉が龍の利きになるので、王手を防ぐ手にならないのだ。ルールを活かしたフェアリーメイトが印象的な作。

(詰め上がり図)



マドラシ、Kマドラシ

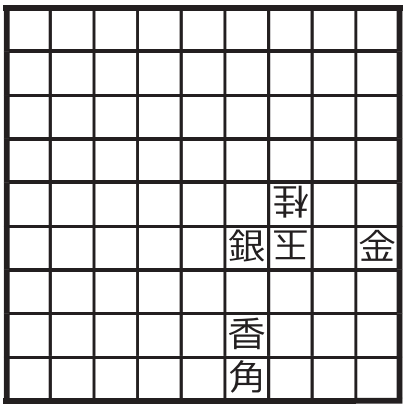
マドラシ：玉以外の駒は、同種の駒から取りをかけられたとき動けなくなる。

Kマドラシ：マドラシのルールを玉同士にも適用する。

同じ駒であっても、生駒と成駒（飛と龍など）は異種として区別する。また、成香と成桂なども、その動きは同一だが、やはり異種として区別する。「行き所のない駒」については、普通の詰将棋と同様禁手。

マドラシとKマドラシの違いは、「玉同士の接触を認めるかどうか」である。通常のマドラシでは、玉が玉に体当たりする手は禁手だが、Kマドラシでは認められる（勿論、そうなるとどちらの玉も動けなくなる）。

例題 9　山路大輔
(Web Fairy Paradise 105, 2017)



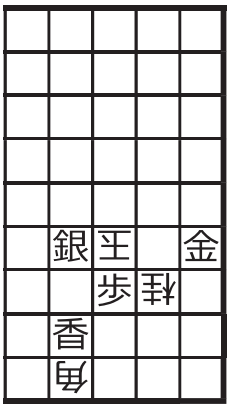
持駒　歩

マドラシ協力詰　5 手

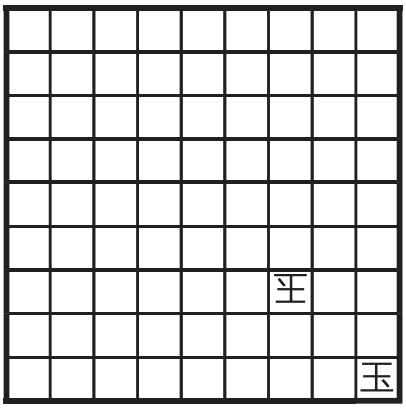
27 角、49 角、38 歩、27 桂生、
37 歩迄 5 手。

初手から 37 歩は打歩詰。そこで、初手は 27 角とし、49 角と受けさせる。それから 38 歩と打てば、これが角の利きを復活させる王手となる。持駒の歩を 38 に置けたので、あとは角を桂に不成で取らせておいて 37 歩と突けば、これで詰。「先打突歩詰」を明快に表現した、センスの良い好作。

(詰め上がり図)



例題 10　上谷直希
(Web Fairy Paradise 148, 2020)



持駒　銀

マドラシ協力詰　7 手
b) Kマドラシ協力詰

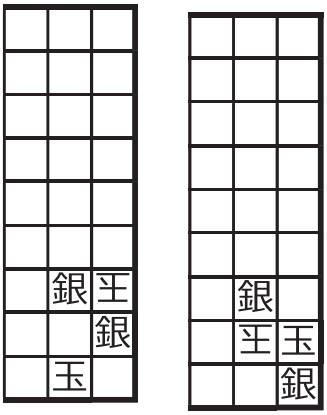
a) 38 銀、29 銀、同玉、26 玉、
27 銀、17 玉、18 銀打迄 7 手。
b) 28 銀、38 玉、27 銀、18 銀、
同玉、28 玉、19 銀迄 7 手。

a) では、初手 38 銀に対して 29 銀とするのが、ルールを活かした受け。これを玉で取ってから、再び同様のマドラシ合をされないよう、盤の端に追い込んで詰める。

しかし、b) では同様の手順は成立しない。何故なら、Kマドラシの場合、玉の体当たりが認められるので、7 手目 18 銀打に対して 8 手目 28 玉！として逃れるからだ。だが、体当たりをした玉はそのまま動けなくなるので、b) ではそれを利用した筋を探すことになる。

マドラシとKマドラシの微妙な違いを端的に表現した軽作。後手が銀を打つ地点が a) では玉の腹に、b) では玉の頭にと変化することも、対照性を感じさせる。

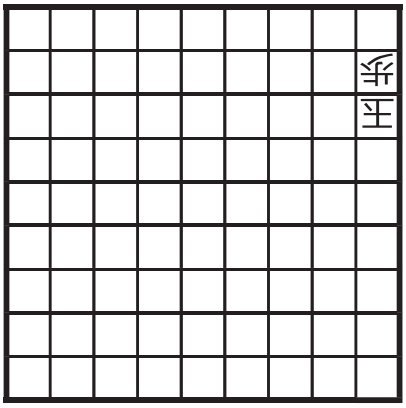
(a/b の詰め上がり図)



点鏡

55 の地点に関して点対称な位置にある 2 つの駒は、敵味方関係なく互いにその性能が入れ替わる。また、「行き所のない駒」は存在しない。

例題 11　高坂　研
(Web Fairy Paradise 127, 2019)



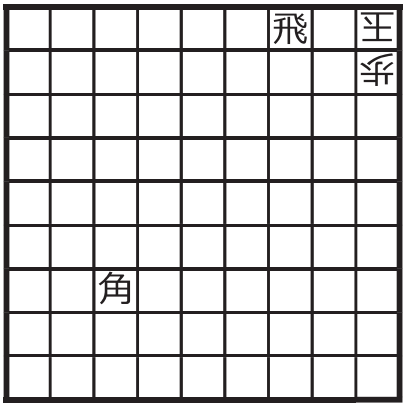
持駒　飛角

点鏡協力詰　5 手

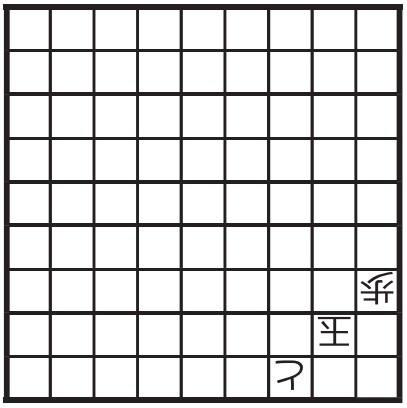
79 角、22 玉、31 飛、11 玉、
77 角迄 5 手。

初手は 3 手目と関連した遠打で、これにより 31 飛が角の利きになる。11 玉としたところで 77 角とすれば、どちらも元の動きに戻り、これで詰。所謂「復活両王手」を簡潔に表現している。

(詰め上がり図)



例題 12　高坂　研
(Web Fairy Paradise 127, 2019)



持駒　角角桂

点鏡協力詰　5 手

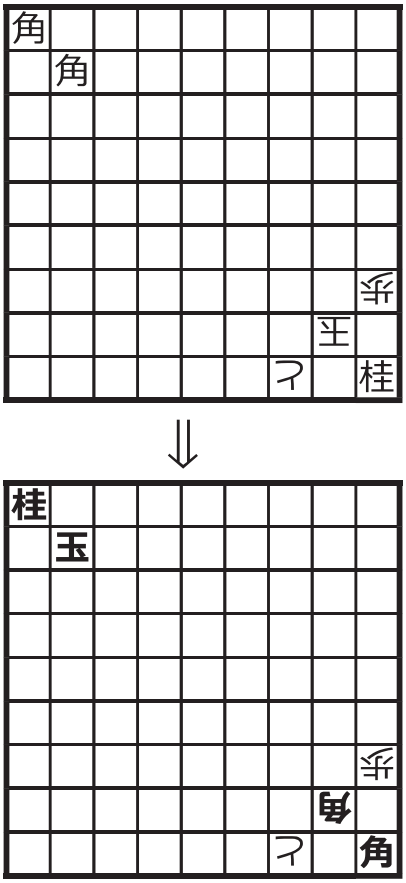
91 角、19 玉、82 角打、28 玉、
19 桂迄 5 手。

　初手 91 角に対して 19 玉！と逃げるのが、点鏡独特の受け。角を玉の利きにして王手を防いでいる訳だ。続く 82 角打に対して 28 玉というのも同様の手だが、5 手目に 19 桂と打つと、何とこれで詰んでいる。

　以下の詰め上がり図を見て頂けばお分かりのように、最終局面では、28 玉も 19 桂も角の利きになっている。この桂を同玉と取ると、82 角が元の利きを取り戻してしまうし、19 と 91 を結ぶ対角線上のどこに動いても、角になった 19 桂の利きからは逃れることができない。

　点鏡でなければ表現できない、何とも奇妙な応酬に面白みを感じて頂ければ幸い。

(詰め上がり図)



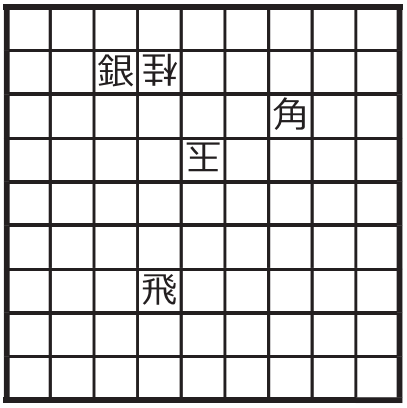
(B) 着手に制限がかかるタイプ

強欲

　合法な着手が複数あるときは、その中から駒取りの着手を優先しなければならない。

　「行き所のない駒」については、普通の詰将棋と同様禁手。

例題 13　上谷直希
(Web Fairy Paradise 90, 2015)



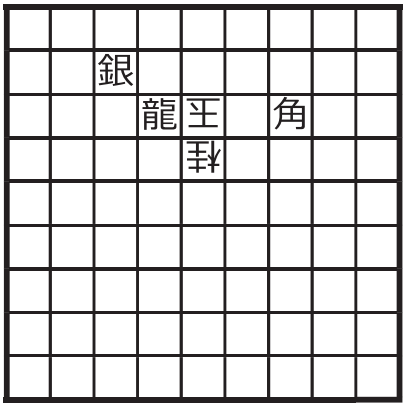
持駒　銀

強欲協力詰　5 手

65 銀、53 玉、54 銀、同桂、
63 飛成迄 5 手。

一見 3 手で詰むように見えるが、初手 55 銀だと 3 手目は強欲ルールにより 62 飛成としなくてはならない。作意順は初手で打った銀をすかさず捨て、軽く詰め上げている。

(詰め上がり図)

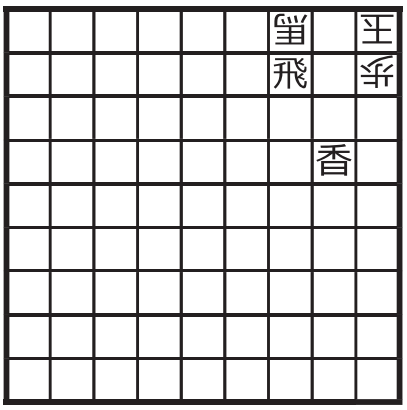


禁欲

合法な着手が複数あるときは、その中から駒取りでない着手を優先しなければならない。

「行き所のない駒」については、普通の詰将棋と同様禁手。

例題 14　高坂　研



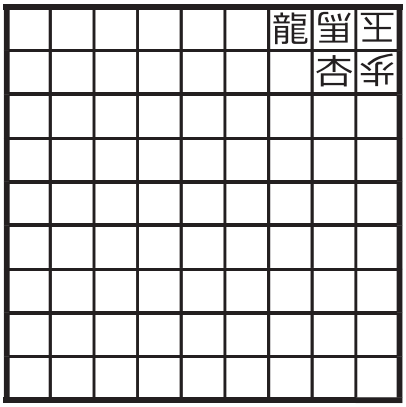
持駒　金

禁欲詰　5 手

22 金、同馬、31 飛成、21 馬、
22 香成迄 5 手。

普通の詰将棋なら、どうやっても詰む形。しかし禁欲なので、わざわざ取れる駒を逃がしているような奇妙な応酬が繰り広げられることになる。

(詰め上がり図)



（杏＝成香）

(C) 取られた駒が復活するタイプ

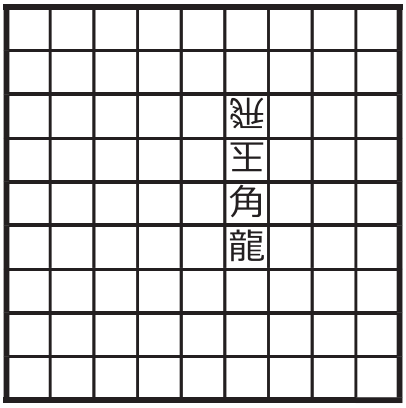
キルケ

玉以外の駒が取られると、その駒は駒取りが起こった枡に最も近い実戦初形での位置に、生駒の形で戻される。もしそこが他の駒に占領されていたり、戻すと二歩となるときは、そのまま持駒になる（例えば、後手の 33 金を取った場合、41 が他の駒に占領されていたら、61 には復活せず、そのまま先手の持駒となる）。5 筋で歩以外の小駒を取った場合は復活場所の候補が 2 ヶ所あるが、この場合は左右どちらに戻しても良い。このとき戻す位置の選択は取った側が行う。

手順表記については、例えば後手の 77 馬を桂で取ったら 22 に角が再生した場合、これを 77 桂／22 角と表記する。

例題 15　変寝夢

(Web Fairy Paradise 40, 2011)



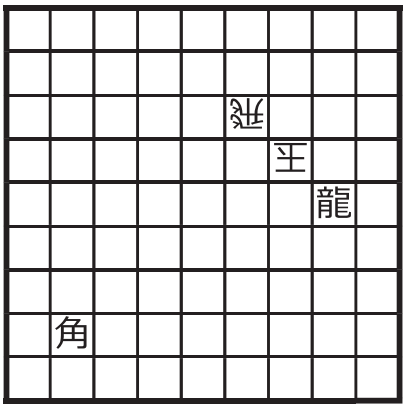
持駒　なし

キルケ協力詰　5 手

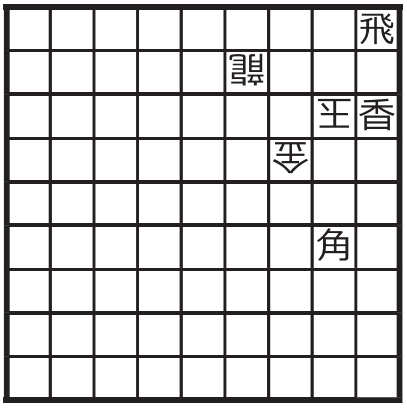
55 龍、35 玉、34 角、同 玉 ／ 88 角、25 龍迄 5 手。

開き王手をかけたくなる初形だが、敢えて大駒を小さく動かす。角を 34 で取らせておいて 25 龍とすれば、玉はこれを取ることができない（取れば 28 に飛が再生するから）ので、これで詰。無駄のない詰め上がりが好印象。

（詰め上がり図）



例題 16　雲海
(Web Fairy Paradise 18, 2009)



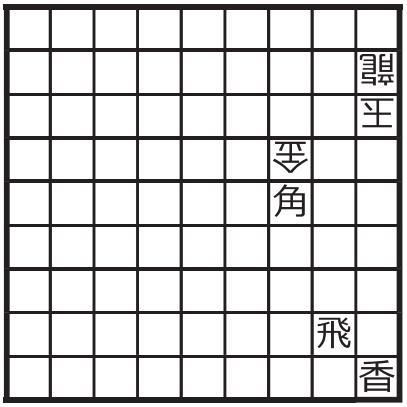
持駒　なし

キルケ協力詰　5 手

12 飛成、同龍／ 28 飛、17 角、
13 玉／ 19 香、35 角迄 5 手。

　連続してバッテリーを作り出し、最後は豪快に両王手で締める。3 手目、じっと下がる 17 角が地味ながら好手だ。

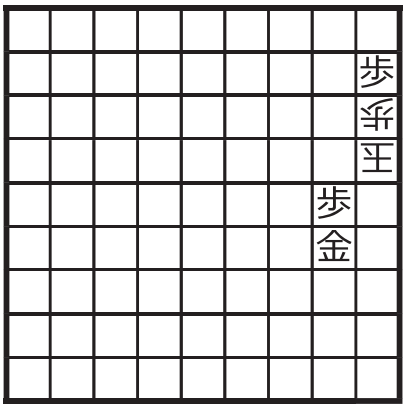
(詰め上がり図)



利き二歩有効／利き二歩無効

　フェアリー詰将棋においては、二歩の扱いについて、普通の詰将棋では生じえない少々厄介な問題があります。下図をご覧下さい。

('Onsite Fairy Mate' のルール説明のページより引用)



持駒　なし

安南詰

　現在、25 歩は金の利きになっていますが、この歩は 14 玉に対して王手をかけているといえるでしょうか？「当然王手でしょ」と思われたかもしれませんが、実はそれほど自明ではありません。

　というのは、12 にも歩があるからです。もし 25 歩で 14 玉を取ったら、その瞬間に二歩になりますね。これより、「14 玉と取る手は反則だから指せない。よって王手はかかっていない」という考え方もできるのです。

　現在では、この局面は王手がかかっていると見なす場合「利き二歩有効」、この局面は王手はかかっていないと見なす場合「利き二歩無効」と呼びます。そし

て、このような局面が発生し得る作品については、出題時にどちらを用いているか明記することになっています。

　尚、左図は「利き二歩有効」ならば既に詰んでいる局面であり、「利き二歩無効」ならば、11 歩成迄の 1 手詰となります。

作者名索引

（カッコを付けた数字は、その作品の解答が載っているページを表す。）

愛　上夫　92
會場健大　14, 17, 21 (73) , 26
上谷直希　22, 23, 24, 25, 25, 34 (78), 35, 41, 46, 52, 55, 58 (87), 58 (90), 59 (91), 59 (94), 113, 116
雲海　118
馬屋原剛　26, 31, 32, 36
岡谷阿矢子　20 (71)
小倉　杏　44
加賀孝志　109
神無次郎　87
神無大九郎　110
神無太郎　87, 108
久保紀貴　20 (68), 20 (69), 23, 57 (83)
幻想咲花　20 (72)
高坂　研　27, 27, 28, 33 (75), 33 (76), 34 (78), 34 (78), 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 44, 45, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 57 (80), 57 (81), 57 (84), 58 (84), 58 (85), 58 (86), 58 (90), 59 (93), 59 (93), 59 (95), 59 (96), 60, 61, 62, 63, 64, 65 (98), 65 (98), 65 (100), 65 (101), 65 (101), 65 (102), 66 (103), 66 (104), 114, 115, 116
佐藤一郎　57 (82)
汐多ダダ　112
須藤大輔　16, 33 (74), 33 (74)
前担当†　29, 33 (77)
相馬慎一　20 (68)
曽和貴史　57 (82)
高砂　裕　20 (70), 30
太刀岡甫　24, 33 (76)
茶園伸吾　31, 72,
時風瑞季　20 (70)
左　真樹　89, 109
藤原勝博　29
変寝夢　117
ほっと　111
真Ｔ　108
山路大輔　113
山田嘉則　110
若島　正　1, 8, 15, 17, 18, 19